昭和貳年七月拾六日

醫學士関場不二彦著

衛生醫事談

東西書屋藏版

日月年

呈
ヒヤワン夫人

丁酉九月

著者拜

Ida Goepp Pierson,
from Dr Sekiba.
Sapporo, Japan. Sept. 4. 1897

鬚長四尺連眉半額
威弧毒矢毛衣鮮食
戴瓠命中唐人褫魄
藩我東垂夷蠻斥跡

蝦夷人圖贊　柴栗山



「アイヌ」醫事談緒言

明治廿五年の秋の頃なりき職に公立札幌病院にありし時一ヶ月中、七八の「アイヌ」患者を診療し餘暇其言語、風俗等より醫事上に渉る諸の事抔を調査せんとを企てたり偶々英吉利國の人「ジョン、バチエラー」君の勸奬により「アイヌ」矯風部より建築したるアイヌ病室（レストハウス）入室患者の治療を擔任し研究の便宜と材料を獲、四年の星霜中、三回草稿を改めて遂に此「アイヌ」醫事談と題する一小冊を編成し得たり。

書中、次序も立たず、思ふ儘に書き綴りたる事なれば行文も錯雜し隨て明瞭を缺くとも多かるべし、猶は研究中の項目數多あるを以て其成就を待ち更に增補改訂して世に問はんとを期す。

書中「アイヌ」語の肢體名稱及病名は頗る苦心して集輯せし者なり「バチエラー」君か終始言語訂正の勞を執られたると、藥用植物の條項に至りて長友宮部金吾君の賜、殊に多きとは深く謝する所なり。

明治二十九年十一月七日北海病院内に於て

關場不二彦

「アイヌ」醫事談參考並引用書類

書名	編著者	年紀
蝦夷風土記	新井　質	寛政九
蝦夷草木志料	曾　槃	寛政十一
休明光記	羽太正養	文化四
蝦夷方言藻汐草	白虹齋	文政元
北蝦夷圖說	間宮倫宗	安政二
蝦夷雜書	開拓使	明治十三
蝦夷風俗彙纂	開拓使	明治十四
蝦夷今昔物語	バチェラー	明治十六
The Ainu of Japan.	同　上	明治廿五
北海道「アイヌ」語植物名詳表	神保小虎 宮部金吾 バチェラー	同　上
Ainu economic plants.	宮部金吾	明治廿六
Beitrüge zur physischen Anthropologie d. Aino.	小金井良精	明治廿六、七

Items of Ainu folklore.

妖怪學講義

バチエラー
井上圓了

明治廿七
明治廿九

「アイヌ」醫事談目次

一　「アイヌ」と衞生上の保護
二　「ポタラグル」「トスグル」「ヘシユリウタレ」
三　イケマ、祈禱、驅疫植物
四　鬼祟及憑狂
五　痘瘡
六　「アイヌ」が識れる外科
七　箭毒
八　「アイヌ」が識れる藥用植物　附毒草
九　「アイヌ」語肢體名稱
十　「アイヌ」語の病名
十一　出產　附「アイヌ」婦女に關する其他の習慣等
十二　「アイヌ」が疾病

十三　「アイヌ」が衛生上の生活等
　イ　「アイヌ」は多毛なる種族なるべし
　ロ　被服は如何
　ハ　飲食物に就き
　ニ　住居
十四　「アイヌ」患者表、統計表、地名別表
十五　雑記
十六　私考
　一　獨立の精神なく文化なきの種族は滅亡するあるのみ
　二　「アイヌ」種族の減少と之が保護の道
　三　古の「アイヌ」と今の「アイヌ」とは殆と別人種なる如き感を來すは何に因するや

アイヌ醫事談

醫學士　關場不二彦述

（一）「アイヌ」と衛生上の保護

天賦質朴にして魯直なる「アイヌ」は行政上我治下に立てより衛生上何如なる保護を受けたるやを調査せんと欲するも記錄の徵すべき者なく殆んと之を知るに由なし

休明光記（文化四年羽太正養編）に據るに德川家齊の時松前藩の失政甚だしく弊害百出せるを以て寛政十一年二月松平忠命大河內政壽三橋成方幕府の命に依り本道に來航し諸州を巡回し民情風俗を視察せり當時幕府は薩藩の

醫曾樂士攷及與詰醫師澁口長伯を擧げて專ら採藥の事を命せり蓋し事採藥に關せしのみならず醫政上の施行何如を討究せしめたる者の如し（曾槃著あり蝦夷草木志料「一卷」と云ふ）而して松平大河內及ひ三橋の三奉行は各地を巡回し到る處百般の制度を建て便宜の地に會所を設けたり其數十個處と稱す休明光記の文に曰く「會所を建つると凡拾ケ所なり又町醫師を數人雇ひて場所場所に置て和人夷人の病事を助く醫師の手宛一日銀七匁五分なりと即ち此時より今日謂ふ所の郡役所の如き處に日給銀七匁五分（壹兩の八分の壹）を以て倩ひ置ける醫師をして邦人並に「アイヌ」の疾病を治療せしめたるなり此賃銀は之を今日に考量するに低額に非すして醫師は頗る優待せられたる者の如し

醫師の待優

松前藩治の時及寛政安政幕府直轄の時より開拓使の時代に到る迄「アイヌ」土人に「オムシヤ」の禮あり。其禮豫め日を卜して供帳し米酒煙草を具へ土人を會所に召集し酋長以下婦女童子に至るまで次を以て庭前に坐す此時官吏禁令を演じ通事譯して之を諭す諭告終て饗讌す而して此論告

オムシヤ

文中左の文あり云々

一、蝦夷人病氣取扱の爲め御醫師被下置候間聊の病氣にても運上家並に番家へ申出藥用可致事

一、蝦夷出生並病氣有之節は其度々運上家へ相屆可申事

諭告文末尾に嘉永三年戌八月磯谷運上家と記せり

（蝦夷雜書全文所載）

右蝦夷雜書（明治十三年開拓使稿本）に載する所なれども猶ほ蝦夷草紙に記する「オムシヤ」文中に左の一條あり

一、簑笠草鞋等用ひず候故自ら病を請候間以來運上屋番屋より相求勝手次第相用候樣可致事

之れを見るに雨に暴露し且つ徒跣の不衞生なるを說き注意到れる者の如し

其他衞生上の点に就き蝦夷の敎化を謀り我邦語を敎へ御國の風俗に慣從せしむる等の注意なきに非ず即ち前記の蝦夷地御用掛役人松平忠命

大河内政壽等の諸氏は專ら土民の撫育を圖りたる形績あり其文書即ち有司に命ずるの文中左の辞を見る

夷人共病氣の者有之候はゞ品により臥具等をも與へ藥用其外可相成手當いたし死亡の者、多く無之樣取計可被申事（其他の文書は魯西亞來舶記（文化年中の編にして著者不明）に載せさり）

記錄に乏しく詳細の關係を知悉するに苦しむと雖ども德川政府が如何の行政を施せしや亦た察知すべからざるなきに非す

明治の初年に到り皇風遍からざるなく所々に病院の設置ありて德澤爰に遍し永く北海に懊惱したる「アイヌ」に在ては空前の一大幸福なりと謂はざるを得ず

ポタラグル
ドスグル
ヘシユリウタレ

（二）　ポタラグル　ドスグル　ヘシユリウタレ

嘗つてより「アイヌ」に醫人ありと稱する者あり其言にアイヌ語「ポタラグル」と謂ふは醫師の義なりと蓋し說の謬れる者にして「ポタラグル」又「エポタラグル」Potaraguru s. Epotaraguru（「エ」とは「爲す」「作る」の義にして意義を强むる詞）とは醫師と稱する如き一定の職業を執る民族を指定したるに非ず彼は唯々民間に在て其誰たるを問はず病者の傍に侍し藥品を浸煎し痛所を按撫し或は時に癰疔を吸ふ如き一の看護人たるのみ

元來「アイヌ」種族に術藝を專攻せし者を求むべきに非ず況んや醫術をや彼は草根木皮の性情を論じ主治を研究するの才能知力ある種族にあらず啻に祖先の口碑を守り舊來の習慣を相襲ぎ、某草の根、感冒に是なり、某皮の煎、腹痛に効あらんと云ふに過ぎざるのみ

「アイヌ」亦素より病なきに非ず之を治するに何如になせしや之を調査するに人類學上醫學上興味少なからざるを見る即ち其煩を避けず左に之を述ぶべし

火神よ禱るの詞

酋長の如き者を「ヲツテナ」(乙名と書す我莊屋の如し)と稱す。冠婚葬祭其他の禮式に在ては「ヲツテナ」之れを掌る「アイヌ」若し病に罹るあれば「ヲツテナ」其家に往き禱文を唱へて火神を拜す火神は乃ち家神竈神にして所謂る家の鎭守(ゲイニユース)たり而して此神疾病及治療等(アベカムイ)の事を掌る其禱文に云く

タン、アベカムイ、イヌ、カシケワ、エンコレー、「カムイ、カラペイ、アイヌ、子、ナ、タン、シエエ、ピリカ、クニ、カラ、ワ、エンコレイ、

此火神我等を恤み玉へ、此「アイヌ」は神の造る所故に此病を全快せしめよ」の義なり

又彼等の言語中に「ヘシユリ」又「ヘシユリウタレ」Heshuri, Heshuri-utare なる語あり是れ祈禱巫祝を爲す我邦の僧徒を指せる「アイヌ」語にして亦醫師に非ず(舊籍之を以て醫師となす者多し故に之を正す)而して「アイヌ」より出てゝ斯等の僧徒の如く同く卜占祈禱して醫療する者を「ドスゲル」Tusuguru と謂ふ蓋し「ヘシユリ」「ドスゲル」共に同一の者なれども唯々其人に於て邦人と「アイヌ」との差あるのみなり

疾病は天のみ

(因に云ふ「アイヌ」語に我邦の女人を「クルマツト」と謂ひ其俗の女子を「シユウエンテツプ」と謂ふ「ヘシユリ」「ドスゲル」の差之よ同じ)

此等の輩は病者あれば神に祈り靈藥何の方位に於て覓むるを得へきや或は孰れの藥石、効を奏すべきやを探り病者の豫後を占し又は其治不治を卜し或は所謂る魔法を以て魘鬼の憑依する者を驅逐し以て病根を排除せんとし或は病者の枕頭に小席を設け枕筐中に草葉を入れ(カリガネサウ、土名フラルイ、ムム Hurarui-mum 惡臭あるを以て病婦之を枕筐中に入れ以て疫神を避く)刀劍、匕首、刀鍔、矢笈を裝置し室隅に「イナオ」と稱する木幣(「イナオ」一ユ「ヌシヤ」と云ふ即「削掛」の類よて祭事必ず之を建つ)を建て以て神祇に禱り病者の治せんことを願ふ」「アイヌ」信すらく病患は必ず其原因ありて起ると、然れ共彼等の想像は決して單純ならず百の疾病は未だ必ずしも陰陽燮調を失せるよりして生じ腸胃の疾病は飲食の不攝生よりして發する者なりと信せざるなり彼以爲らく病痾は天のみ造物主が賜ふ所の直接の責罰なり、疾病は惡魔(アイヌ語に「ニト子、カムイ」Nit'ne-kamui 又「イウヰンテツプ」と Iwentep と云ふ)の毒心と人間に終始害を加へんとするの宿心より來る者なり、疾病は妬婦の惡魂より、其祟を受くるに由て來る、疾病

は祖先が嘗て爲せし罪業の應報なるべし、疾病は腹中に棲息する蟲類に起因すと之を要するに病患は神罰又は惡魔妬婦の祟よりし若くは祖先罪業の餘殃なりとし腹内に寄棲する蟲類の爲に起る者なりと信じたるなり然れども凡百の疾病を以て一に之に歸せしめんと欲するに非るは亦た論を俟たず

如是迷信は彼をして殆んど藥用以て痊癒を圖るの念を斷たしめたると少なしとせず況んや彼が識り盡くせる木皮草根亦た常に驗なきこと多きに於てをや是れ即ち父老相會して「トスグル」を招き惡魔を祓はんと欲し若くは「オッテナ」に囑し火神に賽するの風習を作したるならん乎

此未開の種族を研究するに其口碑の太だ妄誕無稽に富むを訝るよりは其興味多きを思はずんばあらず、殊に彼が疾病の起源説の如き惟ふに他に類例を見ざる者ならん

「アイヌ」口碑は傳へて曰く、我祖先の創業經營素より太古邈矣に屬す得て考ふべからずと雖とも、其生活や極めて快樂なりしならん然れども世愈

澆季と爲るに及んで始めて凡般の苦艱に遭遇し又疾病の出てたるを聞くと又曰く世界「アイヌ語ヨ之ヲ「モシリ」と云ふ」の創造せらるゝや第一に作られたるは「ニタト、ケ子ニ」なる樹木なり、(Nitat-Keneni, Alnus Japonica 濕生赤楊(ヤチバンノキ)、又赤揚(ハンノキ))此樹は造物者が樹植せし者にして地に培育せらるゝ事茲に年所を經たり已にして樹皮自ら剝離し遂に朽ちて粉末となり風靈の爲に飛散して全土遍く至らざる處なく終に人体の皮膚に傳着し次て体中に侵入し以て許多の病患を釀成せりと

之に由て起れる數多の疾病中「シイハッパップ」(Shihapapu)なる疾病あり腹内に大苦悶大疼痛を起し大概之をして死に陷らしむ而れども往々此赤楊樹皮を煎じ服用せば危險を免るゝとありと云ふ蓋し樹皮嘗て此疾病の源因となり今更に其藥品となる奇想味ふべし

今日主として此樹皮煎を用ゆるは分娩後なりとす之に名を命じて「イチユップ、タサレッップ」(Ichup-tasurep)と謂ふ「イチユップ」は月水「タサレ」清む、平滑にす「プ」者の義なり蓋し子宮を整ふの藥品といふ義なるべし

「ドスグル」等の他に猶ほ「アイヌ」間に我國の按摩を業とする者あり、然れども按摩を、行ふ者の如く必ずしも專業ならざるなり蓋し「ポタラグル」の如く病を看護する者の類なるべし「アイヌ」語に之を「テケ、イヌ、グル」Teke-inu-guru と曰ふ手を以て疼痛ある處を摩し且つ撫するの義なり

イケマ、祈禱、驅疫植物

「イケマ」は蝦山の靈草なり

（二）イケマ、祈禱、驅疫植物

「イケマ」（漢名牛皮消、學名 Cynanchum caudatum, Max.）土名「イケマ」又「ペヌップ Ikema s. Penup) は白前科に屬し嘗てより蝦山の靈草と稱す山野林中到る處生せざるはなし而して此草根、蘿蔔の如く之を嚙めば臭、面を襲つ是を以て魍魎之を畏れ妖怪之を嫌ふ故に家若し病者を出せば入其枕頭に坐して根を咬み液汁を病者の体軀病苦に吻吐す爾而已ならず其嚙みたる液汁を屋舍の內壁若くは其外圍に爾くす是れ元來不淨なる儀式にして妄誕なる療法に屬すと雖ども「アイヌ」の之を行ふと甚だ眞率なり之に加ふるに手に小刀又刀劍を把握し病者の体軀及び其周圍に振翳し惡魔を斬りて驅除する狀を爲し以て惡魔を体外に屋外に又は村外に竄逐せりと信ずるなり

疫病中殊に恐怖せらるゝ痘瘡には、此牛皮消根、大効あると信じ、若し其村落を襲來するに際せば「アイヌ」は先づ神祇に祈りて之を祓はんと勉むる而已ならず、一夫、一丁、身を裝し隊を作りて各自靈根「イケマ」を嚙み、全村を

巡廻し、到る處に嚙みたる液汁を吐き、手に刀を把て一聲高く「ウヲーイ、ウヲーイ」"Woo!, Woo!" と呼び其聲吼ゆるが如し其態度を見るに殆んど狂する者の如く然り、之に由り病魔去て全村安寧ならんと考ふるなり

「イケマ」根を横切し之を乾燥し「アイヌ」婦女子は之を頸部の裝飾（頸部の飾は通例「レクトユンペ」と云ふ黒色木綿を環にし纏ふ）となし以て惡魔の憑依せんとするを避く即ち一の呪符若くは守護符と謂ふに異ならず

食物の中毒には「イケマ」を以て唯一の消毒藥とし又其根末を以て創傷の防腐藥となし根を截り煮て汁液となし根の浸劑は腹痛を鎭制するとなす蝦山毛人の靈藥蓋し「イケマ」に及ぶものなかるべし

傳染病の流行を防がんが爲めに「イケマ」を用ゆると已に前に述べたるが如し而して爰に一木あり名を「ヲシバラニ」Oshparani と云ふ（接骨木土名「ヲンチチクニ」其他「ソコニ」）、「アイヌ」は此木よりして「イナヲ」を作り若し隣村に傳染病來りたる時は之に接する村端に此「イナヲ」を建て祈禱して酒宴を張る是に由り傳染病の惡鬼（疫魔）は近づくを得ざるものと信ぜり

其他其民族に於て疫鬼を驅るに數多の植物あり即ち左の如し

○バアセニ Pasoni, Carpinus cordata「サハシデ」「又」「クチグロ」（方言）

○プクサ Pukusa, Allium victoriale, s.「キトビル」又「アヒバカマ」此樹葉を門戸に掲げて邪氣疫神を驅る

○キキンニ Kikinni, Prunus Padus. 蝦夷の「ウハシヅ、サクラ」此樹にて「イナヲ」を作り疫神を避く

○「ライカムイ、キナ」Raikamui-kina, Asparagus schoberioides.「キジカクン」「幽靈此植物を厭ふを以て幽靈來る時は之を以て追ひ拂ふとなす

○チクベニ Chikubeni, Cladrastis amurensis「イヌエンジュ」此樹を三尺計の長さに切り下端を尖にし上端を斜面に截斷し以て其斜面を縱切す其下に「イナヲ、キケ」を作りて一纏し之に四條の「イナヲ、キケ」を垂下せしめ其下に又九個の鉤を作り又其下に一帶を纏はしめ之に蓬の太刀を佩はしむ之を「シユド、イナヲ」と稱し「アイヌ」疫鬼を驅るの符となす、古昔は之に「チラケ、カラグル」の名を附し以爲らく此符

曾魂魄を有し空中に飛んで勇士と戰へりと傳染病殊に痘瘡來りたる時は兎の前足を戸の入に又は臍孔に掲ぐ疫鬼爲に入る能はず若し病其身に及ぶ時は兎の前足を以て体を掻爬す斯の如くにして病其身を去るとなす

ドスクルの行法

余は是より「ドスグル」が行法とも云ふべき其儀式を說かんとす蓋し「ドスグル」は病源を探りて之を病者の家人に告げ縱令へば耕作の際蛇窟を穿ち又は蛇を誤り殺したるに由り病を得たりとなすの類又病源を驅りて健全ならしめ或は治不治の如何を卜占するを以て任とするものなり亦往々藥物を與ふるとありと云ふ

彼其法を行ふに當り自ら擬して全く熟睡せしものゝ如くにし又人事を省慮せざる者の如くに爲し口に喃呢殆んど解すべからざるの語を唱ふ而して聽くもの或は之を解するあるも唱ふる者は自ら之を解せざる者の如くし唯神之に憑依し彼の口を假りて言ふものゝ如くす之を神宣と云ふ（Kamui-chi-itakte「カムイ、チイイタクテ」神言はしむるの義）之に尋て彼は今や豫言を託宣し神語を執行せんとするに當り忽ち肢軀を震慄し呼吸を粗大にし眼を開て豁然たり然れども彼は全く視力を亡し唯々心を以て靈界を窺ひ知らんとするの容を爲し彼の語中現在、未來、過去の別なく盡く現在を以て描寫し、如何なる惡魔ありて憑依し斯病を與へたるか、如何にして疾病は其身を侵したるやを判明にす、而して唱語の音調斷ずるが如く續くが如く高低節度なし、此執行中老幼滿座寂として聲なく敬意を以て聽聞す執行畢るや「トスグル」拍手數過、終焉を申告し、后ち其容太た疲勞せるものの如き觀を表し、爺嫗は時に感泣して仰き見るなし之を「ドスクル」の行法となす然れども此卜者は何人を問はず之を希望する者に應ずると云ふ事なし彼は豫め病者の性情を目擊し先づ病者又は家人の精神を領奪し得べき者を認知して后ち之に應じ始めて默禱且つ祈念すと云ふ

此行法を爲すの際、病者の緣戚知已は病床を圍み各々手を以て病体を抑へ「魂乎魄乎体外に去らざらんとを期す此時哀聲一呼する者あり手に燭

を乘る者あり、鍋釜等の器具を整置し以て屋室の四隅を掃ふものあり又聽者の中、祈禱默念する者あり此留魂の法之を其語に「ニタタ」Nitata と云ふ魔惡之に由り遠く去て復た來らず

或る地方に於ては卜者乃ち「ドスグル」は狐の顱骨 Niwoki-marapto を執り席の前後左右に投して病者を占し、吉凶を告ぐるとありと云ふ、蓋し獸骨魚骨を以て吉凶を占す之を Nisa-tam と稱す幣刀（ヌサタム）の義なり其何の意なるを知らず

是に由て之を觀れば「アイヌ」が斯の療法は開化の人民に在ても其古代に於て存せる所謂シムパテチイ的療法（Sympathetische Cure）なる者にして物体若くは處作の秘密なる力に由り（守護符、神語、祈禱）疾病を治療するの方法なり而して此療法は「アイヌ」種族に於ては近來に到る迄行はれたる者にして彼の藥用療法は甚だ微力なりしなり其微力なりし所以は全く粗なる草根木皮効力を呈せざりしに因れり

「ドスグル」の方法を見るに毫も邦俗の巫祝又は所謂る行者の類に異なら

ず蓋し或は邦人が傳習せし者ならんか或は云く若し之を傳習せし者とせば已に古昔に於て然らざるを得ず蓋し蝦夷との交通往時固が頻繁なりしは論を俟たざる所なり今や此「ドスグル」族は殆ど滅びて之を見ると稀なりと云ふ蓋し往々詐謁者を出し、狐顱、乾燥せる鳥頭等を懷にし、以て愚夫愚婦を詒くとあるを以て郡衙警察偶々之を禁じ之を罰せしに由る」

「イケマ」根を噛み液汁を吐き病魔を驅り若くは惡疫流行の際壯丁聲を發し液を吐き村々を巡廻し或は接骨木の「イナヲ」を建て或は兎足を戸に掛け惡神を秘ふ等の風習は蓋し洋の東西古今俗の文野に論なく存せしは疑を入るべからず唯々行同しきも、事異なるの差異あるのみ、即ち古來よりして傳染病は常に一種の魔力あつて然らしめたりとなせり今其例を掲げて之を參考となすべし

古來天行疫ある時は神を祭り或は疫鬼を驅れり文武天皇慶雲三年天下諸國疫疾。百姓多死。始作土牛大儺。續紀考証云。大寒日、立土牛童子像。云々、又梅園日記云。疫癘春初多流行。若然則民間大人小兒每鳴鉦皷

而追疫鬼、或以綠樹條。作小船、捨郊外而歸。或以生芻並生草。造偶人捨野外而歸、是亦驅疫一術云々、東海談に享保十八年七月上旬より東都大に疫病行る邑里とも藁にて疫神の形を作り鉦大鼓を鳴して之を遣り南海へ流しぬ云々、此外斯の如き例少なからざるべし

疫神を祭るは和漢ともに有り我國にては已に光仁の朝に於て之を記錄に見る續日本紀、光仁帝寶龜四年、祭疫神於諸國云々とあり、紫野今宮神社は疫神の安置せる祠社なりと云ふ、湧幢小品に云く、符堅死于新平佛寺、死疫相繼、因改寺爲廟、祀以太牢、號曰符家神、遂無復疫疾と漢土にては往昔我「アイヌ」の「ドスグル」の如く方相氏なる者ありて疫を驅るを主どる、周禮に云く方相氏掌蒙熊皮、黃金四目、玄衣朱裳、執戈揚盾、帥百隸而時難、以索室驅疫、大喪先匶、及墓入壙、以戈擊四隅、毆方良（、罔兩）と

と聊か記して考古の一端となす

(四)　鬼祟及憑狂

前述せる如く「アイヌ」は流疫を以て全く一の鬼祟となせり而して其精神病神經諸病を以て邪鬼の憑依するに由ると爲す者少なからず、中風截灘の如き尤も其然る者なり

中風は「アイヌ」語に「ライカムイ、イルシユカ、タシユム」又「カムイ、イルシユカ、タシユム」Raikamui-irushka-tashum s. Kamui-irushka tashum（「ライ、カムイ」とは惡靈を云ふ）し神（惡神、惡魔）の怒りに觸れて來る惡病と云ふ義にして「アイヌ」は祖先又は自己の罪業に由りて來れる報酬なりと信ぜり

截灘を「イツクウ、カムイ、コロ」Ikkew'-kamuikoro（イッケウ）と云ふ蓋し、脊椎（カムイ）に魔神座す」の意にして原因は同じく惡魔の祟なりと思惟するなり余は曾て一男兒の脊髓炎に罹れるを識れり而して彼は全く自己の惡業に依て之を獲たる事と信じ遂に一宣敎師の誨を受け西敎に入り洋學を學び熱心に其經文を習へり以て其罪の亡ぶれば病の治せんとを願ふなり

截灘を呼て其語に「脊椎に惡神座す」と曰ふ、病理を知らざる「アイヌ」が病の

脊髓、脊椎に在るを知らざるは固なり其脊椎と云ふ所以は彼は脊椎を以て生命現在する所又身動物と異なりて直立を司どる所となせり故に截癱は此直立を司どる所に疾病ありと考へしを以て此語あり

關節僂麻質斯を彼語「メカムイコロ」Mekamui-koro と曰ふ蓋し寒氣(メ)の爲め疾病となりたる(カムイコロ魔神座す)の謂なり但し前者と異なり此語には邪祟の義なきに似たり

「アイヌ」蛇を畏るゝと甚だし

蓋し妄想なるものは文野の度に從ひ國土風俗に依り各其趣を異にすと雖ども野蠻の俗は概して妄想に富贍なるを知るなり、未だ嘗て目に觸れざる者一々其妄想となり船艦を以て怪鳥となし電氣を以て怪物となす等古今東西其例に乏しからざるなり

阿波、土佐、長門の犬神、讃岐の猿神、伊豫の蛇神其他猫神、狐憑等と同じく「アイヌ」には惡魔の憑祟、蛇憑、猫憑等少なからず

「アイヌ」が蛇蝮を畏怖する尋常に過ぐるのみならず以て太だしき惡魔となし酷だしき怨靈となす殊に婦女子の之を畏るゝと意表に出づ乃ち蛇

は居常女子に憑依し之を魔し之を狂にせんとするの機を窺ふものなりと迷信せり而して蛇は人の若し戸外に酣睡するを見れば其口に入り以て其体中に棲息するを得べし若し又蛇の殺さるゝある時は一の怨靈となりて其人の心中に入ると云ひ傳ふ故に其俗蛇を殺すものなし

「トツコニバツコ」Tokkoni-bakko とは言、蛇婆の義なり其狀態は突如として起るものにして皆婦女子に憑し其少壯と老嫗とを論ぜず若し一蛇を目するあれば一齊忽ち手を震戰搖擺し面樣愕然又呆然たる者の如く「チイポ、チイポ」又「アヤポ、アヤポ」と急調連呼し或は「キ、キ、キ、キ」と呼び戸外に狂奔して逸馬の狀を爲す又蛇を目せざるも「トツコニ」の語を聞て已に震戰し「チイポ」を連呼する者あり

之を案ずるに「トツコニ、バツコ」は疾病として見做すべき者に非ず、唯々一の恐怖心より出でたる其俗固有の異樣なる行爲なるべし、嘗て臟躁又憑狂ならんと云ひし者ありたれとも、其觀察の誤れる者に非るか、余は四十才なる沙流農婦「チテヌマ」なる者を知る、彼は即ち所謂る蛇婆なる者にし

て蛇を見、又人の蛇を語るを聞く時は忽ち此行爲をなし狂奔し躁狂す「アイヌ」は云ふ、彼れ鄕黨に於て有名なる「イムバツコ」Imu-bakkoなりと而して彼の平素は極めて安靜なる人物なり又此「イムバツコ」は往昔より存する者なりと云ふ

某土の風俗に於ては婦女子は蟹「アムシベ」Amushbe（爪を有する者の義）語を聞て直ちに之を行爲に顯はし躁暴する者あり又啼羊を聞て驚愕一番忽ち「バ、バ、バア」と呼び狂奔して已まざる者あり、或は犬を學び鹿を學び躍り且つ呼ぶ盖し蝦山に羊なし故に若し此異畜の聲を聞き驚き以て狂するなり之を憑狂と云ふべきか

又一の奇なる者あり例之ば是等の婦人に其把持せる小刀（マキリ）を抛てと命ずれば之を挾み、而して之を挾めと命ずれと却て之を抛ち又其子を煮て食へと命ずれば之を火爐の中に投ぜんとする等の如し其行爲を窺ふに頗る迅速にして殆んど狂者の態を免れず、某人云ふ是れ亦一の臟躁狂（ヒステロマニア）の如き者ならんと余は未だ之を悉す能はず

キナシユツトカリ

憑依、憑狂、は「アイヌ」語（千歳有珠の土語）「イム」、"Imu" と云ふ（又時として「イトユーレン」Ituren と云ふ）憑依せられたる者を「イシユレバレツプ」Ishurebarep と云ふ而して蛇憑は沙流の土人之を「キナシユツト、カリ」Kinashut-kari 又「トツコニパラチ」Tokkoniparachi と稱す黃領蛇（アホダイシヨウ）憑依の義なり

此「キナシユツトカリ」に罹る源因は耕作の間誤て蛇を殺し若くは蛇棲を荒蕪するに在りと信ぜり、而して之に罹る時は「トヲビシキ」乃ち間歇熱に罹りたる如く惡寒甚しく遂に一の躁暴なる行爲となり人事不省に陷り譫語縱橫轉輾反側し以て絕食し遂に死するに到ると謂ふ

沙流十勝の「アイヌ」間に傳ふる所猫憑なる者あり、アイヌ名に之を「メコ、パロアト」又「メコパラチ」Meko-paro-at, Mekoparachi と云ふ即ち「ミユー、ミユー」と連呼し口角頻に泡沫を噴し復た他を言はず食思頓に闕乏し漸々羸瘦し遂に死するに到る而して「アイヌ」以爲らく之を治するには他の猫を殺し之を食するの他になしと、此病の源因は其者必ず猫を虐待せしに由ると信ぜり

前者に云ふ所の「トツコニ、パツコ」「メコパロアト」は覿別、沙流、十勝、山間の「アイヌ」等が稱する所なれども有珠の「アイヌ」間には嘗て此等の事なしと云ふ

此他馬を殺し憑依せらるゝ者あり、之を「ムンマライグ、パロアト」Umma-raigeparoat と云ふ死馬憑の義なり其證徴の如きは未だ之を知るに由なし而して狐憑狗憑の類又一にして足らず

是等憑依の理由に到ては或は邦土の狐憑と一般に説明すべきや否や未だ之を知らずと雖ども要するに「アイヌ」種族は頗る精神の怯弱なる者にして甚だ妄想に富めり且つ之を驗するに鬼を信ずる者甚だ厚き者あるを見る而して彼に不明なる疾病彼をして懊惱せしむるの苦痛は一に以て鬼祟となし畏怖恐懼到らざるなし

咒詛して人を殺すといふ迷信は「アイヌ」間にも有りて之を「イチヤシカラ」Ichashikara といふ即ち甲乙に向て其死せんことを禱る若し誤て(外れて)丙に中るときは丙は爲に死すべしこの咒詛するものを「ウヰンゲル」Wengeru.

といふ、惡漢の意なり

若し深く彼の民俗に入りて是等の事を研究せば或は大に人類學上に於て興味あるを多に檢出せん即ち記して後人の來るを俟つ

痘瘡　アイヌ痘瘡を怖る

(五)　痘瘡

「アイヌ」の俗痘瘡を怖る事最も甚だし之を諸病の王と稱す、今之を舊記に徵するに文明元年(應仁の後)大に流行し死亡頗る多かりしと云ふ此年前に於て已に流行ありしや未だ之を詳にせず、蓋し內地より流行して此地に及びし者なるべし

疾疫流行の年代　余は諸書に據り左に疾疫流行の年曆を列記すべし

文明元年　疫病流行、飢饉、蝦夷多死す
文明三年夏　大に疫し夷人多く死す
文祿元年　疫病流行蝦夷多く死す
寬永元年夏　蝦夷地痘疹流行し人多く死す
寬永七年　痘瘡流行蝦夷多く死す
明曆二年　疫及痘瘡流行
萬治元年春　痘疹、痲疹、流行し人多く死す
元祿十一年　痘瘡流行

寶曆三年秋　痲疹流行死者多し
安永五年　痲疹流行
仝八年夏　痘疹流行
仝九年夏　痘疹流行し夷人死する者六百四十七人(一作六百四十一人)
寬政元年乃至十二年　田澤乙部(今爾志郡に屬す)痘疹行はる夷地醫方なし故に死亡する者無數闔村殆んと孑遺なし
其他各地流行
安政五年(一八五八)　虎列剌流行(日本全國)
明治五年夏　膽振國有珠紋鼈痘疾行はる
仝六年夏　益甚し官、醫を遣りて藥を投ず
仝七、八、年　痘瘡流行
仝十九年、二十年　虎列剌及び痘瘡流行
仝廿四年、廿五年　痘瘡流行

全廿六年、廿七年　膽窒扶斯

人口の減少

之に由て是を見れば痘瘡の流行したるは寛永元年及七年、明暦二年、萬治元年、元禄十一年、安永八年及九年、寛政年間及明治五、六、七、八、及廿四、廿五年なりとす

痘瘡其他傳染病の流行は大に「アイヌ」人口の減少に關係ありたるは論を俟たず而して往時之が豫防等は固より知る者なきを以て祈禱効なく流行時倒る者太だ多かりしと云ふ

痘瘡流行する時は「アイヌ」皆家を捨て山中に逃走し病者の我親族たるに論なく復た棄てゝ顧みる者なし、守る者は唯其兄弟若しくは親子あるのみ慘なりと云ふべし明治廿五年幌沙流の仁風谷に痘瘡侵入せり而して若し小兒の之に罹る時は堆雪上に屋を葺き僅に以て風雪を防がしめ之に小兒を置き敢て近づかず唯々遠くより食餌を投與するのみ酷なりと云ふべし近年有珠土人等が山中に遁逃する者減少せしは警察郡衙の説諭せし所あるに因れり

往時故に痘瘡流行の際「アイヌ」部落の水産物、産出額極めて少なく又或は全く皆無の狀況なりしと云ふ嘗て留萌（ルモイ）の近郡に痘瘡流行し留萌の「アイヌ」漁民盡く逃走せんとするの狀あり幕府の吏某、留萌に知事たり即ち策を以て之を諭して曰く諺に曰はずや網の目（孔の義）猶ほ風を防くと宜しく漁網を村界に張り悪疾の來襲を防くべしと是に於て「アイヌ」皆爭ふて鰊網を稅衙（運上家）より出し之を村界に張り高く標を掲けて曰く無用之者不可入と然るに此年幸にして留萌管内壹人の痘を患ひし者なかりしと云ふ

「アイヌ」は總て不快を感ずれば山中に逃れ入るの風あり獨り痘瘡而已ならず血を見て之を忌み悉く山中に入る嘗て沙流に幕吏あり狂して腹肚を剖く「アイヌ」六七十人悉く山中に逃れ當時爲に役夫なく官府困排せりと云ふ

痘瘡は「アイヌ」語に「カムイ、タシユム」と云ふ惡魔の所業に因て來る疾病の義なり又其語「カミヤシユ、タシユム」Kamiyashi-tashum と稱す即ち「カミヤシ

ユ」とは悪魔、妖怪、蛇蝮等の意にして此等の妖怪が爲に起れる者と思惟するなり此語は今用ひず獨り之を「ユカラ」(戯曲)の詞中に見る又一に「ヲリパックタシユム」Oripak-tashum の語あり「ヲリパック」とは心中に痛み沈默語なきの意にして此病流行する時アイヌ等が心痛啻ならず相逢て沈默相見るを以て名づくと云ふ

明治の初年(五、六年頃より)種痘は官衙の行ふ處となり沙流、浦河、鵡川、有珠等の「アイヌ」は喜んで之を受くるに至り明治七、八年の頃痘瘡流行の際と雖とも之に罹る者少なし故に現今痘痕の面貌を有する者隨て稀なり「アイヌ」は一生涯の間終に痘瘡に罹らざる者多し而して一度之に罹る時は治する者なしと信ぜり蓋し是れ之を恐怖して已まざりし理由なるべし

蓋し痘瘡を畏怖するの八種は獨り「アイヌ」のみに非す亦之を「客爾瑪克(カルムッ)」人に見る此八種は之を怖るゝ蛇蝎の如く多間之に罹る時は全家爲に滅亡す帳幕内に住居する遊民にして之に罹る者は酷寒に堪ゆる能はずして死し死者の遺物は傳染を恐れて相續する者なし痘瘡患者の帳幕内に入る者は急に火酒を飲み酩酊して其感染を防かんとす親族朋友は鞭を携へ病者の側に來り之を毆打し出血せしめ以て悪神を体内より驅逐す(西伯利地誌)

痘瘡を驅逐するの方法は已に之を述べたり而れども此他「アイヌ」間に猶ほ妄誕の事少なしとせず縱令ば我邦の「ハリヲグ」Tetrodon sp. 土名「イカラポップチェプ」Ikara-pop-chep の黒色なる針を取りて窻口に挿めば瘟神避くの類の如し(沙流土人語る所)

「アイヌ」語に痘瘡流行の年を謂て「カムイパ」Kamuipa と曰ふ悪魔の載の義なり語味ふべし

（十八）「アイヌ」が識れる外科

彼以爲く齲歯なる者は一寄生蟲類の侵蝕に由て來ると（邦俗に云ふ所と同し）即ち鐵釘を把て火中に投し熱灼して白熱となし之を歯冠の空洞に入る斯の如くして彼は齲歯の原因たる害蟲を殺すと信せり

小切創あれば午萎（セタコロコニ）の葉を咬み創面に貼す然れとも大切創には鹿角（ユクキラソ）Yuk-kiraw を粉末とし又鯨鬚（フンベレキ）Humbe-reki を削りて粉末とし創面に撒布し布片を以て之を縛す、蓋し此鹿角粉、鯨鬚末は「アイヌ」が好んで創傷又火傷に重し用ゆる所の者にして其用法恰も西醫が沃土吻謨を用ゆるが如きなり是等の者は素より沃土吻謨の如く防腐の効なしと雖ども共に是れ角質にして創傷の治癒上亦稗補なくんばあらず

「アイヌ」は熊の爲めに負傷すると少しとなさず故に彼は其創傷に向ひ藥品の多數を知れり就中其爬創には土當歸（チマキナ）の生根を輪切し之を傷面に貼し或は之を煎じ數回傷面を洗滌す

若し熊爪の爲めに掻爬せられ頭部に所謂瓣狀創を作れる時は「アイヌ」は

先づ新鮮なる水にて傷部を洗滌し、剝離したる皮瓣を整復し又傷つきたる皮膚を細に檢査し塵垢を洗滌し毛髮又樹皮より作りたる纖維樣の絲を以て縫合し然る後前に述べたる鯨鬚末或は鹿角粉を縫合せる部に撒布し其上に生草の葉を置き又は布片にて縛し置くなり

彼は毒箭を以て猛熊を倒すの際自ら之が爲に負傷し煩悶するとあり此時數多の「アイヌ」に在ては直に刀を執て毒の觸れ毒の侵入したる部を摘截することと稀には非ず而して又時に創面には口を貼し直に毒を吸はんとし而して後丁寧洗滌し創傷上鹿角末を貼して繃縛するとあり亦勇なりと云ふべし

蛇咬傷（蝮）に逢ふ時は「アイヌ」は或は其咬まれたる足趾を截斷し又は患部を摘截し血を出して吸ふ者あり沙流に「ペンリウツク」と稱する部長あり嘗て足趾を咬まる彼は直ちに自ら其足を截斷せり

「アイヌ」は骨折傷の療法を知れり彼は能く離開せる兩骨端を整復して木片を副へて繃帶す乃ち西醫が副木固定の法と更に異なるなし彼が是を

「アイヌ」が識れる外科

知る偶然に非ざるべきも其侮るべからざるや亦た故なきに非ず

其他挫創、打撲、火傷、濕疹、に因する腫起等に應用する本草藥石少なからず

今之が大略を列擧すべし

挫創には「カラマツサウ」の生葉を貼し黄蘗の内皮を細截し之を湯浸して貼し鵡川山(ヤマシキミ)蜜の根を燒き粉となして貼し(沙流)

落馬の挫創には殊に「クサノワウ」の莖葉を湯浸し揉碎して貼し(沙流)

挫創に因せる疼痛及身体内部の疼痛には「犬槐(イヌエンジュ)」の皮を揉して貼用し

蛇咬傷には「クサノワウ」を用ゐ(沙流)

火傷には黄蘗(沙流)、大葉百合の澱粉、薇葉の燒粉を以てし又鯨鬚を細末とし之を第二度第三度の火傷に貼用し漆創には野蕗の葉を炙りて貼し

關節痛には山芍藥の根を咬みて貼用し(千歳)

足指間の濕疹には黄蘗、頭部濕疹には「ニガキ」の皮を煎じて汁液を以て洗滌し

腫瘍には同じく「ニガキ」の皮を貼布し(沙流)

切創には「シホデ」の葉、「イケマ」根煎、牛蒡の軟葉等を應用す

落馬して人事不省に陷りたるものには冷水を注きて醒覺せしむ

其他の創傷には硫黄を削り末となし附することあり

挫創の部又は腹痛胸痛ある時は土窟より堀出したる土器(アイヌ語トイトイ、イタンキ Toi-toi-itangi)を石上にて磨碎し水を加へ泥となし貼布す(樺太アイヌ)

前陳せる如く繃縛せる如きは偶然の發達に過ぎずと雖ども茲に驚くべきは樹木の内皮を採り之を熱湯に入れて柔軟にし骨痛ある部、腫脹せる處に貼し又た之を纏絡し其上を繃縛すること是なり之を「アイヌ」語に「ウニ、マウ井、カラ」Uni-mawe-kara と名づく、其効を論ずれば熱性濕性繃帶兼固定繃帶にして消炎法としては實に嘉賞するに足るものなり之に用ゆる植物は接骨木アイヌ語「ソコニ」Sokoni; Sambucusracemosa にして其内皮は頗る柔軟なる者なり

介殻

アイヌが識れる外科

此他介殻を應用するとあり即ち彼の烏貝（カラスガイ）は「アイヌ」語に「ピパ、セイ」Pipa-sei. Anodonta spec（沙流にては「イチヤセイ」と云ふ）此介を焼き細末となし之を熊脂に混じ以て火傷に貼布す、即ち石灰の軟膏の如き者を作るなり、海邊の土人は之を應用するを毎常とすと云ふ

煤「ウパラ」Upara は切創に用ゐらる、乃ち煤を取り直ちに創傷面に貼布す止血且つ防腐の効ありと稱す（新冠アイヌ）

煤

六種の雙蘭菊

（七）箭毒

北海道に毒草十數種ありと雖ども、附子を以て最強毒の者となすべし、嘗て之を畏友宮部金吾氏（札幌農學校教授）に聽く本道には六種の雙蘭菊ありと、曰く

一　附子、トリカブト、艸烏頭、Aconitum Fischeri, Reich. (?)

此種は内地にも産し「プス」「プスシトゲ」川烏頭等の名あり

（白川附子は艸烏頭の老根なり）最毒、

二　ウヅガツラ、Aconitum arcuatum, Regel.

此種は、内地にては鋸山に産し、當地にては札幌豊平等又は滿州に産す、前種と異なる點は葉の截痕頗る深きにあり

三　ツルトリカブト、Aconitum volubile, Pall.

此種は札幌に産し、葉の截痕前者よりも猶深く、葉柄頗る細長にして、枝幹は上升して蔓を作り花は稍少なり、

四　千島トリカブト、Aconitum kamtschatka, Pall.

此種は全体少にして花は草頭に攅簇す産地は千島殊に擇捉、得撫

又勘察加等なり時として葉の裏面に絨毛あるあり

五　細葉トリカブト、Aconitum Napellus, Pall.

此種は宗谷地方に産し葉花共に矮少なり

六　牛扁、伶人草、Aconitum Lycoctonum, L. var. Cynoctonum Trauto. et Meyer.

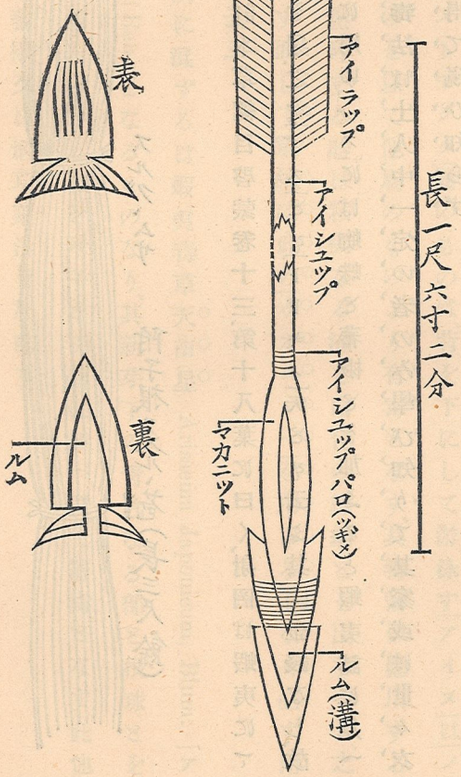
此種は根室、余市、上川、錢函等に産し花は穗を生じ淡紫色なり

「アイヌ」は附子を「スルグ」urugu（毒の意）と云ふ、蓋し之を「ランガルト」獨「ウライト」英、並に「パウル」及「キンゼット」(Paul et Kingzette) 帝國大學教授下山順一郎氏實驗に徵するに「ヤプアコニチン Japaconitin $C_{29}H_{34}NO_9$ を含有し諸」の「アコニチン」中尤も強毒の者なり (Langgaro, Virch Arch. Bd_{78} 及下山藥學雜誌明治廿三年十二月)

是の如く我れ聞く「アイヌ」は晩秋の候、附子根を採り其十數個を、葦莚の類を以て作りたる三尺許長き松明樣の苴（ツト）に包み（土語之を「スルグ、ムサ」Suru gu-musa と云ふ）高く爐火の上に懸けて乾燥し三四旬の後之を取り其一片を截除し舌上に其毒刀の辛猛なるを試驗し之を石上に搗碎し、次て乳鉢

中に於て水を以て攪拌し泥狀の塊を作る。

矢鏃は竹を以て作り其尖二寸許、裏面に溝（ルム）を設け毒を入る之を固定するに、骨片（土語之を「マカニット」Makanit と云ふ）を以てし、骨片は柄に固縛せらる乃ち圖の如し





スルグ、ムサ　附子根ヲ入ル、苞（ソト）（長三尺餘）

小野蘭山が重訂本草綱目啓蒙巻十三、第十八葉に曰く、射罔は蝦夷にて、竹箭に塗りて物を射、之を「ブス」とも「トドキノ」矢とも云ふ、其國金銭なし、故に之を塗り矢鏃に用ゆ、「ブス」には蜘蛛と蕃椒とを加ふると蝦夷誌に見へたりと、而して製毒法は土人中一定の者のみ學び知りて其家或は世々衣鉢を傳へ他の者得て窺ひ知らず

附子に加ふるに毒蟲を以てするは人の聞く處なれども毒蟲は果して蜘蛛なるや又他の蟲類なるや知るを得ざりしが頃者初めて其詳を聞くを得たり

毒蟲は之を「アイヌ」語に「ウオルンベ」Wor'umbe（義水のものの意なり）と云ふ蓋し田鼈（タガメ）

Belostoma（アメンボウ）水鼈（ミヅグモ）Hydrometra 床蝨 Acanthia lectularia L, 等の類にして水中の石下に棲息し（俱に半翅類に屬す）水中の小蟲及び小魚類を捕へ其吸嘴を以て體液を吸收し以て生活す之を捕獲せんと欲せば、其手を刺さる而して此の「ウオルンベ」に二種類ありて一は「ノトチクタ」屬 Notonecta 一は「チピタ」屬 Nepida に屬す「ノトチクタ」屬のものは、背を下にして游泳す「アイヌ」は「ノトチクタ」屬のものを以て他屬のものより有毒となす、其毒箭に應用するに當て、先づ之を壓碎する時は粘稠なる液と白色の絲網とを出すべし、之を以て箭毒となす、而して單純に此の「ウオルンベ」を用ゆるとなく必ず附子に加へ用ゆと云ふ

附子、毒蟲と倶に混ずるは蝦夷毒草天南星 Arisaema Japonicum, Blum. 「アイヌ」語「ラウラウ」Rau-rau なるものなり、其新芽下の青色なる部と根球とを採り之を乾燥し、後ち搗碎し、之を附子と毒蟲に加へ以て箭毒となす、此他土地に由りては蕃椒又は烟草葉汁を加味す

此地球上、蠻夷往々各固有なる箭毒を有し人類學上亦興味少なしと

せず、我「アイヌ」の如く雙蘭菊屬より箭毒を作る者は東印度にして、之を Bish（ビシュ）と稱し、喜馬拉耶（ヒマラヤ）山に産する Aconitum Ferrox, Wallich. より採り（根を「ビシユ」又「アチヴ井シア最強毒物の義」と云ふ）巨大なる肉食獸を毒殺するの用に供す、

其他南米土蕃（ラリノコ江畔）の「ウララ」毒 Urari, Woorara, Curara（無蓁樹科 Paullinia Cururu L.（Urara）馬錢科 Strychnos toxifera et guayanensi, Strychnos-Crevauxiana Baill.-Urari, Curara. 佛領幾内亞（キチア）に於ける「ウララ」（馬來（マレイ）人の「アンチアール」毒 Antiar.（Antiaria toxicaria, Loschen, Antiar-upas.）に於ける、爪哇（ジヤワ）人の「ウバス」毒 Upas,（Strychnos, Tiente, Leschen.）に於ける事皆偶然に出てたる者にして亦奇なりと云ふべし「クラーレ亞米利加毒に對し「ウバス」「ビシコ」「アンチアール」等を亞細亞矢毒と稱し「イチー」を亞非利加矢毒と稱す」

石狩國室知「アイヌ」「イチリ」なる者の語る處によれば、附子を分て、先づ「セタスルグ」Seta-surugu 及び「ヤヤンスルグ」Yayan-surugu の二種となす「セタスルグ」は効用なき者を云ひ「ヤヤンスルグ」（「ヤヤン」とは「通常」と云ふ義なり）は通常箭毒に用ゆる者を云ふ又「ヤヤンスルグ」を左の四種に區分す、即ち

スルグの數種

一　プイ、ラウシユ、スルグ　葉細なる者現今多く之を用ゆ
二　ノヤ、ハュシ、スルグ　女性よして猛毒なり
三　クレツプノヤ
四　クレツプドレセ　男性にして毒氣猛烈ならずと雖ども効驗迅速なりと云ぶ

之を要するに「アイヌ」の箭毒は左の者より成る

一　附子（往時「アイヌ」の用ゐし識別名稱にして今時「アイヌ」知らざる者多し）
二　ヤウシユクップ、蜘蛛、（絡新婦（ヂヨラウグモ））沼に生ずる者
三　ラウラウ、天南星
四　ウヲルンベ
五　蕃椒
六　烟草の汁液

而して其手が必ず用ゐるものは附子「ラウラウ」「ウヲルンベ」の三者なり、其他の者は混ずるも混ぜざるも其人の隨意なりとす

天南星毒力の檢定

「ラウラウ」の毒力を檢するは左の方に據る新鮮なる「ラウラウ」根を採收し之を臼にて搗き、以て糊泥樣の者となし、而して之を左手の小指と環指との間に貼布し、十分時乃至十五分時挾み置けば、毒力强きものは疼痛を生じ、次で知覺麻痺すと云ふ、

附子の産處

十勝にては之に猶ほ煤を加ふる者あり

附子中最も効ある者は釧路産殊に白糠（シラルウカ）産の者とす十勝産の者は効力薄し故に十勝「アイヌ」等は釧路より取寄せ用ゆると云ふ石狩にては錢函産の附子古來より最も激毒の者なりと稱す

沼貝村屯田軍醫竹內君一氏は嘗て北海道醫事講談會月報第五十三號「アイヌ」毒箭に就き動物試驗を施したり其報告を看るに其箭毒の成分は之を沙流「アイヌ」「ケイカナ」なる者より聞けり、其成分に云く

附子根乾燥　十二瓦

天南球根乾燥　四瓦

鼠糞ヘルメシ　三瓦

シャルンガワ生蟲　一瓦

計二十瓦

と此の四種の他に尙「ウッ木」の甘皮「ウベ」艸「紫色花を有する一の灌木なり」及び天南星生實の三種を加へて製する者ありと記せり（案ずるに鼠糞「ヘルメシ」は「エルムシ」の誤ならん「シャルンガワ」は某の蟲類なるや未だ詳かならず）

箭毒製法に關する秘密等

余は「アイヌ」箭毒に關し、前述せる如く記載したる後ち沙流郡の「アイヌ」名は「パレタメ」なる者に逢ひ、箭毒の事に關し、數多の秘密を聽くを得たり、同人は尤も熊を射るに長じ年々樺太に宗谷に趣き五六年間にして壹百八十頭の熊を獲たりと云ふ亦以て其驍勇を知るべきなり今彼が語る所を記し更に前段の漏を補はんとす

附子採收　秋天葡萄熟するの時山野に於て附子を見出せば、其老根は採掘せずして其傍に生ずる幼根を取るを可とす、又其根を折り赤色の液汁出づるを可とし白色の者は棄つ而して附子根は三四

間乃至二間四方の地に二三百根あるを宜とし遠距離に於て散在する者を取らず

附子團の製法　根塊は概ね爐烟の上に乾枯せしめ、其全く乾燥せるを俟て、石上に破碎し、水若くは唾液を以て泥を作り一の粉團を作る、之が効力を驗せんと欲せば、先づ樹葉を取りて附子團の一片を包み之を舌と口蓋の間に挿むべし五分時乃至十分時にして舌上苦辛を覺へ後ち麻痺し舌肉腫起す之を猛烈なる者となす此物單味にして已に使用に足る

混和物　單味にして稍ほ不充分なりと信ずる時は黄楝樹(土名シュニ)及ひ槐(チクベニ)胡桃、山椒の樹皮及び觀音蓮の葉を採り之を碎截し大鍋裡に入れ沸煮蒸騰兩三日の後ち大苦味を有する越幾斯樣飴樣の泥を作り之を附子團に混和す時に或は前者に烟草葉を混和して煎じ、或は所謂「ウテルンベ」(前出)なる昆蟲を加ふるとあり効力　熊は單味の附子にて二時間内に死し混和せる者にては一時間内に死すべし、矢に中れば始め飛躍狂奔すると須臾にして漸々靜謐となり起臥轉輾すること一時間餘終に氣力を失し僵臥すると數時口角泡沫を出し四肢矯直を以て絶息するに至る

附子生産地　は小樽錢函を最も宜となし發寒、幌向(共に石狩郡)之に次く余は毎常錢函産若くは幌向産の者を使用せり

附子の種類　「セタスルグ」及び「ヤヤンスルグ」寧ろ無効と謂ふべし現今使用する者は所謂「ノヤハムシ、スルグ」なり、「ケレップドレセ」及び「ケレップドレセ」は往昔の名稱にして此物今は絶へたり、「アイラウシ、スルグ」は葉大にして截痕」亦大なり根は絲の如く細し故に効力少なし「ノヤハムシ」は葉細にして一見他と識別することを得べし

附子に混ずる有毒動物　(一)「ヤウシユケツプ」(蜘蛛)は黒色なるを可とす、沼澤蘆葦の地に生ず、捕へて之を碎き附子根に混ず、(二)「ペカカルペ」(黒色の水蛆)我は之を用ゐたるとなし(三)「ニセウワルケ」Nisen-wa-ruke 恐くは莞菁の類にして之を河莞菁(カハヘンメウ)と謂ふべきか、濕地又は水

中に生ずる甲蟲にして、其狀槲實(土名「ニセウ」)を半截したる者の如し故に此名あり、此蟲を捕へ之を竹筒中に乾かし、後ち細末となして使用す(四)「トイ、ショーヤ」Toi-shoya(土蜂の義)の毒針と、其尾端とを截取し之を乾燥して細末となし用ゆ、効頗る多し「シ、ショーヤ」Shi-shoya(木蜂「カメハチ」)樹枝に巢を作る者是亦可なり(五)「アイコルチエッペ」Aikor-chep(矢を有する魚の義鯣魚(アカエイ)の針(長さ五六寸)を取り其黒色の皮を削りて之を附子に混用す、此針のみにて熊を捕ふることを獲べし

附子に混ずる者に非ずと雖とも、箭毒にし用ゆる河豚(フグ)の膽(ニンゲ)蓋し卵巢を指斥せる者)を採り、之を融解して矢に塗布す、熊捕ふべしと雖ども、其肉は食ふべからず、凡て河豚の臟附は毒力太だし、箭毒腸管に穿入する時は熊は忽ち下痢を發し終に中毒を發する能はざると多し、箭毒は之を糞中に檢出することを得べし

余は曾て「アイヌ」より附子根數個を得たるを以て直ちに

一　附子一〇、〇　アルコホル五〇、〇　廿七年五月十九日

二　附子一〇、〇　アルコホル一〇、〇　水四〇、〇　同日

二樣の溶液を作り之を數々家鼠に試驗せり、而して其成績は甲乙兩液皆同樣なる者を以て左の一例を畧記し詳細の實驗は之を他日に讓れり

家鼠、中等大

五月廿三日午後三時五分　一筒

背部皮下に注射す

七　分　徐々なる回轉運動、下肢の震戰、

八　分　身體諸筋々性搐搦、震戰、兩肢矯直、

拾　分　叫喚、呼吸促迫、深呼吸、口吻泡沫を出す、下肢麻痺、外部刺戟に因り前足にて飛躍せんとするも能はず、

十二分　兩肢麻痺、死、

解剖　心搏弱し、三分時にして開張期广痺、刺戟少しく再び心搏を催すも須臾にして絶止す

蜘蛛

毒神と蜘蛛神

上記の症狀を案ずるに成書に記する「アコニチン」の作用と異なるとなく又嘗て竹内氏の報ずる所に同じ

蜘蛛、「ヤウシユケツプ」、標本數個を獲て之を檢するに蜘蛛屬中、兩肺者屬Dipneumones中Lycosa saccata, L.に屬する者の如し濕地、泥沼、河岸に棲息す全体黑褐にして胸部の周緣、胸部の中線、後体底部の縱線、足肢の輪環は帶黃白色なり、後体は二列の多少著明且つ白色なる斑點を有す蓋し此亞屬中に彼有名なる毒蛛「タランテル」あり此蛛も亦た或は多少有毒ならん、「アイヌ」は云く附子に蜘蛛を加ふれば附子箭過て人を傷づくるも中毒することなし故に「アマツポ」等には人自ら傷つき易きを以て概して蜘蛛を加へたる附子を用ゆと、古老の語る處を聞に曰く諸樹皮の根を挫截して、之を煮んとするや、先づ神明に祈り次て挫截するに沈默肅恭して盤俎の上、聲を出さしめず亦た家人をして靜寂敢て其室を窺はしめず而して彼の「スルグ」には神居(カムイイマ)せり之を「スルグカムイ」と云ふ其神力甚だ猛鷙なるを以て「ヤウシユ、ケツプ」神(カムイ)(蜘蛛神)をして其力を減殺し以て人類を中毒せしめざらんことを祈る是れ附子に蜘蛛を加ふるの精神なり吾子之を秘せよと「アミ、タンチ、ヤウシユケツプ」なる蜘蛛あり、体圓にして肢節太だ長し若し「スルグ」の毒力如何を檢せんと欲せば、「スルグ」を此長肢蛛の口に貼布す、毒力强烈なる時は此蛛の体看々萎縮し、其肢節は支離崩潰す、而して毒力薄弱なる時は此等の事なし「アミ、タンチ、ヤウシユケツプ」は即はち我蠨蛸(アシダカグモ)是なり

(八)「アイヌ」が識れる藥用植物

畏友ジョンバチラー」氏及農學士宮部金吾氏は亞細亞協會雜誌第十一冊に於てAinu economic plants, 1892と題し「アイヌ」が藥用食用植物を百三十七品を記載せり、余は今其藥用植物の梗概を鈔譯し併せて余が親ら土人に就き見聞實檢せし者を補ひ更に應用に由て類を分てり、乃ち逐次說く所の者、是なり

(一)外科的に應用する者

(一)外科的に應用する者は概ね挫創、刺創、切創、火傷、打撲等及皮膚諸病に應用して眼科的に應用する者も亦た之に屬す而して三十四種を得たり

アイヌ名	邦名	羅丁名	應用
アリツコ	カラマツサウ	Thalictrum aguilegifolium	踏拔せし時此根を貼布せば自然に拔け出づ(千歲)
ホーラップ	山芎藥	Paeonia oqvata	根を咬み傷に貼し化膿を防ぐ 生葉を打身に貼す(鵡川) 關節痛に根を咬み貼用す(千歲) 根を乾かし細末となし烟管雁首に入れ烟薰して耳に入る耳痛癒ゆといふ
コロコニ	蕗	Petasites jap. Miq.	眼病にも咬みて貼用す(鵡川)
ヲトムプイ、クサノワウキナ		Chelidonium Majus.	山中にて負傷する時は莖根を嚙みて傷に傳け繃帶すれば止血す 莖を折り肛門に入れ以て下劑とす故に此名あり
スルグクスリ	菖蒲	Acorus calamus.	落馬の挫創(沙流) 疣に貼す(千歲)
シクレペニ	黃蘗	Phellodendron Amurense	蛇咬傷(沙流)
シユニ	黃棟樹	Pierasma ailanthoides.	根を細末にし創傷に貼す 內皮を細截し之を湯浸して挫創に貼す(鵡川) 火傷藥(沙流) 足指間の濕疹中間なる青色の內皮を採り搗て粉となし、之を梅毒の潰瘍に用ゆ、 皮質を煎し、汁液を以て頭部濕

外科的に應用する者

一名「ユクラ イゲニ」			
チクベニ	擴槐	Cladrastis amurensis	疹を洗滌す、疳疳に貼す 腫瘍に貼す（沙流）
テイナマト チマキナ	和尚菜（ノブキ）	Adenocaulon adhaerescens	打撲創、身体内部の疼痛に用ゆ、此樹の「イナホ」を以て疫行の境界に立て以て疫神を拂ふ
	獨活	Asalia Sachalinensis	葉を炙し之を漆瘡に貼す 熊の爬傷（生根を輪切し傷口に當て又數度之を煎して傷口を洗ふ）
セタコロ コニ	午蒡	Lappa major	軟葉を揉み傷口を化膿せしめ治す又發疹にも外用す
ケドツ、ハシ	山梔（ヤマシキミ）	Daphne chinensis	根を燒き粉となし挫創に貼す（沙流）
イケマ 又「ペヌップ」	牛皮消	Cynanchum caudata	食物中毒の消毒藥 根を細截し煎汁を作り傷面にす切創に効ありとす
トユレツプ	大葉百合	Lilium Glehni	澱粉を以て火傷藥となす

シユヲンテ	牛尾菜（シホデ）	Smilax herbacae	葉を輙にし眼病の時之を眼に張り又腫物切創等に用ゆ
リイテンキナ	ハコベ	Stellaria media	莖葉を湯浸して挫創骨痛等に貼用す
トチニ	七葉樹（トチノキ）	Aesculus turbinata.	實を乾かし貯へ搗碎し煎液を以て創傷を洗滌す
テイカラ	葛	Pueraria Thunbergiana.	葛根を燒き粉末となし之を体部に摩擦す、（疝痛痛風打撲等）
トカヲマップ	ドグゼリ	Cicuta virosa	根有毒 根を黒燒にし骨痛に外用貼布す
チウコマウトイチル シユムン又カムイケウキナ	酸漿	Physalis Alkekengi, L.	子實を碎き腰痛に貼用す
カパイ	薄荷	Mentha arvensis.	葉を痛處に貼用す
ムカゴイラクサ		Laportea bulbifera	葉莖を燒き揉碎し之を傷處に貼用し潰瘍を促かす
カムイタート	タケカンバ	Betula Ermani.	生葉を傷面に貼せば傷を治し炎症を避くと云ふ

ニマツク、コドツク	サイハイラン ハツクリ	Cremastra Wallichiana	根を咬み數回吐き出し以て齒痛を治す
シユプヤ、ヌツプ	ケフリタグ 又狐ノ茶袋	Lycoperdon sp.	胞子を痛處に貼す 切創にも貼布す 火傷藥
ウンマ、シユウガルシ、又シユウカルシクイカルシ	毒菌ノ一種 トボシ	Polyporus offic.	火傷創傷之を咬み（苦味）痛處に貼す 煎劑を胃痛に用ゐ又眼病にも用ゆる土人ありと云ふ
ウラスス	コリヤナギ	Salix multinervis.	皮を細截し切創挫創に用ゆる時は創傷化膿せす（千歳）
ヤイニ	ハコヤナギ	Populus tremula.	同上
ニカンビ	木耳紙	Mycelium layer.	楢（ナラ）、櫚（カシワ）、及アカダモ、ヤチダモ、樹皮下に生ずる菌絲にして止血藥の効あり
プクサ	キトビル アイバカマ	Allium victoriale	疥癬には煎劑として用ひ創傷には葉を揉みて用ゆ
アイ、ラツプキナ	草蘇鐵（コミ）	Onoclea germanica	此草薇に似たり其葉を燒き細末となし火傷糜爛の部に貼す
ウドカアーニ	ミヅキ（ミヅバセウ）	Cornus macrophylla	刀刃を以て樹皮を擦過（ケリケリ）し之を綿絮の如く軟ならしめ挫創（ウチミ）單純骨折、骨痛等の時之を温熨して貼布綁縛す（新冠土人）
パラキナ	觀音蓮	Lysichyton Kamtschatkensis	節儀麻知斯にも樹皮を煎じ琶布（パップ）として外用す 同上

內科諸病に應用するもの

（二）內科諸病に應用する者廿八種を得たり

ホーラップ	山芎藥	前出	腹痛の際根を咬む（沙流、千歳、鵡川）
アリツコ	カラマツサウ	前出	腹痛の際草根を煎用し下劑となす（沙流）

チプケニ又チマウクシュニ	辛夷	Magnolia kobus	皮を煎用す感冒に効あり、又疫神を拂ふ爲めに樹皮の液汁を飲料に交ゆ
レプニハツト	朝鮮五味子	Schizandra chinensis	乾蔓實の煎劑を以て風邪に用ゆ（沙流）
クチプンガラ	獼猴桃（コクワ）	Actinidia arguta	春季其蔓を伐り液汁を採り痰に苦む者に用ゆ（沙流）又水腫を治するに用ゆ利尿の功あり
キキンニ	エゾノウハミヅサクラ	Prunus Padus	辛夷の如く茶に代用し腹痛に用ゐ又「イナヲ」を作り疫神を拂ふに用ゆ（鵡川）
ウペウ	伊吹防風の一種	Seseli Libanotis	煎じて胸痛に用ゆ（沙流）腹痛、頭痛（鵡川）疫神符、
モシュウキナ又ヤカラキナ	大葉川芎	Angelica refracta	胸痛の時乾根を刨り湯浸して飲む（沙流）腹痛、瘀（千歳）

ノーヤ	艾	Artemisia vulgaria	風邪の際草と莖とを鍋にて煎じ蒸氣發騰する時衣服を頭に被り鍋上に臥して發汗に到る、又汁も風邪の藥とす（千歳）艾と筐とを以て瘧に罹れる者を打ち且つ祈禱すれば癒るとなす（沙流）
セタエンドイケマ	ナギナタ香薷（カウジュ）牛皮消	Elsholtzia cristata 前出	到る處茶に代用す宿酔にも用ゆ、珍重せらるゝ太し、根を煎て食となし、之を乾して腹痛の際水に浸し飲む
パアセニ	サハシデクチガロ	Carpinus. cordata	食物中毒の解毒藥此草の生煮の者を食せば中毒して酒に酔へるが如く皮膚知覺鈍广す、土人之を食するに注意す、傳染病にも用ゆ
ソコニ	接骨木	Sambucus racemosa	樹皮を煎じて服用せば疲勞一時に去る疫神を驅る産婦に樹皮煎を內用し

又「チシパラニ」			又之を脚氣に用ゐ太た効ありと云ふ
スルグ クスリ	菖蒲	前出	所謂る水「アタリ」、食「アタリ」の時、又腹痛ある時、根を煎用す(千歳)風邪、頭痛(沙流)
カムイノヤ	イハヨモギ	Artemisia sacrorum	釧路、北見、天鹽の土人之を風邪胸痛に用ゆ
マカヨ	フキノタウ		風邪の時煎用す
シユムヌ、ハツシユ	クロモシ トリコシバ	Lindera hypoglauca	煎して腹痛に用ゆ
ニハル	ヤドリキ ホヤ	Viscum album	殊に「ケチ」樹(ハンノキ、Alnus incana)の寄生木(ニハル)葉を煎用し肺咯血の際之を飲ましめ止血の効ありとなす(新冠)
ニタート、ケチニ	ハンノキ	Alnus japonica	又石婦は其葉を煎用し以て姙娠すると信ず 樹皮を煎じて腹痛(シイハッパップ)に用ゆ アイヌ婦、此樹皮煎を(イチユツプタサレツプ)と稱し分娩后之を服用す

ハスパ (ハシボ、トママシ氏云フ)	イソツヽジ	Ledum palustre L; var. dilatatum.	「アイヌ」は葉を煎じて茶に代ふ葉頗る芳香あり、千島擇捉「アイヌ」は之を下劑として絲蟲に用ゐ、胃病、腹痛には尤も之を當用とす而して其効の賞せらるゝ所以は地方に所謂る水腫病に對し利尿、緩下の効あるを以てなり
ヘネツケレ 又「トドヌツプ」	ハヒ松 (千嶋方言ヒ子キリマツ)	Pinus pumila	千島「エトロプ」「アイヌ」は此實を食品とし又葉を煎用して水腫病に用ゆ然れとも水腫病には「チカツプフツプ」葉多く賞用せらると云ふ、利尿且つ下劑の効あり、山丹(チロツコ)「アイヌ」も亦此点に向ては「チカツプフツプ」を用ゆ
チカツプ、フツプ (カムイフツプ)	ゴエフノマツ 五鬚松	Pinus pentaphylla	
プクサ、又(フラルイキナ)	キトビル アイバカマ	Allium Vicfori alis, L; (?)	葉浸を風邪葉とす 之を門戸に掲け邪鬼疫神を避く

イケマ、トボシ、

ギシギシ 又シユナパ	羊蹄（俗野大黄）	Rumex aquaticus	種子を採集し粉碎して末となし之を煮て服用す下劑の効あり
ハツカ、キナ、	蕺菜（ドクダミ）	Houttuonia cordata	葉莖を軒端に乾かし之を藥用とす「利尿」（十勝、膽振）
ユクプンカラ	聚八仙（ツルアヂサイ）	Hydrangea Azisai	花を陰乾にし之を間歇熱に用ゆ（十勝）
ポンライタ	龍牙草（ダイコンサウ）	Geum japonicum	根を煎用して腹痛を治す（有珠、沙流）葉を採り金瘡に貼す
トーピシキ、ムン 又ライカムイ、キナ 又ヌツプ、シユンク	キジカクシ	Asparagus Schoberioides	土人以爲く死靈此植物を厭ふと甚しと幽靈來る時之を以て追拂ふ 瘧に用ゐ或は腹痛の時煎用す（沙流）

先輩嘗て「アイヌ」の藥品を謂ふ者必ず指を「イケマ」及「トボシ」に僂し復た其他を知らざる者の如し、安永五年桂川甫周は「エブリコ」を携へて之を蘭醫「ドユーンベルク」に質せしとあり又蝦夷風土記（寛政九年新井質著）に云く醫藥無調劑

方。皆獨用。大抵用熊膽。月福利過（エブリコ）、一計麻（イケマ）云々と大槻玄澤が著はせる六物新誌（天明六年）中に云へるあり、曰く噎蒲里哥（エブリコ）又曰多（ボシ）爸矢（ト）者所羈（下中）麼於我邦之野作（エゾ）島所產、而我邦呼曰野作松者木耳也。而擧世爲有奇功。而用之者既已久矣。同社小川松前人也。嘗語余曰。凡土人遇有疾患則不論陰陽虛實、寒熱部位。不問氣血水火、內傷外因。但用此物與伊結麻（イケマ）而療之不復須他藥云。「イケマ」は「アイヌ」の好んで用ゆる藥草なりと雖ども亦其主として用ゆるは感冒に服する茶劑是なり即ち「ヲプケニ」「レプニハツト」「キキンニ」「クチプシガラ」「ノーヤ」「ウペウ」「スルグクスリ」等の如きも亦た同じく感冒に用ゆ。「トボシ」は先輩非常に誇揚せしにも拘はらず、沙流、有珠、千歲の「アイヌ」等之を知らざるが如し獨り「エトロプ」「クナシリ」の千島「アイヌ」は大に之を賞用し感冒、腹痛等に普く之を用ゐ又汚水を飲み中毒せる塲合にも必らず之を煎用すと云ふ。本道の「アイヌ」に在ては「ウペウ」「スルグクスリ」は毎戸貯藏して感冒、僂麻質斯等の藥用となし人々之を賞用せざるはなし、

「アイヌ」語に梅毒を「ウヰン、タシユム」と云ふ、惡病の義なり、「アイヌ」は此惡病

「アイヌ」が識れる藥用植物の潰瘍に對し固有の療法を解せり即ち

テロムン 沙流 ペカンペ、 クツタラ 石狩	ハンゴン サウ 又 ナナツバ	Senecio palmatus	此植物の七個の截痕ある葉のみを擇び、之を乾かし、煎じて梅毒の潰瘍を洗ひ、後に「シケレベ」の末を撒布す（前出）

附　北海道の毒草

北海道の毒草は本州に於ける如く多からず、其主なる者は烏頭にして天南星、觀音蓮之に次く、左に其品目を畧記して斯道の參考となす

一　觀音蓮、ミヅバセヲ（ヤコノシタ羽州）Lysichyton kamtschatkensis Schott. 天南星科、札幌地方、其他到る所の濕地、函館地方、根塊頗毒、「アイヌ」語に「ペラキナ」（廣き葉の草）Parakina と云ふ「アイヌ」其葉を食ふ

二　坐禪草、達磨草 Symplocarpus foetidus, Salisb.

「アイヌ」語に「シケレベキナ」Shikerebe-kina と云ふ、天南星科、土人葉を煮て食す、根に毒あり、

三　天南星 Arisaema japonicum, Blume.

「アイヌ」語に「ラウラウ」と云ふ「イ」ラナノ」北海道に多し土人有毒なる新芽を截除し、根球の中心を食ふ、往々中毒す、此新芽下の青色なる所と附子毒蟲とを混して箭毒を作り、熊を射るに用ゆ、

四　忍冬 Lonicera Morrowii, A. Gray

渡島にて「アタコロビ」其他の北海道地方にては「附子ダマ」と云ふ土人往々中毒すと云ふ、而して凡て其下毒藥として彼等の間に使用せらるゝは牛皮消なり、然れども實際に其効あるやは未だ信を措くべからず

五　毒空木（ドクウツギ） Coriaria japonica　木本黄精葉鈎吻

「アイヌ」語に「キンテニ」Kinteni, Ebot-pochi.（蝦夷方言藻鹽草又「バラカンテ」と云ふ）渡島、後志、石狩、天鹽等に産す

六　附子　前出

七　「トクゼリ」　前出

「アイヌ」が識れる藥用植物

八　蒜蔥蘆「バイケイサウ」アイヌ名「シクツプキナ」Veratrum album.

九　「カラスシキミ」アイヌ名「グトハシ」　前出

十　「クサノワウ」白屈菜、アイヌ名「テトムプイキナ」　前出

十一　野葛（ツタウルシ）、蔓生鉤吻、アイヌ名「ウシプンカラ」Rhus toxicodendron.

十二　「ヤブタバコ」天明精、アイヌ名「アイヌヌキナ」Carpesium abrotanoides.

（九）「アイヌ」語肢體名稱

「アイヌ」は能く身體の名稱を識り又内臓の梗概を知れり蓋し解屍して知り得たる者なるか疑はざるを得ざるなり

「アイヌ」は人體を傷くるを忌めり、況んや死體をや彼は遠かりて墓表のに近かず又人血を忌む更に甚し然らは何の故に内臓を知得したるや彼は元來熊を獵し鹿を屠り以て殆んと生業とせり、彼は熊鹿を解體し内臓を觀、一々之を人體に想像し、各名稱を附せり、彼の解剖學は之を熊鹿より得たりと云ふも不可なからんか

余は嘗て一獵夫の病める者を率ゐ、解剖圖を示し人體の構造を說けり然るに此獵夫は一々熊に在ては是斯の如し、彼斯の如しと指點誤らず余は始て其經驗に長じたるを知れり

身體の名稱は意義ある者多し蓋し盲者が物を探り事を記するに頗る機敏なる者あるが如く「アイヌ」が命じたる肢體の名目に至ては其字を析て其意あるに驚かざるを得ず彼が元來敎育なきも天然の觀察力に富む所

「アイヌ」は能く身體の名稱を知る

名稱意義ある者多し

「アイヌ」には敎育なきも天然の觀察

力に富めり

以○○なり左に名稱表を掲げ之を證明するあらんとす

○名稱表

Namen der einzelnen Koerperteile in der Ainu-sprache.

アイヌ語 Ainuwoerter	學術名及說明 Uebersetzung und Erklaerung im Deutschen	和名 Uebersetzung im Japanischen.
	(1)頭部、顏面　Kopf u. Gesicht	
Pa, Pake, Saqa	Caput	頭
Mechakko	Cranium	頭顱（サンカク）
Pone-Sapa	Cranium (Pone=Knochen, Sapa=Kopf; Pone-sapa-Knochenteil des Kopfes.)	同上
Saqa-kaukitai	Regio parietalis, Ossa parietalia;	顱頂、頂門
Sapa-kaukitai bedeutet soviel als Kopfgipfel.		
Noiboro s. Keputturu.	Regio frontalis.	額、前頭
Noiboropone	Os frontis	前頭骨
Noibe, Noipe	Encephalon; Noibe bedeutet weiches Ding im Kopf.	腦
Noipe-ratu	Dura mater, Meningea	○○腦膜「アイヌ」云ふ熊の爲に頭顱を破らるゝことあり然れども腦の上に被れる薄皮「アイペラプ」を破らざれば人死に到らずと
Upshi-pone	Os occipitalis	後頭骨
Kisara	Auricula	耳
Kisarotop s. Kisara-sap.	Helix	耳輪
Kisara-hap	Oberer Teil des Ohrringes.	耳輪の上廓
Kisara-pui	Meatus externa auriculi.	外聽道
Shik, Shiki, Shikiii.	Oculus.	眼

Shik-num	Bulbus oculi	眼球
Shikoro'mbe s. Shikpe.	Corpns vitreum, Glaskoerper,	水晶体「アイヌ」云ふ眼球を壓碎すれば澄明粘稠なる液体出づ之を爾云ふと
Kunne-shik'-num	Pupilla, (Woertlich heisst schwarzer Bulbus, schwsarzer. Kern im Bulbus.	瞳孔
Retar-shiknum	Conjunctiva bulbi.	眼球結膜
Shik-kap	Palpebrae.	眼瞼
Rarempok.	Der vertiefte Teil des oberen Augenlides unterhalb des Augenbrauns bis zum inneren Augenwinkel.	上眼瞼中、睫毛下より内眦まで凹沒せる部
Shik-rap	Cilia palpebrae.	睫毛
Raru-numa s. Ran'numa.	Supercilia.	眉毛
Shik'-shei.	Augenhoehle.	眼窩
Nanu s. Nanuhu.	Facies.	顏面

Enkoro.	Ein zwischen beiden inneren Augenwinkel u. unterhalb der Glabella sich befindlicher Teil des Nasenrnookens.	兩內眦間にして眉間下にある鼻梁の一部
Nota, Nota-kam s. Huyuhe.	Backen, Wange.	頰
Notakampone	Os zygomaticum	歡骨
Moru-enka	Os temporalis (Regio temporalis)	顳顬骨又顳顬部
Etu	Nase	鼻
Etu-pui	Meatus narium	鼻孔
Etu-puike	Nasenfluegel.	鼻翼
Etu-mekka	Nasenruecken	鼻梁
Hot'turu-gesh.	Glabella; andere Bedeutung: Der erhabene Bogen des Augenbrauns	眉間又眉穹窿
Paro, Para, chars, chara	Os	口
Papush s. Patoi	Labia	唇

Kanna papush et Pokna-papush.	Labia superior et inferior.	上唇下唇
Par'umbe	Lingua	舌
Not'kiri s. Noyap.	Mentum	頤
Not, Not'keu.	Mardibula (Not, Notu=ein Vorgebirge)	顎骨
Kanna-notkeu et Pokna-notkeu.	Maxilla superior et Mandibula	上顎下顎
Nir'ush	Gingiva	齒齦
Kanna-nirush et Pokna nirush.	Gingiva superior et inferior	上齒齦、下齒齦
Nimaki	Dens	齒
Tonun nimaki (Tonon-nimaki)	Schnaidezahn (woertlich Saugzahn).	門齒、(吸齒の義)
Ikui nimaki	Backzahn (woertl. Bisszahn)	臼齒(嚙齒の義)
Esau	Schne idezahn; Esau-tasara=die	門齒、「エサウ、タサラ」

	nach vorn prominenten Schneidezaehne.	とは突出せる門齒、
Otop, Etop.	Kopfhaare	頭髮
Moru.	Schlaefenhaare	鬢毛
Rēki.	Bart	鬚
Kambaush-Reki	Schnurbart	八字鬚
(11)頸、胸、背、腹、	Hals, Brust, Ruecken u. Bauch.	
Rekuchi, Rekut.	Collum; es bedentet in manchen Faellen Pharynx	頸又咽頭
Kut'tum (Kut-tomo), s. Penake	Pherynx, Gaumenbogen, Penake d. i. obere Oeffnung (der Rachen, Schlund) gegenuber dem Worte Panake=Anus.	咽頭又口蓋弓
Pon-parumbe	Uvula (pon, klein; parumbe, Zunge).	懸雍垂

Kuruki	Regio tonsillaris, Tonsille. (Fischkiemen ist auch Kuruki genannt.)	扁桃腺鰓又扁桃腺
Seuri	Pomon Adami, ebenso Larynx, Trachea	亞當氏杏又喉頭氣管
Penram	Thorax	胸廓
Penram-pone	Brustbein u. Rippen zusammen.	胸骨、肋骨
Ut, Ut'pone, Ut'nit, Utni, Utnichi, Utush-pone.	Ossis costae, bei den Tieren, wie Baeren: Raprap-pone.	肋骨
Num s. Tonum	Papilla mammae	乳頭
To s. Rerari.	Mamma	乳房
Tapsutu s. Tapsu, Tapera, Kukewe.	Schulter	肩
Tapera-pone	Scapula	肩胛骨
Kukewe-pone	Clavicula	鎖骨
Ok'kew.	Nacken	項

Ok.	Atlas	載域
Seturu (Seturuhu, Seturu-kam.)	Ruecken; Seturu-kam d. i. Rueckenfleisch, ist die Stelle, wo der M. Latissimus dorsi spannt; bei den Tieren heisst er Piye-kam.	背
Ik'kew (—e), Ikkeu.	Vertebra; Ik=Arthros, Glied; Ik'kewe bedeutet bei manchen "Lendeu"	脊椎
Ik'kewe-pone.	Lenden-knochen, Becken.	腰椎、骨盤
Ik-pui, Pone-ikpui.	Canalis Vertebrae	脊椎孔
Ik'kew-kiripu. (Ikpui-kiripu).	Medulla spinalis; Kiripu=Fett, Mark.	脊髓
Sambe.	Cor.	心
Sambe-nishkut.	Aorta	大動脈
Oroma-nishkut (—nishkuchi)	Aorta abdominalis.	腹部大動脈
Tek'sambe	Pulsus Radialis; Arteria Radialis.	橈側動脈

	(woertlich: Handherz)	
Kem.	Blut.	血
Kem-rit, kem-richi.	Vena; Rit=sehne Blut-sehne=Ader.	靜脈
Sambe-yuk'ram.	Pulmon; Yuk'ram=Leber, od. Eingeweide im engeren Sinne.	肺
Yatu-poki (Yatupok.)	Fossa axillaris.	腋窩
Popera	Epigastrium, Herzgrube.	心窩
Sambe-kashke (Saru); Ningeu-howesarahi (Usu).	Epigastrium-Ein unterhalb des Processus Xyphoideus gelegener Teil.	心窩、胃窩
Ibere-kut.	Oesophagus.	食道
Tui, Tuye.	Ventriculus, Abdomen.	胃腑(又腹部)
Yosh'pe	Ventriculus (auch Vogelmagen, Baerenmagen); bei einem anderen: Dickdarm.	胃(又大腸)

Kan-kan.	Intestinum.	小腸
Tam-tui.	Intestinum.	全
Ruye-kaukan s. Yosh'pe.	Colon (ruye, ruwe=dick)	大腸
Koroma s. Serima.	Processus vermiformis (bei Tieren, wie auch bei Fischen so genannt)	虫樣突腸盲
Oshke, Osh'kehe	Abdomen, Bauch, Magengegend.	腹部、胃部
Tui-kisara	Regio iliaca, Abdomen in richtiger Bedeutung.	腹部の側部(腸骨部)
Kinop s. Huibe, Yuk'ram	Hepar.	肝
Ninge.	Gallenblase	膽囊
Chokokoi (Kinop).	Ren.	腎
Ramoro	Nebenniere (?); das die Niere des Tieres umgebende Fettgewebe.	副腎(?)
Chup.	Milz, (ein Saru-ainu spricht von	脾

	" chup ", dass das Organ unterhalb der Yosh'pe liege u. das sehr blutreich sei. Es soll im Bauche 3 blutreiche Organe: Sambe, Huibe (Leber) u. Chup liegen.	
Pise	Vesiculus urinae	膀胱
Chuk-pes, s. Chupkesh.	Unterleib (die Ovarialgegend)	下腹 「パチラー」氏は此語を心窩と譯せり
Hanku; Haukupui.	Fovea umbillicaris.	臍(窩)
Yoropui, Panake, Otumpui.	Anus.	肛
Chingeu-pone s.	Pelvis (incl. Os pubis, Os ischii)	骨盤骨
Chin-uturu (Hochin-uturu)	Licht-figur zwischen 2 Oberschenkeln.	兩股間空隙(マタノアワヒ)
Tarai-ush, Osoro.	Lenden, Glutaeum.	臀、腰、
Kiru-osh. (Kiro-ush).	Glutaeum; oberer Teil des Oberschenkels.	臀、上腿の上部
Chiye-shut s. Pinki-shut	Regio inguinalis (shut=Fuss eines Berges)	鼠蹊部
Nok-choro-pok	Perinaeum.	會陰
Osorokam	Regio ischiadica	坐骨部
Nisara	Os coccygeus	尾骶骨
Iyomai, Chi, Chiye, Chikap, Kuchihe.	Penis	陰莖
Chiye-pui	Urethra.	尿道
Nok, Nok-pi	Orchis (Nok=Ei, Pi=Kern).	睪丸
Nok-kap.	Scrotum.	陰囊
Chinunuke, Samambe, Ekorobe, Achika, Poki, Ho, Nuinakorobe.	Vagina (Samambe=Pleuronectus sp. 鰈; Ekorobe=das, was du hast; Achika von achik'ka=traeufeln; Nuinakorobe=was ich nicht zeige.)	膣
Sange-apa	Introitus vaginae; woertl. heisst es " unterer Mund "	膣口

Ash'wambe	Clitoris	陰挺
Paruke	Labia maj. et min.	陰唇
Pokep	Hymen	孃膜
Raun-apa	Muttermund.	子宮孔
Po-apa s. Iresugur.	Uterus (Po, Poho=Kind; Apa=Thor; Iresugur=der Ernaehrende).	子宮
Pokap	Placenta, Decidua.	胎盤、脫落膜
Eha	Nabelstrang.	臍帶

(三)肢部　Extraemitaeten.

Makun-amnin	Oberarm.	上膊
Sange-amnin	Vorderarm	前膊
Shit'tok.	Ellbogen	臂

Tek-ukot.	Artiulatio manu.	腕關節
Ainan-pone.	Ulna et Radius.	尺骨、橈骨「アイヌ」に兩者を區別せず
Tek, Teke, Tekehe, Paratek.	Manu.	手
Tek'tui-poki.	Vola manu.	手掌
Tek'tui-kashi.	Dorsum manu.	手背
Shimon-tek et Hariki-tek.	Manu dextra et sinistra.	右手、左手
Ashiki-pet.	Digitus (ashiki von ashkne=5; pet=Fluss, Zweige, hier 5 Zweige).	指
Ruye-Ashikipet s. Poro-A.	Daumen.	拇
Itangikem-A.	Zeigefinger (Itangi ist eine Essutensilie; kem=lecken; derjenige Finger, womit wan Itagi leckt)	示指
Tutana-A. (Noshiki A.)	Mittelfinger.	中指
Shin-noshki-A. (s. Otta-	Ringfinger	環指

A. ,Mo-A.)		
Pon-A. (Mo A.)	Kleinfinger	小指
Am.	Nagel.	爪
Om-pone (Kiri keu-pone)	Os femoris.	大腿骨
Om-mekka.	Vorderer Teil des Oberschenkels (Oberschenkelfleisch)	上腿の前部
Om-tui-pok s. Om-utorokam.	Hinterer Teil desselben.	上腿の後部
Om-kotoro.	Innerer Teil desselben.	股〻(腿部内側)
Kokka-sapa (—sap)	Genu, Knieescheibe.	膝蓋
Ninoro-poki	Kniee-beuge.	膝窩
Nisap-pone.	Tibia et Fibula	脛骨
Yontek-kam s. Utti kam	Musc. Gastro-cnemius	腓腸筋
Tokun-pone	Fuss malleolen.	足踝
Ruye-richi, Ruye-rit.	Tendo Achilles ; woertl. grosse, starke Sehne.	亞基列氏腱

Keshup.	Fers.	踵
Kema s. Kiri, Chikiri.	Pes.	足
Ure-mekka.	Dorsum pedis	足背
Ure-kotoro, Para-ure, Ure-asama	Vola pedis	蹠
Chikiriashikipet (Ure-ashikipet).	Zehen.	趾
(四)雜門	Verschiedenes.	
Netobake.	Corpus.(Rumpf u. Extremitaet.)	体軀
Tumama.	Rumpf.	軀幹
Pone.	Knochen.	骨
Ik, Iki, Pone-iki, Pone-uweush.	Articulation	關節
Kam.	Fleisch, Muskel.	肉筋

Kapu, Kapuhu	Haut.	皮膚
Numa, Numaha. (Honuma Kenuma)	Haare. Schamhaare, Schenkelhaare.	毛 陰毛
Nin	Muskel.	筋
Richi, Rit	Sehne	腱
Ram, Rama, Ramat.	Geist, Seele	心靈
Kaisei.	Leichnam	屍體
(五)分泌排泄門　Secretion u. Excretion.		
Nupe, Nupehe	Thraene.	淚
Poppe	Schweiss.	汗
Kisat'turu	Ohrenschmalz.	耵聹
Etoro-rat'.	Nasen-sekret (Rat'=sputum).	鼻汁
Non s. Topse	Speichel.	唾液
Tope.	Milch (Pe, Sekret; To, Mamma).	乳
Osoine, Esoine, Okuima.	Urin.	尿
Osoma.	Faeces.	糞
Opke.	Darmgas.	腸氣
Oatu-wakka, Pōat.	Sperma.	精液
Ochup-range, Chuprange, Chuppe.	Menstruation (Chuppe=monatl. vorkommende Sekretion).	月經
(六)生理門　Physiologsiches.		
Yairat, Honkoro, Honum.	Gravida.	妊娠
Kapuhu, Iknruru.	Wehen.	陣痛
Chiye-ohepuni.	Erection.	勃起
Ibe-mondum.	Appetit.	食欲
Itak.	Stimme (Sprache).	音聲

Heise s. Heise-mawe	Athem.		呼吸

附　Anhang.

余は「カベレンツ」(Georg von der Gabelentz, Handb. z. Aufnahme fremder Sprachen, Berlin 1892) が指定せる者に準じ左に身體の機用に關する「アイヌ」語を集錄し前條の附錄となすべし

ashik-ore, hekatu	出產（目を開かせるの義）	chissh.	泣く
oresu, iresu	生長す	mina	笑ふ
shiknu.	生活す	chopchop-seikara	接吻
heiseki.	呼吸す	kem-kem	嘗む
ibe-rusui.	飢餓の感	poppenu, poppe-ashin.	汗（アセ）す
ibe	食ふ	keuk, raige	殺す
ibere	養ふ	nukara	視
kubaba	咬み付く(動物)	nu.	聽

ikui.	嚙む	hura-nu.	嗅
kironnu.	滿腹	tembara.	感す
ram-satsat.	口渴す	tomo-oshima.	觸知
okuima.	溺す	uka-un.	交接
iku.	呑む	chinitakoro, chinitaki.	夢む]
yashke, sush, furaye.	洗ふ、浴す	yaikiki.	搔く
eshna.	噴嚏	iun-iun.	大に痛む
omke.	咳す	nutokkari, homara.	眩暈
ewara, heise.	吹く、息（イキ）吹く	hairotke.	挌指（クラグツダイ）の感
mausok.	欠（アクビ）す	sattek.	瘦る
mokoro.	睡る	hetopo-shiknu.	蘇生す
mossh.	醒覺す	kakse-kakse.	咯痰す
ikoni, araka	疼痛（イタム）	atu-range.	嘔吐す
tusa.	治癒す		

(十)「アイヌ」語の病名

二百有餘の病名

「アイヌ」の愛すべき所以

余は多年「アイヌ」の患者に就き親しく病症を反覆諮詢するの際に於て二百有餘の病名を記錄し得たり

然れども沙流語は或は有珠、千歳、幌別等と語を異にし、或は語を同ふするも意を異にするを以て余は之を判斷區別するに於て頗る苦心を費せり而して一の沙流人にして猶ほ甲の謂ふ所、乙の謂ふ所と其意或は其語を異にするに至ては更に其苦心の甚しきを覺へたり是に於てか猶ほ他日の調査を要する者無きに非ず之を要するに「アイヌ」は太だ實歷の語に富み浮華の辭なし實物を觀察し實況を描寫するに眞率にして復た虛なし是其愛すべき所以にして余が最も彼に取る所なり、

惟ふに彼の語に詳通するに非んば數多の病名も興味なかるべし彼が命名の適切なる所以、彼が觀察に富贍なる所以、彼の語を解して而して後ち識るを得るなり

我邦の奈良平安の時代、出雲廣貞が大同類聚方は能く和名の病名を掲げ得たるも、今人の驚く所なり、然れども彼は尠然たる古代醫學の盛世に成れり、我「アイヌ」病名は何如、此蠻野の民俗にして驚くべき多數の肢体名稱を有し、兼て多數の疾患名稱を有するを考へ來らば大同類聚方未だ稱するに足らざるなり、次に掲ぐる所を見ば思ひ半に過ぎん

アイヌ語病名錄　Namen der Krankheiten in der Ainu-sprache.

Shiyeye s. Tashum, Ikoni.	Morbus (Shiyeye-guru, Patient)	疾病
(一)呼吸及血行器病		
Omke.	Husten, Erkältung.–Omke ist bald Nomen, bald Verbum.	感冒。此語中、總て咳嗽を發する諸病を含む、「チュク」は蓋し咳嗽の意なり

Rat (Razu).	Sputum	痰
Rekuchi araka, s. Seuri araka.	Pharyngitis acuta, in manchen Fällen: Angina, Croup drgl.- araka bald adjectiv, bald Nomen, letzten Falls: Entzuendung.	急性咽頭炎（急性口峡炎、格魯布）
Kuruki-tuk	Tonsillitis; tuk=Anschwellung, (alle Tonsillitiden).	扁桃腺炎（又扁桃腺諸病）
Etu-Kemun-shiyeye.	Epistaxis.	鼽血
Omke-tashum.	Bronchitiden et	氣管支諸病及肺癆、肺結核
Satpe, Satpekoro, Wen-omke, Satpe-tashum.	Phthisis pulmonum (sat=trocken; pe=Saft, Sekret, nutrinkbares Wasser; Satpe=die Koerpersaefte vertrocknen, verzehren; Satpekoro=von Satpe besessen; wen=schlecht, Wen-omke=boeses Husten).	
Heise-heise	Dyspnoe od. dyspnotischer Zustand.	呼吸促迫の狀態
Obiyo	Heiserkeit; "ku Rekuchi mu"=meine Kehle ist heiser.	聲音嘶嗄
Sambe-tashum	Herzkrankheit; es bedeutet richtiger Melancholie od. Hypochondrie.	心臟病又悒鬱病
Sambe-toktokse	Palpitatio cordis, Herzklopfen.	心悸亢進
Penram ataka	Brustschmerz (Pleurodynie), Rheumatismus der Brustmuskeln, incl. Pleuritiden et Gastritiden.	胸痛、胸筋僂麻質斯（肋膜炎、胃炎等を含有す）
Rekuchi iyun (Rekuchi pone iyun wa rai)	Fischgeraethe, gestochen geblieben in der Kehle, infolge Tod.	魚骨、喉に刺入し爲に死すの義
(1) 消化器病		
Iberekut araka	Dysphagia.	嚥下困難（膈）

Tuye iyun.	Volles Gefuehl u. Appetitlosigkeit.	食欲缺乏、滿腹の感
Honi araka, Sambe araka, Tui-wen, Oshike araka.	Bauchschmerz; acute u. chron. Gastritis u. Enteritis.	腹痛、急性及慢性腸胃加答兒
Opichitche, Opikikise, patatshe, Peuci osoma.	Diarrhoe, acute Enteritis; opichitche=Leerwerden; Peneï-osoma d. h. wässeriger Stuhl, wird gebraucht meistens bei Dysenterie; penei, teine ist schlechtes Wasser, (Nishte osoma=harter Stuhl.)	下痢、急性腸加答兒
Oshi eshikari	Obstirpation	便秘
Honi sekukke	Ascites, Bauchauftreibung, Meteorismus. (Honi hapapuki=Auftreibung abgeschwollen).	腹水、皷脹
Shihapapu.	Bauchkolik, Borborygma (resp. Peritonitis acuta).	腹痛痛、腹鳴(急性腹膜炎)
Oshike-kuyatatke.	Borborygmen.	腹鳴

Atu.	Vomitus.	嘔吐
Atu-kopase.	Bestaendiges Erbrechen, wie bei gewissen Vergiftungen, od. bei Vomitus gravidarum od. bei Vomitus matutinus.	妊婦嘔吐、吐水痾、中毒に因する嘔吐等
Enish-peush.	Salivatio; als Ursache ist angebl.: das Harnen der Parasiten im Darmrohr, "Tui orum Kikiri okuinna rusui."	流涎
Ikk'mauve, olaiyokke.	Ructus, Ardor stomachi.	噯氣
	(11) 神經系統疾病	
Chikuwaikara.	Apoplexie.	卒中 某「アイヌ」云ふ日見るべからざる者に中り傷を負ふも出血せずして死する者を「チクワイカラ」と云ふと(カマイタチ)
Samke-tumsuk,	Herz-parese; Shok, Collapsus;	心臟麻痺、ショック、虛

Samberai, Sambe-toranne.	Bewusstlosigkeit wie bei der Epilepsie; tumsak=Ohnmacht; rai=Tod	脫又人事不省、卒倒
Sapa-koni.	Kopfschmerz, Meningitiden,—eine Hirnkrankheit, woran man stirbt.	頭痛又は腦膜炎？（死すべき腦症をいふと）
Nochi-iush, Nochiu-ush, Sambe-muruse, Pitke, Chea-chiu (-tashum).	Epilepsie.	癲痫
Tusushke-tashum.	Myelitis chr, Paralysis agitans, Tabes dorsalis; ausserdem ueberhaupt diejenige Rueckenmarkskrankheit, die das Zittern als Symptome. hat.	慢性脊髓炎、脊髓痨、震顫痲痺
Raikamui-irushkatashum, Kamui-irushka-tashum, Kamui-ok.	Hemiplegie infolge der Hirnblutung, ebenso Paralyse et Parese; Raikamui—Daemon, irushka=zornig, ok=traurig sein, von Teufel traurig gemacht.	癱瘓、又運動麻痺
Yashitukkari, s. Ikkew-kamuikoro, Opanrai.	Myelitis chr., Paraplegie ("Rückgrat ist von Teufel besessen"); opan von opanake=Unterleib; "unteres Leib ist tot."	慢性脊髓炎、截癱
Tukunne s. Raitukunne.	An=et Paraesthesie.	知覺痲痺及知覺異常
Yontekam-shiōni.	Wadenkrampf.	腓腸筋痙攣
Etomo-chinne, Ramsak, Oramsakbe.	Imbecillitaet, Moral insanity, (Ram=Geist, Gefuehl, sak=los, Oram-sakbe=der Geistlose)	癡呆、不德狂
Katu-iush.	Paranoia; Mania (die verrueckte Behandlung tritt hier in den Vordergrund auf.)	譫迷狂、誤狂、行爲之癲狂、
Imu.	Mania; Hysteromania, besessener Wahn.	誤狂、臟躁狂、憑狂
Tokkoni-parachi, Kinashut-Kari.	Schlangenbesessenheit.	蛇憑（「パラチ」とは祟の意）
Meko-paroat (parachi).	Katzenbesessenheit	猫憑

(Dialekt: M.-paratsu)		
Umma-raige-paroat.	Pferdenbesessenheit.	馬憑
Chironnup-ituren.	Fuchsbesessenheit.	狐憑
Yayoyakara.	Delirium.	譫語
Yaiwen-takara.	Boeser Traum (Traumbild).	魘夢
Iuiu kesh-tashum.	Der Zustand, der hervorgerufen bei lang dauernden Krankheiten, dass die Schwaeche des Koerpers Verzicht leistet auf die Bewegung der Unter-extremitaet.	持續したる一定の病患により非常なる身体の衰弱を來し爲に專ら下肢の運動を麻痺するの症(脊髓炎の如き者か)

(四)外科諸病及皮膚病

Piri, Pirihe.	Vulnus.	創傷
Ampiri.	Kratzwunde (Am=Nagel), eb-enso kleine Schlitzwunde der Haut.	搔爬及擦過傷
Setakubapa.	Hundebiss.	犬咬傷
Tokkoni-kubapa.	Schlangenbiss.	蛇咬傷
Shitashike.	Von Baeren gekratzte Wunde (Kamui orowa shitashike-guru).	熊咬傷
Nitotke.	Stichwunde an der Fusssohle.	竹木刺
Homeru.	Contusion u. die, welche geheilt ist.	「打身」并に治せる挫傷
Homeru-araka.	Contusion, u. Schmerz, der auftritt in die fruehere Contusionsstellen.	挫傷及挫傷部に於て後日來れる疼痛
Ye, Iyo.	Pus; (ye-ush=eiterig).	膿
Rauke-pene.	Abscess od. entzuendliche Phlegmone.	膿瘍又炎性「フレグモーネ」
Totche.	Contusion u. schmerzhafte Anschwellung.	挫傷及之に因する有痛隆起
Kemo-tot.	Contusion u. Blutextravasat.	挫傷及溢血

Ikoni-tupiri.	Geheilte Wundnarbe.	治癒せる創傷瘢痕
Ponekaye.	Fractura ossis.	骨折傷
Epitek.	Vollständige Luxation (Tapsu-epitek=Schulterluxation; epi-tekka=luxiren).	全脫臼
Pone-uëush-iusa-yoshima.	Seitliche Luxation.	側方脫臼
Kemakoni.	Necrosis ossis tibiae s. femoris.	腐骨疽
Kemi-ikaotte-shiyeye	Haemorrhoidalkrankheiten.	痔核
Shitappa s. Chire.	Combustion.	火傷
Hup. (Popp).	1. Anschwellung, herruehrend aus der Entzuendung od. aus der Geschwulst. 2. Oedem. 3. Furunkeln u. einzelne Exanthemata. 4. der Absceding entneigende Geschwulst.	炎性又は腫瘍よりせる腫起又は水腫、又は癤瘡、小發疹、化膿せんとする腫脹等、「アッペ」とは内部の軟部よりして隆起せるもの「ポッペ」とは皮膚のみ隆起せる者を云ふ
Pop-pise-hopni:	Brandblase, wie bei der Combustion od. Frostgangraen.	火傷又は凍瘡に因する水泡
Pop-porose.	1. Exanthemata acuta, wie bei acut. Infect-krkh., Urticaria etc. 2. Palpitation, Pulsation, pulsirende Geschwuelste. 3. Hitzegefuehl an gewisser Koerperstelle. 4. Zuckendes, ziehendes Gefuehl an der Fusssohle, (bei einem Saru-ainu). 5. Blasige Anschwellung.	一 急性傳染病に於ける發疹 二 心悸亢進、搏動せる腫瘍 三 灼覺 四 牽く如き搐搦する如き感覺（纖維搐搦） 五 水泡樣腫脹
Verruca (Papilloma).		疣贅、瘜肉
Stichelnde Schmerzen an der Haut wie bei einer Schlitzwunde, bei e. Brandwunde.		擦過傷、火傷に於ける如き、皮膚の刺す如き疼痛
Bei einem anderen: Neuralgische Schmerzen an den Haarwurzeln, am Kopfhaare.—Nach meiner Ansicht:		又毛根に於ける神經痛樣疼痛 又假面「マラッア」に於
Erum-tambu s. Erem-tambu.		
Ikeri-karap.		

Yau-rashi-kam.	Neuralgie bei larvirter Malaria.	ける神經痛
Iyo-aship (Saru), s. Sapa-wenchimaush (Sapawen-chimaush-etoi).	Eczema am ganzen Koerper (Scabies)	汎發濕疹（時に疼癢性）
	Eczema am Kopf.	頭部濕疹 「サパ、ウヘン、チマウシュ」なる濕疹は頭部に痂を作り不治の者たり小兒に多し而して此者の爲に頭禿す之を Etoi と云ふ而して其色赭なり之を Etoi-sapa といふ
Kapu-pitak-tashum (Usu).	Do.	頭部濕疹 沙流「アイヌ」は云ふ此語「イヨアシップ」と異なれり「カプピタック」とは濕疹の結痂剝離せる者を云ふと
Chima.	Crusta (eines Eczems u. drgl.)	痂
Maiyaige-tashum. 1. Maiyaige-tashum.	Scabies (maiyaige=jucken). Scabies mit grossen Eiterblasen (Scabies bullosa).	疥癬 大水泡（膿胞）を有する疥癬
2. Munchiro-maiyaige-t.	Scabies mit kleinpustulosen Exanthemata.	小なる發疹にして粟粒樣の疥癬

Sapa-wen s. Etoi, Otop-sak, Epitche, Mintuchi-shāni.	Alopecia (praematuris, senilis et parasitaria).	（早老性、老性人、寄生性）禿瘡、（圓形禿瘡）
Ruru-chine.	Urticaria.	蕁麻疹
Usshi-kara.	Lackeczem.	漆瘡
Saksa-fura.	Bromo-idrosis (bes. der Achsel-hoehle.)	臭汗症、腋臭、
Ture-ture-kii (-kei).	Pityriasis versicolor, (u. zwar kleiner Fleck).	小班の頑癬
Seta-utere-kei.	Pityr. vers. bes. am Gesicht u. Hals, weiss auf schwarz.	癜風、頑癬
Niyetu.	Papel (mit Jucken).	癢性丘疹
Uwechi.	Gangraena frigida.	凍瘡
Chiwa-uke, (Tekepereke)	Rhagaden u. Schwielen der Hand.	手に於ける皹裂及胼胝
Ure-pereke.	Drgl. des Fusses.	足に於ける者

(五)傳染諸病

Opop-mau-kara, (Sēsek-mau-kara).	Febris.	熱
Opop-mau-tashum.	Fieberhafte Krankh.	熱性病
Wen-tashum	Syphilis (-schlechte Krankh.=Wentashum).	梅毒
Munin-tashum, Munin-shiyeye.	Lepra (munin=verfaulen), zuweilen Gumma.	癩(又腫護)
Kema-hup. Mehupka. Kotutke-tashum. Huptashum.	Kakke; kotutke=Oedem.	脚氣
Iyunin-ba.	Acute fieberhafte Erkrkg, vielleicht Influenza.	或る熱性病を指す而して症狀何ぞるや未詳
Shikator'-(toro) kamui Shikatorotashum	Typhus abdominalis, (bei e. Autor; Pocken, bei e. andern: Cholera, bei e. 3.: Influenza, u. s. w.)	腸室扶斯及他の熱性病(流行性感冒)
Tōpishiki.	Malaria (To=Tag, pishke=rechnen, zaehlen).	間歇熱
Ikosan.	Malaria-anfall. (Nach Ainu's Gedanken komme der Anfall dadurch zustande, dass das ganze Bild von Rueckgrat herab zu Tage trete, deshalb "Ik-o-san" d. h. von Rueckgrat herab) Froesteln: "uru-uruk," Zaehne klappern: "wau-wause, s. Notata wause."	間歇熱發作 戰慄
Kamui tashum, Kamyash-tashum, Oripak-shiyeye.	Variola. Kamyash-tashum gebraucht in Ainu's alten Drama (yukara), kamyash=Daemon, Schlange; oripak=ehrerbietig, die Krkh., zu der man Ehre erbieten soll.	痘瘡
Iyokoto (Usu),	Blattnarbe; Iyo, ye=Eiter;	痘痕

Kamui-tashum-Ikoni-tu-piri. (Saru).	koto=Gefaess, Becken.	
Mekamui-koro (Mehup-ka)	Acut. u. chr. Rheumatismus. (Me=Kaelte, Kamui-koro, von Teufel besessen).	急性及慢性僂麻質斯
Ponetum (-tom)-araka s. Pone oshi-araka	Rheumatismus articulorum acut. et chr., Malaria larvosa, Osteocopia syphilitica, Kakke.	僂麻質斯，痛風，(假面間歇熱，梅毒性骨痛，脚氣)
Ikkeu-araka,	Lumbago.	腰部僂麻質斯
Uwotke-tashum,	1. Vaccination	一 種痘
Uwetoita-tashum,	2. Infectionskrkh. (toita=Acker; uwetoita=saen; Krankheit wie besaet, Epidemie; turese=sich anleimen, adhaesiren, inficiren.	二 傳染病
Turese-tashum.		

(六)生殖泌尿器諸病

Rerari-ikoni.	Mastitis (Rerari=Mamma).	乳房炎
Oku eshkari.	1. Gonorhoea, 2. Ischuria.	一、淋疾 二、尿閉
Retarpe-san.	Fluor albus. (Retarpe-das Weisse)	白帶下
Chuppe-wen.	Dysmenorrhoea.	月經困難
Pesak-chup.	Amenorrhoea.	月經淹滯
Oraibe-tashum.	Impotenz.	陰痿
Yaika-okuima-tashum.	Enuresis nocturna.	遺尿
Hon-yaku, Hoiyaku.	Abortus. (hon, honi=Bauch; yaku-zerstoeren, Ei).	流產(墮胎)
Poë-un.	Schwergeburt (u. Tod dadurch)	難產 必す死すべき難產をおくいふ
Yupke-nuwap.	Schwergeburt (yupke-streng, nuwap=jammern).	難產

(七)畸形病，不具

Otup-koro-guru.	Zwitter.	半陰陽

Epetke.	Leporinum labium.	兎唇
Mitutchi shāni.	Syndaktylie (auch Alopecia).	駢指
Ashpa	Surditas.	聾
Shomo-itak	Infantia linguae.	唖
Shomo itak-ashpauwopuk.	Infantia linguae et Surditas.	聾唖
Shiknak	Blindheit.	盲
Yaiwen, Hera, Oshirushi.	Claudicatio, Lahmheit.	跛
Ikkewe-rëuge, s. 'Iunnak.	Kyphosis.	龜背
Hauku poro.	Hernia umbilicaris.	臍嶽爾尼亞
	(八)五官中聽視官諸病	
Shiknum-rai	Staar ("toter Bulbus").	白內障
Kisarape kush.	Otorrhoea (auf scrof. Basis).	耳漏
	(九)雜門	

Paroi-kush.	Gingivalbutung, Scorbut.	齒齦失血、矢荷陪多
Yaiatte-raige.	Erhaengen.	縊死
Merupshwarai, Meekot.	Erfrieren (u. Tod.)	凍死
Pet oshiketa ahun yai tasu-tuye.	Ertrinken.	溺死
Yairaige.	Selbstmord.	自殺
	(十)中毒	
Karush-earaka.	Vergiftung durch Pilze.	菌中毒
Kamui huibe-earaka.	Vergiftung durch Baerenleber.	熊肝中毒
Irushkachep earaka.	Vergiftung durch Tetrodon.	河豚中毒
	(十一)寄生虫	
Parakankan.	Bothriocephalus latus (incl. Taeniae).	裂頭綠虫

Tuye-ki-kiri	Ascaris lumbricoides.	蛔虫
Rayo-ki	Pediculus pubis,	陰虱
Ki	〃 capitis.	頭虱
Uru-ki	〃 vestimentorum.	衣虱
Tai-ki	Pulex irritans.	蚤

以上記述する所に據りて之を見るに「アイヌ」が病名は意外にも富贍なりといふべし某者曰く「アイヌ」に如斯多數なる病名あるを疑ふと余は嘗て之に答ふらく此言は親しく「アイヌ」の風俗習慣及び言語に通曉せざる者より出づるを常とす「アイヌ」は本來性質小心にして小恙と雖も之を意に介して已まず而して彼は必ず之に名を附して記臆せんとするの習癖あり山水木石飛ぶ者走る者游く者蠢爾たる瑣細の者も猶盡く名を命じて殆んと漏すなし彼は宇宙の森羅万象を能く着目して忘れざらんとを勉めり唯惜むらくは彼に文字なく終に長く發達し得ず空しく種族と共に湮滅に歸し去らんとするを。

出産の事頗る隱密に屬す

分娩時の位置

（十一）出　産

「アイヌ」の出産に就ては、彼の民俗之を隱密にすると甚たしく、容易に之を窺ひ知る能はず、頃者「ジョン、バチェラー」氏は之を探討せり其甚た醫事上、人類學上、興味少なからざるを以て間に余が見聞を加へ、左の順序に據り、之を記述すべし

（甲）出産の場所

「アイヌ」産婦は通常の寢牀にて分娩するの風習なし故に産婦は先づ其産所を擇ぶを常とす而れども擇ふに規定なく唯々便宜之れ從ひ甲は其家に於てし乙は其家の廊上に於てし丙は森林中に於てす若し其家屋中に産所を定めたる時は、通常の寢臺を引き伸ばして、假牀乃ち産蓐となし以て分娩を待つ、

分娩する時は常に坐位或は排便の位置を取り決して臥位を取らず（余が聞く所によれば十勝山中の「アイヌ」俗に臥位を取る者あり）若し廊下に於てする時は筵席を持ち行き其他殊に準備する所あるべし

(乙)産後の處置

兒の處置方

(一)兒

初生兒は産婆之を温湯にて洗ひ且つ注意して之を柔軟なる布帛に包裹す、時としては冷水を以て洗ふ者ありと云ふ然ども兒を生めば直ちに海水に入りて兒を洗滌し汚物を濯き醫藥を用ひずと云ふものあれども(之を北海隨筆に記せり)信ずべからざる者なり、臍帶、胎盤、等は之を戸の入口又は之を遠く埋む而して之を棄てゞ畜類の食餌に儘にすと云ふ者あれども是亦信ずべからず

死胎

若し死胎を産する時は産婆若しくは緣家の女兒早く之を取りて葬るを例とす

兒生れて聲を出さざるとき

若し兒生れて聲を發せざれば一人の婦人は徐に之を抱き箕中に入れ左右に振顫し聲を發するに至て已む

「アイヌ」に産姿あり

「アイヌ」の産婆は其語に「イコ、インガル、グル」"Iko-ingar'guru"と云ふ其職とする所は出産ある所に聘せられ萬事を處すると邦俗の産婆に異ならず亦發達せる者なりと謂つべし

産孽婦は之を何如にするや

(二)母

分娩の際其家夫及其家に在る男子並に奴僕は盡く去て家に在らず即ち甲婦は初生兒を愛護し乙婦は産孽婦を看、丙婦は手を以て産孽婦の兩眼を蔽ふ、盖し産婦健全にして分娩の爲めに衰憊せざれば可なりと雖も、概ぬ然らざるを以て一、二時間は其兒を母に示さす、而して母健全他に憂ふる所なく其可及的睡眠に就くを望む

ニタートケ子ニ煎

他の婦は之に「ニタート、ケ子ニ」(イチユツプ、タサレツプ)煎を飲ましめ或は又「ソコニ」(Sokoni, Onnechikuni, Oshparani 等の名あり即ち接骨木 Sambucus racemosa, var. pubens, Trautr. et Mey.)樹皮煎を飲ましむ

ソコニ煎

産後疼痛の緩和法

他の婦は産後の疼痛を緩和せんが爲め水を以て産婦の腹部を洗ひ手を以て肋部を撫す又は「ソコニ」の樹皮を以て壓錠(カタブヲスマ)を作り陰門の上に置き以て疼痛を減ずるとなし又は腫脹を抑壓し兼て子宮を収縮すとなす

産後二日間の食品

産婦は二日間唯米麥稗粟等の稀釋なる粥水を啜ふのみにして其外水すら尚ほ飲ましめず

第三日に至り始めて産婦の好む所を食せしむ

而して六日間は安靜を主とし産蓐を守らしめ又は爐火の傍に來り安座せしむ

第七日にして蓐を去る

第七日に至り起て蓐を出て河邊に水を汲ましむ其理由は産婦は第七日に於て必ず强壯舊に復する者と信ずるに在り

ヤイヌヌケ

(丙)其間夫たる者の行爲

其夫は如何彼は我婦分娩の際家を出て隣家又は緣戚の家に走り謹愼沈默して復た酒を飲まず神を拜せず而して亦「イナヲ」を造ることを得ず斯の如きと六日夜は爐を擁し日も猶忉然愁ひ且つ深く慮る者の如く又全く脫神して力なき者の如し之を「ヤイヌヌケ」と云ふ以爲らく父の魂出て初生兒の生命となる故に愼默すと自ら慰め又は休息するの義なり第七日の朝に至り彼は「ショッキチユッペ」Shokki-ciup をなす寢床を疊み之を投棄するの意にして彼

夫たる者亦禮あり

は此の日を以て家に歸る歸后六日些の美酒を飲み「イナヲ」を作爲し得るも猶ほ「イクタサ」Ikutasa するを得ず(不レ得下會二知友一張中酒筵上の義)又「ハイナレ」Hainare(獵漁)するを得ず

難産の原因

(丁)難産

「アイヌ」女子は難産は我が自ら爲せる罪業の結果若くは嘗て虛言詐僞をなせし爲めに來る者なりと信ずるを以て其罪を懺悔し來らば安産すべしと思考せり然れども懺悔すべきの罪業なくんば之を如何せんか、輒ち時に「アイアイヘラサ」Aiailherasa を爲す即ち周邊の者(女子若くは産婆は兩手を以て産婦の腹部と肋部とを撫下するの法なり是法にして効なき時は産婦の兩腋下に手を挿入して提擧且ッ振動し恰も兒を振ひ落すの狀をなす之を「テレケレ」Terekere と云ふ躍らすの義なり又「ニシュコテレケレ」Nishuko-terekere の語あり難産の婦人をして臼上に跨らしめて之を振盪するを云ふ

難産救治法

難産に際し胎兒の足先づ出で又は胎兒の肩間へて出てざる時は「ラス

バニ」(Raspani; Hydrangea paniculata, Sieb. 方言「サビタ」又「ノリノキ」)の内皮を湯煎して糊泥を作り之を膣中に入るゝに依り子宮孔開き胎兒の位置自ら廻轉して出づると信ぜり

附「アイヌ」婦女に關する其他の習慣等

妊不妊、石婦、邦人の兒女を養ふ、十勝原野アイヌの風俗、臍帶、初生兒の養育、月經開始年齢、

「アイヌ」婦人の妊不妊　余は診療の際之を調査せんと欲し、八十七人の老婦を得て仔細之を檢するに六人の石婦を除き去り、八十一人中、子一人を有する者を消極とし十人を有する者を積極とし、平均一婦六子の數を得たり之を老夫に聞くに一婦四五人乃至七人は殆んど通常なる者の如し而して其老夫婦は多産者にして一胎十四人を有し中に夭折する者なきの例を示せり

爰に恩師小金井博士が著、帝國大學紀要、醫科第二冊第二號第三三五頁より左の文を摘譯して他日の參酌に供せんとす

「アイヌ」夫婦の妊性は甚だ好都合ならざる者の如し。一夫婦間に生ずる

平均一胎六子

「アイヌ」婦人の妊不妊

兒の數を大略計り定めんと欲し余は五十九人の體格測定の際、其姉妹數を記し又老人に就き其兒數を記し平均五、一の數を得たり「ドブロトウヲルスキイ」氏 Dobrotworsky に據れば「アイヌ」の妊性僅少なり、一夫婦間の兒數は平均三乃至五に止れり「シヨイベ」氏 Scheube に從へば其數更に僅徴にして兒數三乃至四を以て通常となせり。「アイヌ」が兒女數は余が考ふる所に據れば日本人より少しく劣れる者の如し。日本人に在ては六十人よりせる姉妹數は六、〇を示せり、

石婦は其罪を神罰となし之を竈神(火神)に祈る若し子を得んと欲せば多子者の家に赴き故を陳して其竈神に祈り神酒を捧げ恭敬默拜す其家の主父一木標の兒形を彫刻せる者を取り窃に之を無子者の婦懷に入る婦及夫は之を知らずして衾を同うすれば必ず懷胎すと云ひ傳へり。

「アイヌ」には子なき者は去るの習慣なし然れども亦た妾を蓄ふるを得ず之れあるは獨り部族の長、乃ち乙名のみ、若し子なくして繼續者を得んと欲せば、之を我邦人の赤貧者若くは私生者に求む、故に現時「アイヌ」種族中、

「アイヌ」の血液は永遠に日本人中に循環すべき

十勝原野「アイヌ」の風俗

臍帶

初生兒の養育

邦人の兒女を子とし養ふ者少しとせず、而して兒の年齡は多く其哺乳時なりとす（余之を聞くに兒の價五圓乃至十五圓の間に居る者の如し）小金井博士曰く、余は「シヨイベ」氏の言の如く斯の溫厚慈仁の人民の血液は猶ほ永遠に日本人中に循環すべしと言はんとすと是哉此言

十勝原野「アイヌ」の風俗を聞くに、兒分娩せし時、數多の婦女來りて兒の未だ其肌膚を沐浴洗滌せしめざるに先だち、之を嘗むるの習慣あり然れども惟ふに兒體は未だ洗滌せざるも汚穢は拂拭せられて後ち之を嘗むるならん蓋し之を嘗むるは其地方に於ける一儀式の如き者なりと謂ふ

臍帶は臍部より一握手許、隔てたる處に於て、細絲を以て之を結紮し、而る後ち之を木板上に載せ、所謂「マキリ」なる小刀を以て、其部を截斷し、衣片を以て殘留せる臍帶を腹部に緊縛す

初生兒の養育は之を概するに頗る簡にして疎なりと謂ふべし、衣は僅に之を襲ぬ、袒裸を蔽ふに過ぎず、母は之を懷にし或は之を背に入れ、嚴冬と雖ども綿衣を用ゆることなし、某古老云ふ「アイヌ」初生兒の死亡は比較的過

天癸初潮の年齡

多なるが如しと。余も亦た之を信ず、蓋し養育法の宜しからざるを以て榮養不良に陷り、又は感冒の爲めに呼吸器疾患を惹起し爲に倒るゝ者多き者の如し

月經開始年齡　に就き嘗て調査せしことあり、然れども其正鵠を得ざる所以の者は「アイヌ」種族は元來自他の年齡を記憶する者殆と無きに由る。余が有する五十九人の數に據れば、滿十三年より十七年の間に於て開始するを見る。之が正實の調査を得んと欲せば、明治年代に入て生誕せる者に就き、一々郡衙の帳簿を以て、正當の年齡を記述するに非んば能はざるなり、

（十二）「アイヌ」が疾病

一篇の提綱

「アイヌ」種族中特異の疾病あるや否やの疑問は之を耳にすると久し然れども余が經驗を以て之を論ずれば未だ特異の疾病あるを認め得ず亦た特異の證徴を有する者を識り得ず已に特異の疾病と特異の證徴とを認め得ずんば、特に「アイヌ」が疾病を論ずるの要なしと雖とも亦記して以て醫家の參酌に供すべきの事なきに非ず、是れ反復記述せんとするの理由なり

内科諸病

慢性僂麻質斯

内科諸病中「アイヌ」に於て最多數を占有するは慢性僂麻質斯にして筋を侵せる者と關節を侵せる者と殆と相半ばす、而して其發生時期は殊に此土、春秋不定の氣候に於てし、性を以て之を分てば婦人に多き者の如し（別表參酌）蓋し「アイヌ」婦人は耕織に勉め薪水の勞を意とせず濕冷及び肉體の勞苦に接すること男子よりも甚しきの生活に因するならんか、之を要するに春秋氣象天候變遷の關係のみならず住居の不衞生にして彼等の種族が平素雨露に浸染し、濕氣に觸接するを意とせざる等の理由は、尤も

胸部諸筋を侵襲こと多し

ペンラム、アラカ

此疾患に關繫ある者たるを信ずるなり

余は已に十一、二歳の兒にして筋僂麻質斯に罹れる者數名を實驗せり、十五、六歳の者に在ても亦稀なりとなさず之が爲め斜頸を來たせる者三名を目擊せり」筋僂麻質斯中尤も多きは胸部諸筋の者ならん、之を「アイヌ」部落の醫務に從事する某の言に聞くに云く胸部の僂麻質斯性疼痛は諸病中尤も多數の者ならんと、蓋し信なり、

胸部の僂麻質斯性疼痛は「アイヌ」之を「ペンラム、アラカ」Penram-araka と稱す、胸痛の意なり、何が故に此種族に斯の胸痛多きや未だ得て其實を探る能はず、嘗て以爲らく「アイヌ」は胸を露すこと甚しきに因するに非るかと、然れども婦女は「モウル」と稱する襯衣を穿ち、胸を蔽ふこと甚だ密なり、然るに尚ほ之を患ふると、多きを以て見れば、露胸の如何は之に關せざる者の如し、「ペンラム、アラカ」即ち胸痛の語は「アイヌ」數々之を慢性胃加答兒、胸部痞塞、胸部煩悶等の證徴に用ゆるあり、是亦た記臆すべきの一事なり、胸部の僂麻質斯性疼痛は主として胸部の諸筋に顯はるゝも、時に亦た胸骨若く

は胸骨と肋骨軟骨部との縫合に於て顯はるゝとありて、殊に斯縫合は腫脹せる例少なからず、

梅毒

アイヌ種族に於ける梅毒の蔓衍

梅毒は「アイヌ」諸病中非常に多數にして彼の種族に何が故に斯の如く蔓延したるかを疑はずんはあらず、嘗て惟ふに、梅毒は種族に關し其感染の力を異にする者の如し身體の組織一般に抗抵力を喪失し、以て亡滅せんとする如き種族に在ては蔓延太だしきの觀を呈するあり、我「アイヌ」種族或は高麗人種の如きは蓋し是なり、成書に傳ふ、愛斯蘭（アイスランド）人、綠蘭（グリーンランド）人、新芬土蘭（ニューフオンドランド）人、南西亞非利加土蕃、馬達加葛（マダガスカル）黒奴の如きは梅毒に感染すると甚だ稀なりと、風土亦た之に關するあるか知るべからず、

「アイヌ」種族の梅毒中尤も多く顯はるゝは第三期梅毒と扁平疣贅期梅毒の二樣なりとす護模腫は毎常深蝕せる糜爛潰瘍を作り、臭醜酸鼻に耐へざる者あり、頭蓋に非常なる凸凹面を形成し、脛骨に瘢痕潰瘍兩つながら相結錯し、臭、外に漏るゝ者少なしとなさず、其臏部、又は胸鎖結合部に於ける護模腫の如き或は硬口蓋を穿壞する如きは、殆と毎常目擊する所の者

なり、而して其鼻軟骨を侵せる者は甚だ僅少なるに似たり、余は僅に三人の鼻梁缺損若くは鞍鼻を目擊せり、

平疣贅

第二期の發疹中殊に多數なるは扁平疣贅にして、此疣疹は多く肛圍と陰唇に顯はれ疊々相連合して汚穢色の被覆（ベラーク）を有し曳て股腿の內面に及び狀態實に描くべからず、其腋窩に顯はるゝも亦日常に屬す其夫婦相共に同處斯疣贅を有し提携して以て治を乞ひ來る者若くは母子共に肛圍の疣贅を有し悄として醫門を叩くが如きは噴飯に堪へざるなり嘗て「リュルド」が「コンチローマ」期なる名稱を梅毒期中に挿入したるが如きは「アイヌ」に在て應用するの尤も妥當なるを見る

薔薇疹

薔薇疹は彼に在て欠如せず、然れども「アイヌ」種族の皮膚は薔薇疹を表出せしむるに適當ならず、如何となれば皮膚日頽して銅色なる者多く、又毛髮鬚髯焉鬱々焉として皮膚を蔽ひ疹色をして特出せしめざればなり、然れども少年にして皮膚蒼白の者に在ては之を目擊することを得べし、

蓬蘖疹

蓬蘖疹、汚疱疹、（蠣殼疹）は本邦內地に在ては稀に見ると稱し僅に之を見れ

ば欣然報告するに誇るの徒あり、然れども「アイヌ」種族に在ては稀有の者に非ず往々にして斯膿痂性の皮膚梅毒を見る、某外國醫は云く北海道に在ては凡般の梅毒皮膚疹を研究し得べしと、余は將に「アイヌ」種族に於て然るを特記せんとす、

梅毒が眼を侵したるは太だ多からざるに似たり、余は嘗て二個の盲目「アイヌ」を診せり、二者共に第三期梅毒に罹り脛骨護模腫及臗部深蝕性、皮膚護模腫を有せり而して余が考ふる所は彼の無視力は護模性の網膜炎及葦膜炎よりせる者なりと云ふに在り、且つ二者共に七八年を經過したる梅毒性患者なりき、先天性梅毒が角膜實質炎を將來し永く薄翳を遺殘せる者は少なしとなさず、

「アイヌ」小兒には先天性梅毒多し乃ち生后兩三月間に於て營養不良、發育不全を以て固有の梅毒性證狀を呈し概ね皆な倒るゝを例とす、惟ふに流産の多數なる亦た梅毒性の父母多きに因するならん、種族滅亡の原因上大に與て力ありと云ふべし、

梅毒性の眼病

先天性梅毒

梅毒蔓延上、邦人ハ罪を獘けり

元來梅毒は彼の所有に非ずして或は邦人と交通してより以來の疾病なるか、未だ之を審かにするを得ずと雖ども、其蔓延上に關して邦人は罪を懷けると論を俟たず、嘗てより內地の漁夫が年々出入し病根を種殖し、往年會所又は番屋等と稱する所謂勤番、支配人、番人が腕力を以て「メノコ」を奪掠行淫し

臀具留（ドングル）は長萬部（オツマンベ）の酋長なり、其心正直偏頗なし、厚く衆夷を撫す、其言に曰く、吾之を愛護せざれば土人何を以て生を聊せんと、常に番人等夷婦を强奪し夷女を妾とするを以て壯年未だ娶らず生育多からず戶口年に減ずるを歎じ、支配人に謂て曰く、夷女を以て夷人に妻はすは固より其所なり、豈に和人强て奪ふとを得んや、支配人其言に服し、番人を戒め夷婦夷女を奪ふなからしむ、場內遂に此弊を絕つ者は臀具留の力なり、他の酋長一身に私して、支配人、番人の意を承け、衆夷を苦しむ者あるは何ぞや、（北海道誌卷十五、人物篇中）

聾を後人に遺せしや測知すべからず

「アイヌ」が疾病

脚氣　之を「アイヌ」に質すに云く、脚氣は元來其種族になしと、乃ち問ふ「アイヌ」種族性素迂なり、脚氣と稱する名稱なかりしも、今日謂ふ脚氣の證狀は或は知らざるに非るなきかと「アイヌ」答ふ、脚氣と梅毒は「シシヤモ」の賜資なり、故に「アイヌ」に祖先以來脚氣の名なし、近來其俗脚氣と謂はずして「アツブ、タシユム（浮腫病 Huy-tashum）又「ケマ、フツプ」（足腫 Kema-hup）と稱すと某氏の言に云く千島諸島の「アイヌ」は往時より其俗間に脚氣あるを知れりと、

聞く「アイヌ」が始て脚氣を患ふるに至りしは、僅に二十數年來なるを而して之に罹る者は、工事、測量、採掘等に傭使せらるゝもの尤も多きを見るなり、其證狀は概して輕症の者にして始め消化不良、胃部壓痛、嘔氣、便秘等を訴へ、次て下肢の浮腫、腓腸筋攣痛、心悸亢進を顯はし來る等に過きず、是等の者は單純の下劑に由り二週間以内にて全治する者の如し、重症者殊に水腫性、惡性、衝心性の者は甚稀有にして余は十七名の患者中僅かに三人の衝心性の者を目擊したれども他は皆な好轉歸を取れり、

北見、網走、擇捉、國後、楠古丹、に在る我國の漁夫は概して所謂水腫病に罹り殊に嚴冬を越ゆる者は危險なりと稱す、然るに之と同時に就業する「アイヌ」人夫には之に罹る者殆と稀なり」千島に於ける「アイヌ」は若し之に罹る時は「ハシポ」前出を煎用して危險を免るゝを解し又徒らに河水泉水を取て渦を凌がず頗る攝生に注意を致す者の如し某者曰く所謂水腫病は脚氣に非らずと、余は之を實驗するに到底此非脚氣論に服すること能はず何が故に「アイヌ」には比較的脚氣稀なるや、恐くは彼が主として肉食を重んずる所以に由るに非るか、未だ之を詳にすることを得ずと雖ども、「アイヌ」は現今脚氣に向て抵抗力を有するの人種たるは疑を容れざる所なり」

「アイヌ」は脚氣に向て抵抗力を有す

肺結核

肺結核　余が實驗せる同患者は未だ多數に上らずと雖ども、有珠、沙流に在る友人の調査に據るに「アイヌ」が呼吸器病に罹る半數は肺結核なり、而して概ね死亡すと謂ふ、今茲沙流に數ヶ月滯宿せる者の言に徴するに曰く近來肺結核は益勢力を逞ふし倒るゝ者擧て數ふべからずと人種滅亡上頗る憂ふべき者あり亦憐むべしと謂ふべし

肺結核と人種滅亡

「アイヌ」が疾病

「アイヌ」は能く肺結核の恐るべきを知り又其遺傳すべき者なるを解せり一朝之に罹れば殆ど死を決し、全く藥用を廢絶し、閑に山野に逍遙し死を俟つ者の如し彼は實に此点に就き勇あるを見るなり斯病「アイヌ」語「サットペ、コロ」の名あり「サット」乾く「ペ」液又水、即ち體液乾涸消耗(癆瘵の意も亦た然らん)の義にして「コロ」は有の意なり、又單に「サットペ」又「サットペ、タシユム」と稱し又「ウサン、チュケ」即ち惡咳と謂ふ皆な肺癆を指定するの名義にして其意義ハ明瞭なるに感せずんばあらず

「アイヌ」は血を怖るゝこと太だし故に喀血すれば憂懼自ら措く能はず、直に醫門を敲き其「サットペ」に非るなきやを質問す余は其狀殆ど狂に近き者を實驗せしこと三四回あり「アイヌ」は性本頑にして鈍なりと雖ども亦た小心愛すべきの点あり

慢性胃加答兒

慢性胃加答兒の彼の種族に多き驚くべき者あり、彼が「サンペ、アラカ」と稱して訴ふる所、ホニ、アラカと稱して治を乞ふ者を視るに皆な之れ急性若くは慢性胃加答兒に非るはなし、而して之を實驗に徵するに諸病の十

五%に上る、惟ふに彼が粗食、不定時の食膳、不規則の生活は主要なる原因なるべし(次條に細論せり)

斯の如き多數の慢性胃加答兒患者のあるにも關せず、胃潰瘍、又は胃癌の如きは稀なるに似たり、余は彼に於て一人の胃癌患者を目擊したるとあるのみ

酒の爲メ來る疾病

彼の性、酒を愛し酒に溺れ易し、即ち爲に地を喪ひ產を破りし者少なからずと雖ども未だ爲に甚しく其身體を傷りし者を目擊せざるなり、是れ彼が生活一に貧にして酒錢獲難きの幸福に因する者ならん、余は彼に慢性酒精中毒を目擊したると前後僅かに一回のみ、而して之に因する血管系統の疾患、神經系統の疾患等は未だ之を經驗せず近來「アイヌ」の矯風と稱し其飮酒上に嗷々を極むるありと雖ども、寧ろ之を梅毒蔓延上に致すの是なるに若かざるなり、如何となれば彼は到底今日の境遇に於ては酒に溺るゝ能はずして唯々酒を穫んとするに狂するに過ぎざればなり

流行性感冒

「アイヌ」が疾病

は近年此種族を襲ひ、頗る猖獗を極めたり、其證狀は他と異

なるとなし「アイヌ」は單に熱性病なりと思考し恐怖すると太し而して「イユニンバ」Iyunin-baの語あり是れ流行性感冒を指斥する者の如し

間歇熱

間歇熱　は「アイヌ」部落の間非常に傳播し之を患ひざる者殆と稀なりと稱す殊に沙流河沿岸にある十數の部落及び河口にある沙瑠太の如きは皆な間歇熱の流行を極む余が診せし者には毎常脾の腫大を認めたり小兒に於ける間歇熱は榮養をして非常に墮落せしむると甚だし「アイヌ」は間歇熱に就き深意ある語を有せり間歇熱を「トヲピシキ」Topishikiと云ふ「トヲ」日「ピシク」『等する』の義にして日を隔て發作するの謂なり而して發作を「イコサン」Ikosanと云ふ「アイヌ」以爲く疾病の顯象は脊柱より起りて惡寒全身に及ぶと「イク」脊椎「ヲ」助字「サン」下るの字より成る戰慄を「ウル、ウルツク」uru-urukと云ひ齒牙相敲くを「ワウ、ワウセ」wau-wause 又「ノタタ、ワウセ」notata wauseと云ふ彼の語亦能く狀を描く者と謂ふべし

余は是れよりして外科に關する一二の事實を述べんとす

創傷

創傷　殊に切創、挫傷の癒着痊治すると邦人より迅速なりとは能く之を

「アイヌ」の創傷治癒日數比較的ニ遲し

肉芽紅活ならざること多し

耳にするの言なり然れども余は之を首領すると能はず之を數多の實驗に徵するに「アイヌ」は榮養不良なる者多く創傷の治癒すること或は遲きに非る無きかを信ずるなり嘗て偶ま同一樣の挫傷を負ひたる邦人と「アイヌ」とに遭遇せり年齡は共に三十才前後にして共に鐵道工事に從事したりしが同日同時過て右前膊を挫傷し軟部の損傷兩つながら殆同一の性質を有せり而して兩者一般の榮養を視察すれば邦人寧ろ劣れる者あり然れども治療方法同一にして「アイヌ」痊癒日數後るゝこと十有四日なりき是素より一例にして以て全部に推理するに非ずと雖ども他の多數の實例は盡く「アイヌ」が創傷痊癒日時の比較的迅速ならんと云ふ者の言を否決する者なり

肉芽面の發生も亦た活ならざると多し縫合部は嚴密なる消毒あるにも關せず往々化膿するとあり是れ一は身體の不潔に因ると雖ども亦た榮養一般の良不良に關係するは論を俟たず其上流と下流との種族に差なく榮養の佳良なる者あるは稀なり

手術を受けて萬患一掃空し

「アイヌ」は手術を受け、術後、意爽なれば躍起、業に從ふの癖あり、其安靜にすべきを慰諭するも彼は之を了解せざるなり、以爲らく手術を受くれば萬患一掃空しく、惡魔遠く去て復た來らずと、嘗て此例に遭遇すると、十數回なり、余は之が一例を揭げて之を證せんとす

前年一癩夫あり、頸腺癌腫に罹る、余之を摘出す而して其際外頸靜脈を結紮せり、施術後二日彼禁戒を破り外出して歸らず、之を他人に問ふに其友儕大熊を獲、之を屠り大宴を張るに際し彼其聘に應じて去りたるなりと余窃に之を怒る、二日を經て彼の病院に歸來せるを見るに、出血繃帶を染めて淋漓たり、乃ち之を換へ創傷を檢すれば、傷處些の出血なし、爾來余は其外出を嚴禁せしかども遂に聽かず、彼再び外出し酒を被り醉歩蹣跚として歸り熟睡、大鼾雷の如し、余等之を醒起せしめ說諭すると娓々數百言、越へて三日彼復外出大醉す其夕、靜脈結紮部破潰し、忽然出血太だしくして倒る、嗚呼頑にして暗なる斯奴の如き憐むに堪へたりと云ふべし

創傷傳染病に關しては、目擊せしと稀なり、唯々數回頭部濕疹に因する顏面丹毒に遭遇せり、然れども破傷風、膿毒症、敗血症等は未だ之を目擊せず、而して急性蔓衍性結締織炎の人咬傷に因する者、其他小爬創よりせる者は往々見る所の者なり、

皮膚病は「アイヌ」種族に多し皮膚病を研究せんと欲する者には、尤も好便宜ならんと云ふ者あり、然れども余が經驗は全く之と反するの結果を有せり、恩師「ドクトル」「ベルツ」氏曰く日本人は實に欽羨すべき皮膚堅強の度を有す、蓋し皮膚の堅強 Abhaertung とは皮膚寒温の度に抵抗する能はず、爲に疾患を將來する者をして漸々之に慣從し、皮膚は遂に一の甲鐵の如く、堅且つ牢固、敢て他の侵す所とならざる者を謂ふと、余は亦之を「アイヌ」種族に言はんとす、此種族の皮膚は概して健固なると無雙にして、寒に温に耐ゆると甚だし、殊に雪中に徒跣し毫も之を意とせず、衣必ずしも裘ならず綿袍必ずしも襲ぬざるが如きは、全く慣從の以て皮膚を堅牢ならしめたるの理由なりと謂つべし

「アイヌ」の皮膚病多般多様ふらず

濕疹

禿髪、

原因二樣

是故を以て皮膚病は「アイヌ」種族に在ては世人の考量する如く多般ならず曰く濕疹、曰く乾癬、曰く痒疹、曰く苦癬、曰く糠粃疹、曰く禿髪症等の如き者の他殆ど見るを稀なり、

濕疹は皮膚病中尤も多く見る所なり、殊に吾人の診する所は、其膿疱期及結痂期相混合するの期を多しとなす、之が年齢を論せば幼年の兒女に多く、之が局部を論ぜは顔面頭部に多く陰部之に次ぐ、而して其何が故に此部に多く、此年齢に多きや之を知るに由なし、然ども彼の居住の不衞生なると瀕年、腺病質兒女多き等は恐らくは之が主因ならん

禿髪症　東海岸の「アイヌ」種族に禿髪症多きを傳ふる者あり、之を驗するに果して爾り、幼年の兒女にして已に禿髪の者あり壯年にして脫髪せる者、素より少なしとせず、而して男女の性に於ては殆と區別なし、「アイヌ」語に之を「ヲトツプサック」Otop'sak（無髪の意）と云ふ、蓋し詳に之を調査するに原因に於て二樣ある者の如し、一は寄生性禿髪症にして其寄生性なるを鏡檢し得べし、一は全く幼年の頭部濕疹に因する者にして榮養を荒蕪

「アイヌ」魚油を嗜む

疥癬

「アイヌ」疥癬を二種ニ區分す

象皮病

したる瘢痕組織に由り之を證明し得べし、

「アイヌ」は魚油を嗜み飲むと吾人の意想外に在り殊に海岸の「アイヌ」に於て尤も甚だしきを以て某者云ふ、禿髪症の原因一に之に在りと、固より信ずるに足らず

疥癬　衣服、家屋及髪膚の不潔なる、實に疥癬の多きを見るなり、而して彼は殆ど之を意に介せざる者の如し、爰に奇とすべきは彼は疥癬を二種類に分ち各々名を命ぜり一を「マイヤイゲ、タシユムム」と稱し、概して膿疱を作る者を云ひ、一を「ムンチロ、マイヤイゲ、タシユムム」と云ひ「ムンチロ」は粟粒の義にして小發疹、小結節を作る者を云ふ邦人は嘗て此等の分類を爲したるとありや、

象皮病　は蓋し熱帶及熱帶近傍に數々目擊する所の者たり寒熱何れの地に於ても固より見るべき者なるも北海道の如き寒地に此病痾を見るは太だ稀有に屬す爰に一例を擧げんとす

「アイヌ」婦人に於ける陰部象皮病　日高國新冠郡高江村農笹川保京（「ア

イヌ」原名「ホケツプ」)の女阿半(「アイヌ」原名「コムヤツノ」)年紀三十六才素「アイヌ」純粹の血族に生る、年甫て十三、天癸潮し十九にして婿を獲、廿一にして女兒を產し、廿三にして所天を喪ふ、年廿又九、初冬、野に出で、芻秣を刈る、家に歸て惡寒頻に到り、左大陰唇看〻疼痛を發し、爾來局部澎大し皮膚頗る肥硬となり以て現今に至る

現證の大略　左大陰唇不潔黯褐色に肥大し上溝端より尖端迄十四仙迷を算し左股內側に垂下し周圍廿五仙迷に及ぶ右大陰唇、陰挺、小陰唇も亦多少肥厚し內股側及膝膕に波及す、

他の部分には異狀なく消化、呼吸、神經系統に於て異常を認むるなし

明治廿九年九月十日左大陰唇を摘截し創部を縫合し十日にして第一期癒合す

余は此一例を以て「アイヌ」種族にも亦た斯の熱帶病あるとを記せんと欲するのみ、余は此等疾病を以て「アイヌ」古老に質するに曰く古來より未だ此等の疾病を見ず強て之に名けんか、應さに「ラチカム」Rachi-kam (垂下せる肉)と謂ふなるべしと。

眼科諸病

「トラホーム」多し

眼科諸病　中一般に傳播したるは顆粒性結膜炎(トラホーム)なりとす、醫人が每常遭遇するは其慢性なる者と、其結果として來る角膜實質炎、角膜翳、角膜潰瘍睫毛亂生、瞼緣炎、內外翻、淚管狹窄等なり蓋し「アイヌ」生活が衞生上不潔なると三冬間は爐上榾柮炭烟中に生活する等とに由り勢猖獗を極め蔓延甚だしき者の如し

婦人科諸病

婦人科諸病　に於ては特記すべき者なし、唯「アイヌ」婦人は其肌膚を露はし、又之を人に示すを欲せざるの習癖ありて診察非常に困難なるとあり乃ち唯單に病狀を具し、脉を診せしめて去らんと欲する者あり彼の襯衣なる者は固く胸部を包裹し腹肚を隱蔽し殆ど診定し難き者往々にして在り、嘗て肺結核に罹れる一婦人あり、全胸を露さんとを求むるも應ずるの色なし、叱咤一番彼猶肯せず、默然たると半晌、終に云く「ニシパ」請ふ人無きの所に於てせんと

言辭掬すべし

內診の困難

余は內診せし者、今日に於て五十有數名あり、而して此目的を達せんには

「アイヌ」が疾病

多少の困難あり、然れども彼を欺くは吾事に非ず、宥慰諭百方終に彼をして已むなからしむるの一法あるのみ、

「モウル」の裡一大秘密を藏せり

「アイヌ」婦女の襯衣は、之を「モウル」Mouru と稱す其風習に婦女子は襯衣を脫却するとを許さず余嘗て一婦人に强て之を脫却せんとを請ふ、余が意切にして奪ふべからざるとを知り、遂に之を脫し全胸肚を露出せり而るに何ぞ料らん「モウル」の裡一大秘密を藏せんとは、

下體豐然たるの處、纏絡六匝せる紐縲あり、黒色木綿より組成せしなるべし、而して兩端は纔々たる毗阜の處に結締し、長さ五六寸許の三角形木綿片を垂下し、全陰部を被覆せり、紐縲は之を深帶（「ラウン、クット」Raunkut,-kuchi）と稱し三角形布帛は之を「イシマ」Ishma と稱し、我邦の褌衣の如き者なり、之を聞くに「アイヌ」間は之を秘密にすると甚しく他邦人には永劫誓て之を言はずと、蓋し女兒破瓜の時其母親か之を其少女の下腹に纏ひ、之に告げて云ふ、此紐縲、是汝一生の貞潔を表す、之を汝の夫に示すよりは、他に示す勿れと、若し一婦他の爲に姦淫せらるゝ時此

紐縲を纏ふなくんば姦夫法に觸れず、又死して此紐縲を纏はずんば地下に雙親に面すると能はさる者となせり、

臟躁

診療上より得たる閑話

臟躁　余は數回斯蠻俗に臟躁あるを目撃せり、嘗て一婦女子に於て、痙攣發作、發作性頭痛、卵巢痛、痙咳發作、臟躁球を具有する者を治療せり、主として精神誘導法を以て治癒する者の如し、其他自己の病患を憂ふると太だしく些細の整痕も猶痛心し、時に異常の嗜好情欲を發し、一般の痙攣を頻發したる者あり、亦一寡婦に於て數年永續せる鬱憂と心窩苦悶、臟躁性發疹（蕁麻疹）鼓脹、胃病等を有する者を實驗せり、爰に知らんと欲するの點は他の蠻俗と雖ども此臟躁症を有するや否やの一なり事某氏云く「アイヌ」にも亦臟躁の症あるか夫れ滅ぶるに近からんかと蓋し味ふべきの言なり「アイヌ」診療上に得たる二三の經驗「アイヌ」は通例身を愛すると甚し、故に一小恙と雖ども之を醫に質するの性癖あり而して醫の命令を守ると謹嚴なり、唯彼は性迂而愚頑而冥なる者多く、終に身を誤りて不起癡痼の人となる者少なからず、且つ又素と忍耐を缺くを以て長く服藥して治に

「アイヌ」が疾病

到るを俟つ能はず、五日十日にして病少く治せずんば已に薬用を廃す、醫之を叱すれば彼再び命に從ふ、然れども次の五日に於て必ず薬用を廃すると舊日の如し

小切開、小手術と雖ども聲を放て叫喚羞ぢざる者あり、又更に意に介せざる者あり嘗て一「アイヌ」の口唇に巨大なる纖維腫を發生したる者ありき余は試に瞑藥を須ひずして之を摘截したれども終始彼は一言の痛感を現はさず面色自若殆と之を知らざる者の如し、余問ふ疼痛如何と彼答ふ此等の疼痛を言はゞ何ぞ巨熊と闘ふを得んと、然れども亦た痛楚を忍ぶ能はざるの徒なきに非ず、叫喚悲鳴を發し其言宛として邦人の漁夫が操舟の際唱ふる歌調の如く爾り「アイヌ」語に之を「ケイチ」Keichi と云ふ苦悶去り、痛楚散ず、以爲く病患亦一掃し去ると、而して猶病症の經過し畢らず、病源の猶ほ盤桓して他日再燃、土を巻て來るを解せざるあり是蓋し「アイヌ」種族の本色たる所以なるか

人皆「アイヌ」には同量の藥品を以て過量の効を奏し得るならんと信ぜり然れども之を驗するに事全く誤れり唯下劑のみ或は比較的少量にして効を奏するに非るなきかを知れるのみ、其他の藥劑に至ては更に差異なき者の如し

一種族衞生上の觀察ハ多年の經歷を要す

（十三）「アイヌ」が衞生上の生活等

一人種の衞生上の觀察は之を多年に經歷するに非ずんば能はざる所なり、殊に我「アイヌ」に於ては應さに夫れ然るべし、嘗て外人が旅行して此民俗の觀察を記したる者許多なるを知る、又邦人の嘗てより同く探檢記述したる者少なからざるを見るなり、然れども余は其觀察の記中皮相の見多きを占め、實際に適切ならざるの甚しきを發見せり、蓋し一種族の生活は一朝一夕の見聞に由て知認するを得べからざるなり、輓近西人が「アイヌ」種族と題する大冊の著述を讀むに一章中正鵠を得たる者殆んと亡し而して彼等の間に甚た珍重せらるゝを怪まずんばあらず

今余は少許の經驗を以て敢て先輩を排するに非すと雖ども、自ら觀察上是なりと信ずるの點を記し後人の參考を俟たんとす、

（イ）「アイヌ」は多毛なる種族なるべし

「ダルウイン」が進化論第三卷第十九章中

日本の最北邊なる島嶼に住居する「アイヌ」は世界中最も毛髮に富める

種族なり

と記載せり蓋し我「アイヌ」が多毛なるは能く先輩の記述する所にして且つ實際なり、然れども其種族中往々邦人の如く多毛ならざるあり殊に「アイヌ」種族と邦人との間に生じたる雜種には凡て毛髮の富有ならざる太だ邦人に近きが如きを見る

若し多毛を以て「アイヌ」種族の形容となさば歐州人も亦少しく多毛の種族ならざるなきを得ざるべし蓋し毛髮の發生は同種族に於て亦一樣ならず嘗て「ダルウイン」は髭鬚の發育と身體毛髮の發生は種々なる人種、種々なる種族亦同人種族中種々なる家族に於て奇怪にも種々なる差異あり、吾儕歐州人は已に之を吾輩の間に於て目擊する所なりと云へり事「アイヌ」種族に於て亦其然るを知る

頃者余は一個の「アイヌ」漢に遭遇し偶々彼が多毛なるに着目し其體を裸にして之を檢せり而して問ふ汝の如く多毛なる者なからんと彼れ答ふ儂の如きは未だ多毛ならざるなりと余は之を檢するに前額顏部手掌足

先人未發の一事

蹠を除くの外は毛蔽はざるなく髮垂れて肩を蔽ひ髯長くして胸部に達し頤よりして長きは三十四仙迷短きは十六仙迷に及び胸肩腹背盡く五六仙迷の長毛を密生し上下肢毛は三乃至五仙迷長に達せり陰毛腋毛は特記すべき長さを有せず此多毛者姓は葦屋(アシア)名は「クノガンリキ」年紀三十一歳「千歳」に生る獵を業とす是れ唯一例のみ猶ほ該種族中に入りて檢査せば更に多毛の好例あらん

其他多毛者を檢するに概して脛部、腿股、前膊、肩、胸、下腹に於て多毛なる者の如し甚しきに到ては全く肌膚を蔽ふて餘地なき者あり

嘗て偶然一「アイヌ」に於て前膊及脛部に二個乃至三個四個の毛管殆んと同一の處に密接して簇生するを目擊したり爾來之を多毛者に檢するに皆然らざるはなし是れ「アイヌ」の皮膚に一見多毛の觀を與ふる所以にして、縱令邦人又は他の人種に於て多毛なる者あるも恐らくは此觀なからん、

北海道志卷十五風俗篇人物中に

長鬈(チャウケン)は北部湧別の酋長なり鬚髯甚美なり衆夷尊信すると神の如し延享中松前の士因藤孝芳宗谷に到る長鬈來り見ゆ鬚髯皓白髯垂れて腹を過く錦囊を其中に、懸く孝芳通事をして之を檢せしむるに其長き者二丈觀る者驚嘆し夷中第一の美髯となす長鬚長六尺計年既に七十

彝古登(イコトイ)以は厚岸の酋長なり容貌奇異鼻上毛あり英氣衆に超ゆ好て矛を横へ善く石を投ず

夕張の山中達甲に古敦蘭(コトムラム)と云ふ者あり威容ありて黄髯胸を過く博く故事を記す

加肉志蘭計威容あり頭髮雪の如く紫髯腹を過ぐ

等の記載あり抄記して參考に供す

而して「アイヌ」は其多毛を以て形容の美となす者に似たり殊に髭髯の如きは男子の欠くへからざる者となし相遇ひ相敬し相謝するに髯を撫するを以て禮となす

彼の種族の多毛なるは獨り男子に於てせるのみならず婦人に於て亦た

陰毛の森直

「アイヌ」の狗臭

甚だ珍異ならざるなり胸部下腹部又は股部の毛の如き敢て男子に讓ざるものあり且つ其陰毛の如きは森蠶耻阜より陰溝に向て叢射し穆々として全く陰を蔽ふ者少なからざるなり余は數回已に之を未婚の處女に於てすら証明し且つ陰毛は多少の鬈縮を常となすに當て「アイヌ」婦人に在ては何にか故に其森蠶なるやを疑へり（邦人にも時に之を目するとあり）

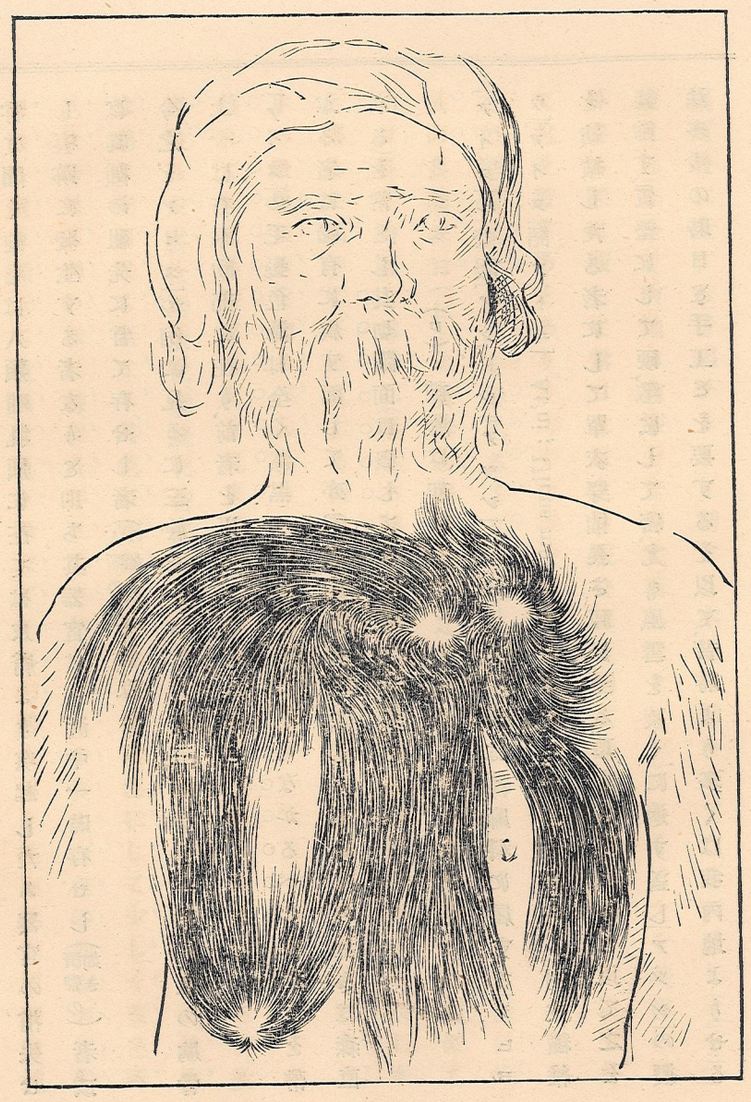
余は「アイヌ」に狗臭ありとなせり而して男子に於て尤も甚だし蓋し不潔にして浴することなく皮膚汚穢を浸淫し毛髮塵泥を粘附し其鬚髯たる處其蓬爾たる處、垢を宿し虱を生じ人をして一見寒心せしむる者あり嘗て一老「アイヌ」あり其鬚垂れて胸に達す而して其鬚毛を一見するに班爛半白の毛の如し誰れか知らん是虱卵が全鬚に累々相附したる者なるを」余は又「アイヌ」婦人の全く邦俗に化し邦衣を着け邦俗に從ひ毎日洗浴し毎に襯衣を換ふる習慣を得たる者を識れり而して此等の者は決して「アイヌ」固有の狗臭なし故に「アイヌ」狗臭なる者は其不潔にして皮膚を洗ふ

多毛ハ「アイヌ」の特質

魯西亞の犬人

鼻梁鼻尖亦毛あり

ことなく衣を換ふると稀なるに職として是れ由る者なり、「アイヌ」種族の多毛なるは蓋し其種族の特質なるべし人は嘗て其風土其營養に關すべきを論せり然れども種族の特色たるは免れざる所なるべし余は嘗て「モスカウ」府大學教授「マンスロフ」（H. Manssurow, kl. Sammlg f. Dermatologie et Syphilidologie; Moskaw; 1887; II. Liefrg.）が記する所の魯西亞犬人の一文を讀めり曰く名は「アドリアン、シユフチチーフ」Adrian Jewtichew なる者は家族不和の關係より放逐せられ一森林中一巨木の下に穴居し十年の星霜を送り遂に顏面には鼻梁と窠窩を除くの外は細毛を密生せり同時八歳なるフェドール」Fedor と稱する童子は同じく毛を全身に發生し巴黎に生活せりと而して兩者共に犬人の名を以て有名なる「ヘブラ」氏畫鑑に其影像を永久にせり蓋し甲者は十年穴居の結果により多毛となれるなり其多毛となれる一に住居に關係せる者の如し余は「アイヌ」多毛家に於て鼻尖鼻梁耳朶に於て三四分長の細毛を發生せる數例を目撃せり其鬚に例せる多毛者「アンドリアン」に於て發せさりし部に發生せる



「アイヌが衞生上の生活等」　百四十七

は亦た奇なりと云ふべし而して又「アイヌ」種族に於て兩眉毛の眉間に於て互に相聯絡せるは稀有に非るなり

之を要するに「アイヌ」の多毛なるは其所謂假性多毛 Pseudohypertrichosis なる者にして生毛（ウアゲ）脫落せずして益々生長し其生長を逞うする者を謂ふ是れ已に「アイヌ」小兒に於て明に見得べき者にして其三四歲に及んで皮膚纖毛の黑色なるを叢生し宛かも大人に於ける者と一樣なるは奇なる現象と謂ふべし「エッケル」A. Ecker の言に徵すれば之を生毛（ウアゲ）假性多毛 Pseudo-hypertrichosis lanuginosa（Bonnet）と稱するを以て「アイヌ」種族の多毛は眞性多毛即ち熟毛（生へ變りたる毛を名つく）の多毛に非ずして生毛假性多毛と謂ふべきなり（眞性多毛 Hypertrichosis vera と稱す）

人体には毛の生するに當り一定の方向を有すべきなり然るに「アイヌ」種族に於ては往々其違例あるを見る今其一例を記すと同時に所謂る旋毛（Haurwirbel）の特異なるを示さんとす

生毛假性多毛

旋毛

嘗て聞く旋毛は人類哺乳類に在ては皮膚より突起したる器官の消失せし痕跡に發生する者なりと即ち其器官は生涯中一時存せし（臍帶の如き）者或は其種の祖先に嘗て存せし者（人類の尾の如き）等なり

今之を「アイヌ」が例に見るに三旋毛中一は左第三肋骨上、一は同位の胸骨上、一は右季肋部に在り、前者を以て說明し難しとなす

「アイヌ」の毛髮色澤は全く漆黑なりといふて不可なかるべし紅褐色を帶ぶる者は稀有に屬す而して亦卷縮する者少なし殊に頭髮の如きは森直なるを常とし其切斷面は概して扁圓なる者多し

（ロ）被服は如何

「アイヌ」の被服「アッドシ」「アッシ」At'tush なる者は蕁麻科に屬する「ヲヒヨウ」「アイヌ」語「アドニ」At'ui; Ulnus montana Sm. var. laciniata, Trauto. の樹皮纖維を紡績したる者にして單衣穿袖長さ脛に至る、草花樣の刺繡を以て之を裝飾す、質堅にして硬、緻にして密、尤も風雪を凌ぐに適す蓋し「アッシ」の製法多少の時日と手工とを要するを以て、昔時より多くは我內地よりせる

奥州邊に產する「青綿サクリ」と稱する木綿を購ひ來て之を刺繡し（Chimip）或は如今全く內地の衣服を着用す而して「アッシ」は多くは之を禮節の日外出の際に服して常日には之を服せず夏期其暑氣を透さゝるを以て却て之を着くるとあり、

彼の襯衣は晝夜之を換ふるとなし故に垢汚染浸して永く脫せず殊に婦人の長襯衣は（Mouru 袋形の衣にして之を頭より被りて着く胸は紐にて結ぶ）多く胸腹を封鎖し（黑色木綿にて多く之を作る）皮膚露呈するなし水を濟るに揭げす、子に乳する掩ふに布を以てす、以て彼に在ては肌膚を見すの恥辱なるを知るべし

然れども男兒は其皮膚を見すに於て、未だ必ずしも恥辱なりとなさず、故に彼の皮膚は冷水に、寒風に曾能く慣從して皮膚が外界に對する抵抗力は頗る强固なる者なり、其色は黯褐若しくは淡褐色にして少しく黃色灰色を帶ぶる者の如し、殊に女子に於て然りとなす、農夫、漁樵の如き者に於ては全然日頽して黯褐紅色を帶ぶると多し然れども往々にして灰白、純

白なる殆んど邦人の白皙なる者と同一樣の者あり之を要するに純粹なる「アイヌ」に在ては淡褐色を以て其本色となすべし而して其光澤は常に邦人よりも著しきが如き觀ありて一見其健全強固なるを知るべし

因にいふ「アイヌ」の虹彩膜色は概して黑褐且つ淡黑色なる者多し、然れども時に亦た淡茶褐なる者又少しく淡碧色なる者あるを見ることあり

彼征役して途上に在るや、草中に樹下に到る處僵臥し鬚髮沾濕するも憂ふる所なく雨中、衣服濕透すと雖も自若として意に介せず、蓋し「アッシ」は一時雨露に耐ゆ濕潤し難きも長久の濕潤に堪ゆる能ざるが如し

冬期には「アッシ」の背に熊、鹿、狼、狐等の毛皮を縫附する者ありて寒を防ぐに於ては無雙なりと稱す、而して靴の如きは鹿皮 Yukkeri（ユッケリ）鮭皮 Chepkeri（チェップケリ）より作り、氷雪に穿つも侵されず、足趾また冷却すると稀なりといふ、

又風雪を凌ぐ爲め、我邦俗の如く草を編して蓑となし之を「ケラ」と稱す、我邦の雨具に等し、其他股引なる者ありて通常下腹より上腿に至る、又必ず脚絆ありて「ホシ」と名づく、即ち彼の衣服の衞生に關しては、其民俗は自ら

其氣候風土に適して各々守る所あるを見るべし

然れども「アイヌ」に欠く所は、其衣服殊に褻衣（ハダキ）汗襦の洗濯と其衣服の沾濕するを厭はざる是なり、

（ハ）飲食物に就き

「アイヌ」は朝に起き口を嗽き面を拭ふの習慣を有せず況や時に沐浴梳髮するれや或は河水、海水に臨み身体を拂拭するとあるも多期に在ては殆んど此事なし今や邦人に接し朝起盥嗽梳髮の風を學ぶに至りしは悦ふべき事となす、

「アイヌ」は多間吾人の如く一日三回の食事をなすも夏日は二回の食事をなす而して其食品に至ては太だ憐むべき者あり豆、菽豆、大根、午蒡の類を通常とし稗、粟、蜀黍を常食とす而して米食する者は稀なり魚類は鮭、鱒を普通とす彼は寧ろ煮て食ふよりも生食するの人類なり又煮て食ふも調理鹽梅を知らず夏期の如きは早朝粟飯を喫すると七八杯、野菜を生食し飽食極まつて出つ、落陽馬背に騎して歸り、又暴食すると朝の如く、終に横

臥大尉を擧く」飲食の順序は先づ魚類を喫了して後ち粟を食ふ冬期殆んど業なし、故に唯夏期の貯蓄を以て生活し其他は爐畔に於て睡を貪るのみ

今や漁場よ權利ふし

昔時に在ては魚類の肉を常食となせしとは明かなり然れども今や漁場に權利なく明治九年以來鹿獵は制禁せられ其他の獸獵も年期に制限を設けられ未だ習慣せざる農耕に從ひ收獲する所の穀菜邦人の如く多額なる能はず食膳の衞生彼に於て非常の變動と墮落を致したる知るべきなり

食膳の程度非常よ變動せり

旅行には單純に乾燥せる鮭（爐火上燻製しる者）を負ひ之を摘截して飢を療するを常とし亦た之に甘ずるが如し

彼の食料中重んずる者は今日熊肉、鯨肉、雁、鳥の類なり然れども是れ同じく昔日の如く富贍なると能はず今や彼の食膳は邦人の下等食品と彼が在來の食品とを混ぜる者なり而して其調理に到ては嘗て淡水又は海水にて煮食せしも今は味噌、醬油を用ゆる者多きを加ふるに到れり、

野菜にして食料に充つる者極めて多し余は嘗て彼か蕗を食ふを目せり彼は大葉長莖の者八九尺の蕗を取り直に火爐に炙して食ひ以て甘しとなせり、「パナウド」（「アイヌ」語 ピットッック）の如き、味臭惡にも關せず、好んで生食となす者の如し、

芝實（「アイヌ」語「ペカンペ」、米の代に食ふ）乾晒して食料となす者あり其澱粉に富むを以てなり粟（「アイヌ」語「ヤム」）の如きは之を粉碎し鮭卵又は鯇魚卵と混和して煮食し或は之を獸脂と混し、食料となす者あり、

冬間の貯蓄として蕨（「アイヌ」語「ドュワ」）あり、之を采して直ちに淡水にて煮、之を乾晒して他日之を煮食す、芨の葉を乾燥し沙參（「アイヌ」語「ムクカシ」）の嫩芽を瀹し、乾燥し胡葱（「アイヌ」語「シクドル」）の根葉を細剉し臼搗し餅となし皆以て貯蓄食料となす

罌粟科延胡索（「アイヌ」語「トマ」）の根塊は瀹て曝乾し以て貯蓄食料に充つ其味慈姑に似たりと云ふ、殊に之を用ゆるは石狩山中、樺太及南方千島の土人とす其苦味を除くには單に之を煮る者あり又「エトルップ」島にては一

定の食土と混じ以て其苦味を去るとなし、樺太にては之を海狗の脂と混和し食用に供す

百合餅

彼が食品中百合餅「トユレップ、アカム」或は「ヲンドユレップ」Turep-akam, s. Onturepなる者あり、是れ百合科中の蕎麥葉貝母「オホウバユリ」、「ウンバイロ」(方言)「トユレップ」(土語)なる根ゟ製する者なり、(Lilium Glehni, Fr. Schm.)根を搗碎し漉過の乾燥精製したる澱粉を「イルップ」Irupと云ふ其糟粕(乃ち「シット」又「シラリ」Shit, Shirariと名けられたる者)を煮て搗碎し之を壓搾し四角形の者を作りて固め(邊緣各九仙迷)中央に小孔を穿ち之を懸けて貯ふ、即ち此餅を名けて「ヲンドユレップ」或は「トユレップ、アカム」と云ふ前年醫學士坪井次郎氏は其澱粉粒を鏡檢し、其形全く馬鈴薯澱粉と一致せるを發見せり、其大なる者は縱徑〇、〇九六横徑〇、〇六四密迷、小なる者は縱徑〇、〇三二横徑〇、〇二密迷を有し、又其化學的成分は固形分八三四、六五%水分一六、五三五%含窒物二、七二%脂肪〇、五五%灰分一、九六七%無窒物七八、二二九%なりとす(東京醫學會雜誌第三卷第十四號八百二十七ページ)

百合科の食物

食土

「アイヌ」は百合科の食物を食品となす者多しエシケリムリム、前葉山慈姑(カタクリ)の根塊より澱粉を製し(Eshkerimrim; Erythronium dens-canis L.)アンラコロ黑百合の根を食し或は煮て獸脂と混し米飯と混し(Anrakoro, Fritillaria Kamtchatensis, Gawl.)ニヨカイ車百合及マサラ、ヲルンベ「スカシ、ユリ」の根は秋季に采し米飯に混し或は他の食品に混し(Niyokai; Lilium avenaceum, Fisch; Masara-orumbe; Lilium dahuricum Gawl.)用ゆる等の如し

「アイヌ」に食土あり、古來より之を食せし者の如く而して現今に至り漸く此習慣を喪ひたるが如し之を一「アイヌ」に質するに其祖父母、父母亦已も其幼時は之を食せりと答ふ、食土は「アイヌ」語に「チエトイ」「エトイ」Chi-etoi, Etoiと云ふ、其土性は未だ詳かならざるも、恐くは彼の珪藻類 Diatomaceae (Grammatophora subtilissima, Pleurosigma augulatum)を含有する土類ならん、蓋し此土類は柔軟なる者にして「アイヌ」語、柔土 Riten-toitoiと稱し槲實(トコンニセイ)を煮て之に加へ、搗拌して餅となし之を食ひ或は野百合、姥百合の根と共に煎て沈滓を生ずるを待ちて其汁を食ふ、多く飢饉の時にのみ之を食するも平

「アイヌ」が衞生上の生活等

時亦食せさるに非ず此土を産する所、處々にあり、「チエトイオイ」『チエトイヲマナイ』「チエトイ、ウシ」等の名を有するの地皆然りとなす、國後島茶々山に珪藻土の積層ありて山を貫く而して其色は茶褐色なり擇捉に於ては其土色白し時に食土として用ひらるゝことあり

之を要するに「アイヌ」は食物の關係に於て

一　食時の時間不規律なること

二　食品攝取に於て不攝生なること

三　粗食なること

の諸点を見出すべし此諸点は彼が疾病殊に消化器病に大原因あることは論を俟たざるなり

「アイヌ」に茶なし然れども我茶の如く飲用し若しくは感冒の際煎用する者數種あり乃ち

一　Omaukushni, Magnolia Kobus.　辛夷　ウハミヅサクラ

二　Shiuri, Prunus Ssiori.　サワシデ　エゾノウハミヅサクラ

三　Seta-endo, Elsholtzia cristata.　ナキナタ香薷

四　Paseni, Carpinus cordata.

五　Kikinni, Prunus Padus.　行者ニンニク

六　Pukusa, Allium victorialis.

「アイヌ」に固有の烟草あり（沙流土人ハバ）未た邦土の「タバコ」到來せざりし前は「エゾユヅリハ」乃ち「リヤハムシ」Riyahamush, Duplinliphyllum humile の葉を乾して細末となし又は白樺木に生ずる菌茸（「アンガワ、カルシ」Pungawa-karush と稱する木茸よりして喫烟の料を作り或は觀音蓮（毒草の部に出つ）の葉を「リヤハムシ」中に混じ用ゆる者もあり、是等の淡婆姑「アイヌ」語に之を「シユップ、ヤイペ」Shupyaibe と云ふ、烟を食ふの義なり

「アイヌ」は性酒を嗜めり、嘗て古來より粟を以て製したる「イナヲカ、アシコロ」又「イナヲ、コロ、アシコロ」Inaukoro-ashkoro なる者ありたれども今は盛に酒を飲むに至れり、兒童婦人と雖ども亦た之を嗜む而して嗜んで沈醉せざる者稀なり、嘆ずべしとなす

「アイヌ」が衞生上の生活等

之を要するに「アイヌ」は食品の關係に於て缺點あり

「アイヌ」に茶なし

固有の烟草

「アイヌ」に酒料あり

飲料水

彼に飲料水なし、多くは河水、溪流又は天然の湧泉「アイヌ」語「シュプイ」を酌んで飲料となす、故に其傳染病の傳播し易き亦た謂れなきに非ず今日に到り之を邦人に學びて地を堀る者あるに至れり

「アイヌ」には嘗て食鹽なし

「アイヌ」には嘗て食鹽なし「アイヌ」種族が古來肉食人種なるとは之を食鹽との關係に於て知るを得べきなり彼は生魚の肉を食ふに鹽類を加味せず獸肉を生食するに於て亦た然り、蓋し「アイヌ」は食鹽を嗜好せざる所以の者は其偶々肉食の人種なるを以てなり「アイヌ」語に固有の食鹽の語なし食鹽を「シイポ」と稱するは邦語の轉訛なるや明けし、乃ち知る、彼や漸々耕作を邦人に學び又或は勸誘せられて農業を勤め或は多少の廣袤ある田地を有するに至り始て食鹽を知り學び、之を望むに至りたるを、然れども今日猶其尊きを知ざる者の如し、其供求は全然之を邦人に仰く、

「アイヌ」は肉食人種なるを以て

嘗て聞く、肉食者に齲齒稀なりと「アイヌ」に於ては實際其甚だ稀有に屬する者なるを知る之を三百有餘の「アイヌ」患者に檢したるに僅に七八名に過ぎず而して其咬面の磨滅は之を比するに甚だ僅少なる者の如し恩師

齲齒と食物

「アイヌ」には齲齒稀なり

小金井博士は一百六十有餘の頭顱に只三回の毎回一齒を齲せる者を記し「タレチツキイ」Tarenetzky は三十八頭顱に一個の齲齒だも見得ざりし事を記したり、蓋し食品の動物性植物性とは齒體の齲不齲に關係を有するや明瞭なり、

因に云ふ、齲齒は「アイヌ」語に「ニマキ、ウトル」Nimaki-uturu と稱す齒孔の義なり

（二）住居

「アイヌ」は嘗て高燥の地を經營して其住所となせり近代に及び地を擇ぶの能を失へり、蓋し近代其生業概して農耕に變じ寧ろ平地に就くを以て利となすに至れり、昔日は轉移遊牧の民俗をなせしも今は其地に土着するの傾向となれり、故に水邊卑濕の地水利灌漑の地其經營する所となり彼が衞生上に大變動を生ぜしなり

高燥の地に住せりと云ふ

「アイヌ」は高燥の地に住せりと云ふ

今は水利の地に從ふ

今昔の變動

昔日は其家に疾病其他の災事あれば其家を燒て去り、其家の周邊に食餌の已に獲るなくんば去り、其來り其去るに於て頗る淡泊なる生活を描き

沙流の部落

たる者多數なりしかども、今は各々土着して其産を世襲す
古より最も土着結合心ありしは沙流の部落となす三十四里長の沙流水流を利し沙璃太より溯て蜿蜒數十里の間十八の部落、點々散在し、四千の民俗は敦厚にして質朴なる生活を送り且つ武勇を以て稱せらる

沙璃太河口の瘴氣

沙璃太は沙流河海に入るの處にあり、此地麻剌利亞尤も傳播し、人々之を病まざるはなし、盖し淡水と鹹水と潮の退滿に由て混合し溜溜遂に空氣を瘴汚するに由る而して數十里の間村邑の不潔物を湊合し來り惡熱四季を通して流行し、爲に今日「アイヌ」は殆んど之に居る者なし

家屋の構造

元來其家屋の構造一定の者に非るも其風土地水に適したる者なるべし「丸太」を以て編み、角材を用ひず、柱に基礎なし地を穿て岐頭の木を植てゝ以て柱楹となし、木材は繩索を以て之を糾結し、鐵釘を用ゐず、而して屋舍の大小は一ならず、大なる者は長さ五六間、幅二三間の者あり之を築造するには先づ屋を作りて樹植せる柱梁の上に載せ、之を葺くには茅、蘆、樹皮草葉等を以てす、四壁は唯々草を編するのみ、往々邦風に則とり板を用ゆる者あり、

其牀ある者

其牀なる者は地面上四五寸の高さに於て板を敷き其上に筵席を加ふるのみ、

移轉式

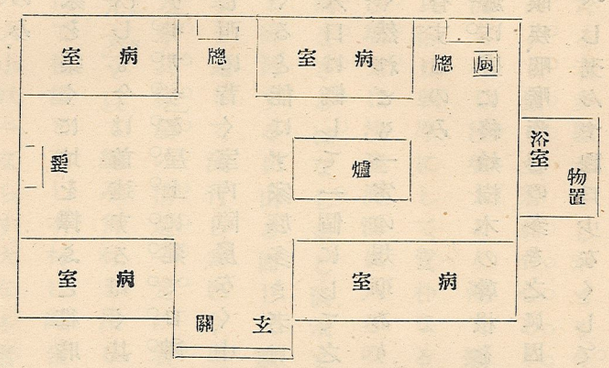
家を築くに地を擇ふと往時は嚴にして凶穢妖祥の事なき清淨の地を擇びしも今は前述する如く甚だ嚴ならず經營し畢れば爐を開き火神を祭り「イナホ」を屋上に建て日神を祭り、然る後ち徙り住す、家屋は大概東に面し西に背く室内障屏なく中央に大なる爐あり而して一家屋中數室を設くると能はず家族多き者は概ね數棟を連ぬ

窓孔

入口は概して一個にして之を東方南方に設け窓孔は之を南方西方に設く然れども一定の規準ありてなき者の如し唯々東牖は其敬信上意義を有するのみ

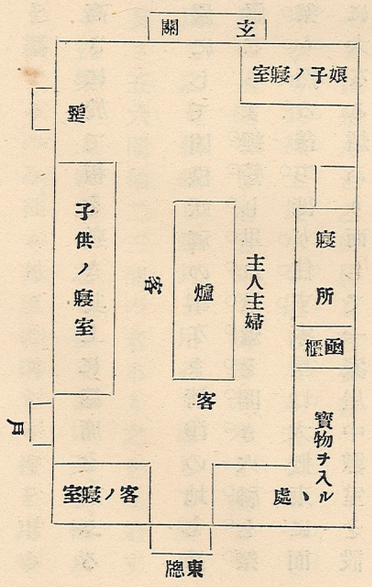
爐

爐は盛に終始樹木の幹根を燒き烟煴室中に滿つも之を意とせず、思ふに眼疾、咽喉疾患の多き之に因るならん其冬季の如き眞に甚しき者と謂ふへし況んや牖戸少なくして空氣の流通を遮絶するに於てをや



アイヌ病室

明治廿五年秋アイヌ矯風部委員「ジヨン、バチラー」氏はアイヌ病室を建築し余をして其醫療を監せしむ



沙流部落「ペンリウツク」の家

寢牀　廚房　廁

然れども空氣の流通は絶体的遮絶せられたるに非ず四邊は編草の壁にして其蔽ふ所の屋の如きも亦た然り、唯々闇淡として烟焔漏るゝと少なく屋梁の内面は漆黑に薫染して光澤流るゝが如し日光も亦た甚だ入らさるは尤も衞生上不利の點なるべし、牀の如きは低くして沮洳たる地を距ると四五寸許氷雪融泮、雨水流注するの際其濕潤甚しき者ありて僂麻知斯、間歇熱、皮膚疾患等多少之に原つくとなきに非す

寢牀は概ね一二尺の高きに於て之を釣り或は架棚を設く、衞生上少しく可となすべきに似たり、往年は我蒲團なる者なく、唯々彼れは苫(トマ)又は席(ムシロ)を敷き其上に起臥せり然して亦た其不潔にして暗黑なるは論を俟たず

其廚房の不潔にして排泄の不良なる言語に絶す

又其廁に就き少しく言を費すべきあり廁の位置は時代と地方とに因て相違ありと稱す古は之を一二町隔たりたる所に設けたりと云ふも今は或は之を十間許隔たりたる所に設け又は之を屋舍の後部に附屬せしめ或は邦俗を學ぶ者多し

「アイヌ」が衞生上の生活等

厠の構造は男女之を異にすと雖ども女子に在ては三尺許の高棚を設け下に穴を穿ち四方遮席を垂る之に登りて事を了す、男子の厠は構造頗る粗にして高からず、十勝の山中にては厠は四柱を設け高さ五六尺の所に於て板を敷き梯子を懸け之に登る

意義甚だ妙

蓋し遠隔の所に設くるは可なりと雖ども、穴は函又は瓶甕を埋めすして直に穿ちたるに任せたる者多し、厠は土語「アシンル」と云ふ蓋し新道の義なり乃ち住所より遠隔の厠に至る迄草茅を排して自ら新徑路を作るを以てなるべし今日之を屋舍の傍に設くるに至て此語興味なし

（十四）「アイヌ」患者表

疾病の多數を占むる者

左に四ケ年間に於て余が治療せる「アイヌ」患者の統計表を掲げたる所以の者は、其種族に於て何如なる種類の疾病が其多數を占有するかを知らしめんとするに外ならず、惟た憾らくは年月僅少にして患者の數も亦四百に過ぎざるを以て統計の果して正鵠を射得たるや否や是なり、

患者の總數三百九十八名中、男子は二百十三人女子百八十五人にして疾病の多數を占むるは梅毒、關節及筋僂麻質斯、顆粒性結膜炎及慢性胃加答兒の四種に過きず今之が比例を考ふれは

梅毒	九％
關節及筋僂麻質斯	十二％
顆粒性結膜炎	七％
慢性胃加答兒	十五％

なるが如し

患者の數を國別すれば日高國よりせる者尤も多數なり殊に沙流の諸部

落平取、平賀、荷菜、仁風谷、荷負、幌去、貫別）よりせる者は全數の過半を占有す之に次て幌別、有珠、千歳、鵡川、室蘭等なりとす素より地の遠近、交通の便不便與て力あり

地名別の全數患者統計の全數と十數人の差異ある所以の者は同人にして數回來りて診を乞ひ其疾病前度と疾病分類上の系統を異にせるに由る

一　明治二十五年「アイヌ」患者表

本年度の「アイヌ」は公立札幌病院よて治療せし者にして十五人中後半ハ施療せし者なり

初診の日	名	字	故里	年齢	姓及業	病名	轉歸
一月廿日	アシクロ（金成アシノ）	聴振	幌別	四十	女	肩胛關節僂麻質斯	治
仝	パラピタ（キヨ）	清	有珠	十一	女	慢性角膜實質炎及翳	治
二月廿三日	クノカンリキ	千	歳	三十	男	右上腿銃創	治
三月七日	シアンラム	沙流村	ピラカ	四十四	男	凍瘡	治

三月廿五日	パロピタ（トメソウ）留造	有	珠	六	男	慢性腸胃加答兒	治
五月三日	金成イシタ	千	歳	十九	女	慢性胃炎	治
六月四日	ナ	ミ	室蘭	十六	女	咽頭炎	治
仝	パンキ、ラムダ（白老）	幌別		二十二	男	トラホーム、眼瞼縁炎、淋疾	治
七月一日	コラシク（中野久次郎）	室	蘭	二十八	男	不全外痔瘻	治
七月十一日	パロピダ	有	珠	三十五	男	大腸加答兒	治
八月一日	アンレイ	浦	河	十八	女	慢性中耳炎、鼓膜穿孔	半治
仝	平野熊吉	沙	流	二十八	男	慢性漿液性中耳炎	治
八月三日	チリエ、アヌコ	幌	別	五十	男	外傷性角膜翳	半治
八月十二日	サイカムピラ	沙	流	六十	男	慢性胃炎	治
十二月廿四日	テムコロ（パンキ、テムコロ）	幌	別	五九	女	右肺結核	未治

合計拾五人

二　明治廿六年「アイヌ」患者表

盡く施療者なり而して本年十月以降の患者ハ私立網場醫院の施療に罹り十月以前ハ公立札幌病院の施療に罹る

初診の日	名字	故里	年	姓及業	病名	轉歸
一月二日	金成イシダ	千歳	二十	女	急性咽喉加答兒	治
仝	ハンキ、テムコロ	幌別	六十	女	右肺結核	不治
仝	アシクロ（金成アシノ）	幌別	四十一	女	肩胛關節僂麻質斯	治
仝	パロピタ清（キヨ）	有珠	十二	女	慢性角膜實質炎	治
一月十九日	太田孝之進	石狩	二十六	漁夫	足外踝癒痕の炎症	治
仝	樺村勇次郎	同上	五	漁夫	葡萄狀腫	半治
一月廿一日	足谷クノガンリキ	千歳	三十一	獵夫	右上腿陳久性銃創	治
二月二日	モコチヤヽラ	有珠	五三	農	僧帽辨膜狹窄及閉鎖不全	不治
仝	キユトツク（菊田德治）	有珠	五八	漁夫	脈絡網膜炎左肩胛關節僂麻質斯	治
仝	シイレシヨウ	有珠	一七	女	肛圍扁平疣贅	治
仝	タチシエイ	有珠	四〇	妻	子宮後屈、ヒステリー	半治

二月三日	畑山トク	石狩	三四	妻	肺尖加答兒	半治
二月十六日	チプルドユ	有珠	五三	獵夫	膝關節外傷性粘液囊炎	治
仝	シテヤップ	有珠	四二	女	第二期梅毒、子宮內膜炎、陰唇扁平コンヂローマ、梅毒性咽喉頭炎	治
二月廿一日	シタシコロ	有珠	四八	男	左濕性肋膜炎、第三期梅毒	半治
三月一日	タカラヒコ	幌沙流	三六	農	第三期梅毒	半治
仝	ハツテンカリ	同上	二四	妻	陰唇下疳	治
三月三日	中野久次郎（コラシク）	室蘭	二九	男	鼻孔癌瘡	治
三月八日	アツクノグル	篠路	四一	農	頸腺癌腫	死亡
三月十八日	エカシテツク	篠路	三五	漁	慢性膀胱炎（膀胱結石）	治
三月廿七日	金成アシリル	幌別	二九	女	慢性肥大性、鼻粘膜炎	治
三月廿八日	パツコ	有珠	二一	女	肛圍陰唇扁平疣贅	治
四月十六日	イコタツクアシ	幌沙流	九	男	急性咽喉炎、濕性肋膜炎	治
四月十七日	ラヲツクグル	有珠	二六	農	トラホーム、角膜翳	半治

四月廿日	サング、ヲツク	幌別	四〇	農	右下腿護膜腫	治
四月廿三日	モンドツク	同上	一八	男	トラホーム瞼縁炎ロイコーマ	半治
五月三日	ハルアッテ	同上	二一	女	鎖肋關節護膜腫其他肘關節及下腿護膜腫	治
四月十八日	シウシグル（木村庄太郎）	千歳	二六	男	骨盤穿貫銃創	治
四月廿一日	バリタクテ（鹿澤バンタ）	同上	六〇	獵夫	腕關節部玻璃切創に因せる手背「フレグモーヂ」	治
五月十日	中野久次郎	室蘭	二九	男	氣管支加答兒	治
五月廿八日	シユーパンラム	白老	二八	男	陰嚢水腫、睾丸梅毒	治
全	ホクトム	舊室蘭	四〇	女	子宮内膜炎	治
全	アンテ、シケ（ヤマニ）（山丹サヲ）	同上	二〇	女	氣管支性喘息	治
全	道川イコトヌム	チサツトナイ	二一	女	慢性胃炎肩胛關節僂麻質斯	治
全	長野リイハウキ	同上	二〇	男	慢性胃炎兼急性大腸加答兒	治
六月八日	イユテウク（シユムンコツトコタン）	チサツトナイ	四三	男	慢性アルコホル中毒	未治
全	道川イカナシヌ	チサツトナイ	二六	農	慢性胃炎	治

全	川野トカシアイヌ	全	二四	農	肩腰僂麻質斯	半治
六月十三日	リクン松（ツ）	室蘭	一九	女	鼠蹊部汗疹	治
全	シラアツテノ（ピバウシユ）	同上	二七	男	慢性脊髄炎（胸椎キフホーヂス）	未治
六月十七日	ウサンケパ	幌沙流	二三	女	慢性咽喉頭加答兒	半治
全	トユレイドツク（ピバウシユ）	同上	四三	妻	胸筋僂麻質斯	治
六月十八日	タマス	幌別	二五	女	第二期梅毒、慢性胃炎	治
全	タ子アシ	沙流	一八	女	慢性胃炎、假面マラリヤ	治
全	コテアシ	同上	二二	男	慢性胃炎	治
全	パロピタ	幌別	三六	男	外傷性肋膜炎兼急性氣管支炎	治
六月廿一日	パンキ、ラムダ	同上	二二	男	トラホーム、パンヌス	治
六月廿八日	金成三郎	同上	一八	男	淋疾、軟下疳、肛圍扁平疣	治
七月七日	リクレウンマ	室蘭	一九	女	急性胃炎	治
全十四日	エトロセ	幌別	三五	妻	間歇熱、慢性胃炎	治

仝	シトマ、アイヌ	新冠	三四	男 漁夫	脚氣	治
仝	ノイ子コロ	沙流	二一	女	慢性胃炎、筋僂麻質斯	治
七月廿二日	橡木ナミノ	千歳	三〇	男	トラホーム、パンヌス	治
仝	黒川イクアンリキ	沙流	二四	男	脚氣	治
仝	平賀パットーレン	沙流	二四	男	慢性胃炎	治
八月四日	シンリツドムピラトリ	ピラトリ	一五	男	トラホーム、パンヌス、瞼縁炎	半治
仝	サンゲ松	平取	三〇	男	龜脊	不治
仝	シレシツカ	同上	五〇	女	氣管支喘息	治
仝	アンレイ	同上	一八	女	慢性中耳炎、鼓膜穿孔	半治
仝	ムツクリ	同上	二八	女	トラホーム、パンヌス、瞼縁炎	半治
仝	サイカムピラ	同上	六〇	男	慢性腸胃炎、胃擴張	半治
仝	コシカヌ	同上	二〇	女	脛骨腐骨疽	治
八月十四日	サイピカン	沙流	三〇	男	足蹠刺傷に因するテフレグモーヂ	治

仝	河村サヌクノ	同上	二一	工夫	筋僂麻質斯	半治
仝	トーナリ	沙流	三五	工夫	脚氣	治
八月十二日	千山（チヤマ）豊（トヨ）	楠古丹	二二	女	臭鼻	治
八月廿四日	平村クツテ（アシアル）	平取	二七	男	急性口峡炎、トラホーム	半治
仝	ハアーシ、テイキ	沙流	一七	女	慢性胃炎	半治
仝	テロシア	平取	三五	女	筋僂麻質斯	半治
仝	サムモンドウ	同上	四〇	女	慢性胃炎	半治
仝	モードツク	同上	二七	女	假面間歇熱	治
仝 廿六日	タカラヒコ（童曲）ポロサル		三六	男	頭部梅毒性汚疱疹	半治
仝	タプカアシ	有珠	四〇	男	右眼球癆	半治
仝	ウレンガアシ	平取	二二	男	脚氣	治
仝	ウレムシテ	仁風谷	二一	男	脚氣、疥癬	治
仝	ヌムシエツトアン	平取	一六	女	慢性胃炎、白内障	半治

八月廿八日	イダクラムシ	新冠	四〇	男	慢性胃炎	半治
八月廿九日	アハザア	沙流	三一	女	梅毒、下腿護模腫	治
全	貝澤クテンカレキ	仁風谷	六三	農	肝萎縮、腹水	死
九月八日	北山サンペ	室蘭	三四	男	關節僂麻質斯、脚氣	治
九月十一日	黒川ウルパシ	沙流	二五	男	脚氣	治
九月十二日	木村コパイケウツク	同上	二六	男	脚氣	治
九月十二日	山根伊三郎	札幌	一四	男	帶狀皰行疹	治
全	白村金六	平取	二二	男	マラリア	治
九月十五日	貝澤コタンレアス	沙流	一八	男	漆瘡	治
十二月九日	白村藤太郎（トユヘレ）	平取	一三	男	急性咽喉炎	治
十二月十一日	金成留造	札幌	八	男	マラリア、慢性胃炎	治
全	金成アシノ	同上	五一	妻	子宮内膜炎、急性小腸炎	治
十二月十八日	山根伊三郎	同上	一四	男	急性咽頭炎	治

十二月十九日	パロピタ清（キヨ）	同上	一三	女	急性耳下腺炎	治
全	金成トメ	同上	一一	女	腺病性中耳炎	半治
全	レカアシ	平取	三	女	急性咽喉炎、インフルエンザ	治
十二月廿七日	コイプケレシ	同上	二六	女	筋僂麻質斯	半治
全	コパケ、アシ（ナサットナイ）		三五	男	インフルエンザ、急性口蓋炎	治
全	テケノヌカラ	沙流	四〇	女	肘關節部挫創	未治
十二月三十日	タ子アシ	平取	一八	女	慢性胃炎	未治
全	モナアシ	同上	二八	女	肩胛關節僂麻質斯	半治
十二月廿七日	金成喜藏	幌別	六一	男	淋疾	治

三　明治廿七年「アイヌ」患者施療表

初診の日	名字	故里	年齡	性及業	病名	轉歸
一月二日	パロピタ清	幌別	一四	女	陳久性耳下腺炎、漿液性中耳炎	治

全	金成アシノ	同上	五二	女	慢性子宮内膜炎	治
全	白村小太郎	平取	一七	男	慢性眼瞼縁炎、トラホーム	未治
全	ポアニイ	同上	一七	女	慢性胃炎	半治
全	チヨイラア	同上	一九	女	慢性胃炎	半治
全	阿チヨウ（カ）	同上	六	女	慢性頭部濕疹兼腎臓炎、瞼縁炎トラホーム	半治
全	ヲテツクヌ	平取	四四	女	慢性胃炎	治
全	シラアテノ（ピバウシユ）		二七	男	慢性脊髄炎	未治
全	ヲテヌマ	平取	四四	女	慢性胃炎、慢性筋僂麻質斯	半治
一月三日	レイカアシ	同上	四	女	急性咽喉炎	治
全	コイプケレシ	同上	二六	女	慢性筋僂麻質斯	治
全	タ子アシ	同上	一八	女	慢性胃炎	治
全	テケノヌカラ	豐平	四一	女	肘關節挫傷后の膿瘍	治
一月五日	ウラヌカラ	平取	三〇	女	インフルエンザ、乾性肋膜炎	治

一月九日	パロピダ	幌別	四一	男	外傷性肋膜炎	治
一月十一日	シムレツク	平取	二七	男	インフルエンザ	治
一月廿六日	ペカシヌ	同上	二年二ケ月	女	慢性濕疹	治
二月十日	養女「ヲテヌマ」の某	同上	一年三ケ月	女	疥癬	治
二月十三日	柏木コトマンデク	鵡川	二五	女	肺結核	未治
二月廿三日	ノイチコロ	平取	二一	女	脚氣	治
三月廿六日	シヨツキイ	同上	一六	女	肺結核、慢性胃炎	治
全	コレアンノ	同上	二〇	女	梅毒性咽喉加答兒	治
三月廿日	ムツケリー	同上	二五	女	トラホーム、眼瞼縁炎	治
三月廿三日	アリノウク（チサツトナイ）		二九	男	乾性肋膜炎	治
四月四日	パツドユレン	ピラカ	二五	男	化膿性鼠蹊腺炎	治
四月十七日	菅柴（スゲシバ）イチ	幌別	七	女	大陰唇扁平疣贅、先天性梅毒	治
四月十八日	パラピタ留造	同上	八	男	足趾の凍瘡に因する鼠蹊腺化膿	治

四月廿四日	フラマット	鵡川ニワン村	三九	女	慢性子宮内膜炎 子宮周圍蜂窠織炎	半治
四月廿六日	菅柴五厘	幌別	一〇	女	先天性梅毒性前頭骨炎	治
四月三日	ハルアッテ	同上	二一	女	先天性梅毒	半治
五月四日	ドンカマレック	沙流	二九	農	急性淋疾	治
五月九日	ラムレクテ	鵡川ニワン村	三八	農	角膜表層炎、慢性トラホーム	半治
仝	伊藤新之助	同上	九	男	慢性胃炎、腹部打撲	半治
五月十一日	コバイケウツク	ペナコリ	二六	農	肋骨々折	治
五月廿日	菅原アシンナン	幌別	一九	女	水泡性結膜炎	治
五月廿三日	バンゲヘーワ	同上	六ヶ月	女兒	便秘	治
五月卅一日	テハイワウツク	紫雲古潭	三八	男	漿液性中耳炎	治
六月六日	エバンゲルナカツヤスヒト（中津安人）	静内郡マクンベツ	二三	男	慢性胃加答兒	治
六月七日	バンキラムダ	幌別	二五	男	トラホーム	半治
六月十三日	カンノモレ	平取	二五	女	胸筋僂麻質斯	治

仝	シケピル	千歳子シコウシ	四一	女	慢性胃炎、ヒステリー	半治
仝	小林三次郎	同上	九	男	急性胃加答兒、疥癬、麻疹	治
六月十六日	バラサマレツク	沙流	三〇	男	慢性梅毒性角膜實質炎、瞼緣炎	半治
六月廿二日	エカシトムヌ	勇拂郡厚眞村	二三	農	角膜實質炎、トラホーム、瞼緣炎	半治
六月廿五日	コタンレアシ	仁風谷	二〇	人夫	慢性胃炎	治
仝	ウドツクアイヌ	同	一六	人夫	慢性胃炎	治
六月廿七日	木下惣吉	樺太	三六	農	慢性胃炎、圓形禿瘡	治
六月廿九日	シシケツプ	幌別	二三	女	慢性胃炎、流產、子宮出血	治
七月四日	テクドーマス	平取	四〇	農	下肢護模腫潰瘍	治
仝	コムルド	同上	三五	女	トラホーム、角膜實質炎、瞼緣炎、禿瘡	未治
仝	ムツケリ	同上	二五	女	慢性胃炎、トラホーム、瞼緣炎	未治
七月五日	ウラケシ	同上	二七	女	慢性胃炎	治
仝	アンデカン	同上	二八	女	間歇熱	治

仝	白村信夫（ノブヲ）	同上	三	男	健全	—
仝	タ子ノ	紫雲古潭	四〇	女	慢性脊髄炎、截癈	不治
仝	ユドンブ	平取	四八	女	關節僂麻質斯	半治
仝	ウサモヌシ	同上	四〇	女	トラホーム、角膜實質炎、睫縁炎	半治
七月十一日	大矢三次郎	鵡川	十一	男	大膿胞狀濕疹	治
七月十四日	ウクワバウツク	同上	一七	男	外聽道フルンケル	治
七月十六日	トカラム	仁風谷	二〇	男	赤痢	治
仝	イケシヤノ	鵡川	三五	男	慢性胃炎	治
仝	イコイレアン（新井田小吉）	同上	一六	工夫	脚氣	治
仝	アンザスヌ	同上	一〇	男	腋窩フルンケル	治
仝	イチヤワシユヌル	ポロサ	二〇	工夫	脚氣	治
仝	アウチヤアイヌ	仁風谷	一九	男	脚氣	治
仝	ポンマツト	平取	二三	女	打撲	治

仝	イソンラテック	平取	二七	男	疥癬	治
七月十九日	白村ツル	沙流	三ケ月	女	慢性胃炎、麻疹	治
七月廿一日	ノイ子コロ	同上	二四	女	咯血、左肺結核	死
七月廿三日	ハウンデグル	同上	二六	男	左肺結核	未治
仝	チヨウカスレ	仁風谷	二七	工夫	脚氣	治
七月廿五日	イタキドツク、アイヌ	平取	三四	工夫農	脚氣　慢性胃炎	治
仝	ハワシユヌレック	同上	二一	農	脚氣	治
七月廿九日	バング、アシンナン	幌別	二〇	女	慢性子宮内膜炎	半治
仝	バンケ、ヘーワ	同上	二	女	脚氣	同上
仝	シユツトマタン	平取	二〇	女	慢性胃炎、關節僂麻質斯	半治
七月卅一日	ハツドーレン	沙流	二五	農	淋疾	治
八月四日	エリワツクコロ	同上	六四	農	右肺結核	未治
八月十日	イクチリレ（貝澤一郎）	仁風谷	一九	男	假面間歇熱	治

八月十二日	テハイワウツク	平賀	三〇	彫工	慢性胃炎	治
八月十五日	コクツチヤマシ	幌沙流	二五	農	脚氣	治
仝	イテコロカ	同上	二二	女	慢性胃炎	治
仝	イナノツカ	同上	二九	農	關節僂麻質斯	半治
仝	河野初太郎	同上	一	男	疥癬	治
仝	モロツカ	平取	二三	女	關節僂麻質斯	治
仝	ドンカマレツク	沙流	二九	農	肩胛脫臼	治
仝	パンケラムレイキ	幌別	二五	農	慢性トラホーム	半治
八月十七日	ウダルペサン	幌沙流	一八	女	慢性胃炎	治
仝	チヨウカスレ	仁風谷	二七	男	慢性胃炎	治
八月廿二日	ヲポ	平取	一一	男	疥癬	治
仝	アカンデアン	同上	八	女	疥癬	治
八月廿四日	テツクラウツク	同上	一四〇	女	慢性トラホーム、慢性胃炎	治

仝	ハルクラ	同上	六〇	女	トラホーム、關節僂麻質斯	半治
仝	レシユパリ	同上	四〇	女	關節僂麻質斯	半治
八月廿七日	シンリツトモ	同上	一六	男	慢性トラホーム、瞼緣炎	未治
仝	シユチロサマ	鵡川	五五	男	環指人咬傷后上肢フレグモーネ	治
九月一日	ウドレンドツク	仁風谷	三〇	彫工	關節僂麻質斯	治
仝	ウコ	同上	一九	女	慢性胃炎	治
九月六日	リコイテアシ	同上	二六	農	脚氣、間歇熱	治
九月七日	パレンウツク	新冠	二七	男	第三期梅毒	半治
仝	シユットレンガ	同上	一八	女	關節僂麻質斯、慢性胃炎	半治
仝	パツカイ	仁風谷	一九	女	慢性胃炎	不治
九月十七日	シモンクル	石狩	三八	女	間歇熱	治
九月十九日	アハチヤ	平賀	三一	女	慢性胃炎	治
九月廿六日	ペチアシクル	仁風谷	二五	男	脛部挫傷	治

仝	エトンブ太郎	沙流	六	男	頭部血管腫	半治	
十月二日	レハウキ	幌沙流	二一	農	鎖骨々折	治	
仝	パンゲラムタ	幌別	二五	農	胸部打撲	治	
十一月一日	金成アシノ	同上	五一	女	急性咽頭炎	治	
十一月十九日	シイタシコロ	有珠	五一	男	護模腫、梅毒性咽頭炎	未治	
十一月廿日	モトパー	沙流	二九	農	間歇熱	治	
十一月十三日	パラサマレツク	幌沙流	三〇	男	慢性トラホーム、角膜翳、瞼縁炎	未治	
仝	ウカタシヌ	仁風谷	一八	女	急性胃炎	治	
仝	英一郎	幌沙流	一	男	疥癬	治	
仝	レウカアン	荷菜	二四	男	慢性氣管支加答兒	未治	
仝	阿サワ	平取	十八	女	膀胱膣瘻	未治	
仝	ナル	同上	十二	女	急性氣管支炎、疥癬	治	
仝	ラムレンガ	日高紋別	廿二	男	右肺結核、喀血	半治	

十一月廿八日	山仁ヨシ	薗室蘭	三	女	白痴（頭部損傷后）	未治	
仝	ホクドム	同上	四〇	女	胸腰肩瀧麻質斯	未治	
仝	シカンドル	沙流	二一	男	慢性胃加答兒	未治	
仝	リリモデン	平取	五〇	女	陳久性左腕關節骨折及脫臼、手指彎直、癱瘡	未治	
十二月八日	レイカ、ウツク	宗谷	廿二	男	慢性僂麻質斯、外傷に因する左上肢運動麻痺	治	
十二月十日	エカシドツククル（千歳ランゴウシ）		四三	男	慢性胃炎、寄生性柔瘡	半治	
仝	ユダシヌ	平取	二九	男	急性咽頭炎	治	
十二月十一日	モナシ	同上	二五	女	腰部瀧麻質斯	治	
十二月十二日	ミナチー（鵡川チン村）		五〇	女	第三期梅毒、實質性角膜炎	未治	
十二月十八日	アマンデ（モイペチ）		四四	女	顆粒性結膜炎	半治	
十二月廿四日	山仁伊八（エカシランゲ）	薗室蘭	四八	男	慢性胃炎	未治	
仝	橋根フチヌカラ	同上	二六	女	慢性子宮内膜炎	未治	
仝	澤ウドルバアシュ	同上	二八	女	慢性胃炎	未治	

十二月廿五日	室ヌヌンゲ（モロ）	同上	三三	女	慢性胃炎、子宮内膜炎	未治
十二月廿八日	ドマシヌレツト	平取	二六	男	肋部打撲	未治
仝	シユットマタン	同上	二〇	女	腰部僂麻質斯	未治
仝	オロシヤ	同上	四〇	女	慢性關節僂麻質斯	未治
仝	ソペア	同上	一三	女	腰筋胸筋僂麻質斯	未治
仝	オマツプクシユ	同上	三	女	百日咳	未治

合計百三十七八

四　明治廿八年「アイヌ」患者施療表

初診の日	名	字	故里	年齢	性及業	病名	轉歸
一一月一日	レウカアン	荷菜	二四	男	慢性氣管支炎		治
仝	エカシドツクル	千歳	四三	男	慢性胃炎		治
仝	シイタシコロ	有珠	五一	男	護模腫		治

仝	澤ウトルパアシユ	室蘭	廿八	女	慢性胃炎		治
仝	山仁伊八	同上	四六	男	慢性胃炎		半治
仝	山仁ホクドム	同上	四〇	女	胸腰肩僂麻質斯		半治
仝	山仁芳（ヨシ）	同上	三	女	白癡		不治
一一月一日	ミナチイ	鵡川	四〇	女	第三期梅毒實質性角膜炎		治
仝	橋根フチヌカラ	室蘭	二六	女	慢性子宮内膜炎		半治
仝	室ヌヌンゲ	同上	三三	女	慢性胃炎、慢性子宮内膜炎		半治
仝	リリモデン	平取	五〇	女	癲癇		半治
仝	テマツプクシコ	同上	三	女	百日咳		治
仝	ソペア	同上	一三	女	腰筋胸筋僂麻質斯		治
仝	ヲロシア	同上	四〇	女	慢性關節僂麻質斯		半治
一一月四日	パラサマレツク	同上	四〇	男	第三期梅毒慢性角膜翳		治
仝	リコイテ	同上	二七	男	心臟辨膜疾患		未治

仝	ドマシュヌレット	同上	二七	男	胸部僂麻質斯	治
一月四日	ラムレンガ	沙流門別	廿三	男	喀血、急性淋疾	治
仝	シユツトマタン	平取	廿一	女	腰部僂麻質斯	治
仝	サワ	沙流	一九	女	膀胱腟瘻孔	未治
一月七日	白井金六	平取	二三	男	急性前竇加答兒	治
仝	パツピユーレン	平賀	二六	男	濕疹	治
仝	クツテアシゲル	平取	二八	男	咯血(肺尖加答兒)	半治
仝	蘆谷ヌブツトリ	勇拂井目戸	四五	男	上口唇纖維腫	治
仝	レイカ、アツシ	平取	五	女	喀血(肺尖加答兒)	治
仝	ウ井ラドツク	同上	四一	女	疥癬、間歇熱、口內炎	治
仝	チヤレモヌツク	同上	一	男	疥癬	治
一月廿三日	阿チヨウ	同上	四	男	急性氣管支炎 腺病性濕疹	治
仝	ヲテヌマ(サンドクノ)	同上	四〇	女	慢性胃加答兒	治

二月四日	パレソウツク	新冠	二八	男	慢性筋僂麻質斯 慢性胃炎、慢性淋疾	半治
仝	シユツトレンガ	同上	一九	女	慢性胸肩僂麻質斯	半治
仝	シパレイク	同上	廿二	男	慢性腰部僂麻質斯	半治
三月四日	サンゲ、ア	平取	四八	男	急性結膜炎	治
仝	イマウドカン	同上	五〇	男	慢性顆粒結膜炎、濕疹、胸部僂麻質斯、	半治
仝	白村コユキラシ	同上	二六	女	慢性僂麻質斯	治
仝	ウアンデマツト	同上	五	女	腺病、疥癬	未治
仝	金成三郎	幌別	二〇	男	假面間歇熱	治
三月廿八日	イテコロカ	沙流長知內	二二	女	急性胃炎	治
仝	英二郎	同上	一	男	頭部濕疹	治
三月三十日	マルタ(パテツカラ)	同上	二六	女	慢性筋僂麻質斯	半治
四月一日	シパシ、ヌテツク	千歳ヲサツト村	三〇	女	急性胃炎	治
四月四日	ドハレアツシ	仁風谷	三一	男	扁平疣贅(肛門及腋窩)	治

全		ドアマプリ	同上	二九	女	扁平疣贅（瘢窩）梅毒性咽頭炎	治
四月五日		アレモン	子シコウシ	二三	女	慢性胃炎	治
全		シクピル	同上	四四	女	慢性胃炎、臓躁	治
四月九日		コレアト、アン	紫雲古潭	三七	女	子宮筋腫	未治
四月十一日		エバシヌ	虻田	三〇	男	護膜腫潰瘍	治
全		シテマツト（一名鷲野松）	静内ヒビサリ	二七	女	慢性筋僂麻質斯	治
四月十七日		パラピタ	幌別	四一	男	流行性感冒	治
全		金成アシノ	同上	五二	女	同	治
全		金成キヨ	同上	一五	女	同	治
全		トムンマツト	同上	一四	女	同	治
全		室ハル	室蘭	二〇	女	同	治
全		ドスアレ	仁風谷	二三	男	右胸筋僂麻質斯	治
四月廿二日		トム、テツク、アイヌ	同上	二一	男	急性氣管支炎	治

四月廿三日		平村ショマンレツク	平取	二四	男	第二期梅毒	治
四月廿四日		イエリ、ウツク	荷負	二五	男	慢性胃炎	治
四月三十日		イヤマノ	沙流門別	廿一	男	肺結核	死
五月十四日		五十嵐カシテドツク	鵡川ルペシペ	三〇	男	頭部挫創	治
全		大塚ヤイタ、アイヌ	同上	四二	男	頭部挫創	治
全		新川コバケアツシ	長知内	二九	男	頭部挫創	治
全		川野シカン	幌沙流	二〇	男	膝蓋粉碎過傷	治
全		木村シハロ	荷負	二八	男	前額挫創	治
全		木村イエリウツク	同上	二五	男	顱頂部挫創	治
五月十五日		イタクロカン	幌沙流	二〇	男	下顎歯槽骨瘍	未治
全		盤木ヘイワ	幌別	三	女	右肺結核	死亡
五月十七日		カツドマム	平取	二六	女	肩腰部筋僂麻質斯慢性胃炎	半治
六月一日		イワノマト（池田ヨシ）	幌別	二五	女	慢性胃炎	治

六月四日	チナシマツト	同上	二〇	女	慢性胃炎	治
六月七日	白河パレタメ	平賀	三四	男	筋僂麻質斯	治
仝	ノンノ	沙流	二	女	急性咽頭炎	治
六月十一日	トルリアン（坂井四郎）	染退（シビチヤリ）	二五	男	滲出性肋膜炎	治
六月廿五日	ホシキ、ハル	室蘭シユブキ	一七	女	陰唇扁平疣贅	治
仝	ウイナレツク	室蘭（チコムブシユベ）	四三	男	左臘部護模腫龜頭缺損	治
七月三日	木村エドユイチ	白老	三三	男	急性腹膜炎	治
七月廿日	石川八之助	石狩	五〇	男	左肺結核	死亡
七月廿二日	エカシコトロ	有珠紋鼈	廿一	男	脚氣	治
八月一日	コタンレツク	長知内	一八	男	結膜顆粒、角膜潰瘍、瞼緣炎	半治
八月三日	タ子アンコロ	平取	一四	女	胸筋僂麻質斯	半治
八月十五日	リコツテ	石狩	六三	男	胸肩膝關節僂麻質斯	半治
仝	モコチヤラ	有珠	五二	男	僧帽辨膜閉鎖不全	半治

八月二十日	イヌンペレツク	虹田禮文華	三二	男	慢性胃炎	治
八月廿三日	ユクノウツク	平取	四〇	男	人咬傷后示指節關節膿瘍	治
九月十二日	盤木ペドロス	幌別	二五	男	右肺結核	死
九月十六日	タ子、アト	紫雲古潭	二一	女	慢性中耳炎胸筋僂麻質斯	治
十月廿一日	シドユマ	新冠	三四	男	慢性筋僂麻質斯	治
仝	白村金六	平取	二四	男	急性淋毒性膝關節炎	治
十月廿二日	ノキ	浦川	四五	男	脛部挫傷	治
十一月四日	ドユアマブリ	ピハウシコ	三五	女	右胸筋僂麻質斯	治
仝	ウシヤタカラ	平取	四五	女	右肩肘挫傷及關節僂麻質斯	治
十一月六日	室春（ハル）	舊室蘭	一八	女	急性口吹炎	治
十一月七日	イマウドカン	平取	五二	男	汎發性癢疹急性扁桃腺潰瘍	半治
仝	トミドツク（桃岩源治）	濱增毛	三三	男	疥癬	治
十一月十二日	モナシ、ノツテ	幌別	三八	女	結膜顆粒兼角膜表層炎	半治

十一月十五日	スケサン	濱増毛	三二	女	腰部僂麻質斯	半治
十一月十六日	平野イタキラドツク	平取	三〇	男	顆粒結膜	半治
十一月十九日	ヌアンテツク	有珠	廿六	女	月經閉止膝及足關節僂麻質斯	半治
十一月十九日	ナンチマツト	有珠	二五	女	第三期梅毒	未治
十一月廿三日	コピリカバ	平取	二五	女	胸筋僂麻質斯	半治
十一月廿九日	イタキチヌ	鵡川モイベチ	五六	男	胃癌	未治
仝	ウキパンデ	同上	三八	女	肋骨部護模腫	未治
十二月二日	川村清吉	宗谷	二六	男	脈管扁平疣贅梅毒性頸腺腫脹	治
十二月三日	ウピシカヌツク	平賀	四八	男	火傷	治
十二月四日	ウイナリム	有珠	三〇	女	慢性胃炎、慢性子宮内膜炎	治
仝	パツコ	同上	二二	女	急性口峡炎、梅毒	半治
十二月六日	ポンヽルプ子マツト	虻田	二二	女	急性咽頭炎胸筋僂麻質斯	半治
十二月十六日	ヌイチサン	有珠	一三	女	慢性腸部濕疹實質性角膜炎	未治

十二月十六日	ニイタツトパ	有珠	二七	男	急性胃炎、中耳炎	未治
十二月十七日	シユツトラテツク	平取	二五	女	小陰唇扁平疣贅	未治
十二月廿三日	チテレ	同上	二二	女	角膜翳、慢性子宮内膜炎	未治
十二月三十日	パツドユーレン	沙流	二五	男	急性僂麻質斯	未治
仝	ウワツテカ	平賀	一八	女	胸部僂麻質斯	未治
十二月卅一日	イタロク	仁風谷	二一	男	慢性胃炎	未治

合計百十三人

自明治二十五年一月至同二十八年十二月「アイヌ」施療患者統計表

病類	病名	男	女	全治	半治	未治	不死亡	備考
傳染	麻疹	1	1					
	赤痢	1		1	2			
	流行性感冒	3	5	8				

染病						發育營養的諸病			
間歇熱	脚氣	梅毒	硬下疳	扁平疣贅	第二期	第三期		筋萎麻質斯	關節萎麻質斯	腺病	濕疹（急慢兩性）
7	16	17		3	2	12	45	6	8		14	5
4	1	20	1	6	4	9	31	18	17	1	36	3
11	17	24	1	7	4	12	63	13	8		21	7
		9			1	8	9	9	15		24	1
		4		2	1	1	4	2	2	1	5	

皮膚諸病									外			
漆瘡	疥癬	疣、贅疹等	帶狀匐行疹	圓形禿髮瘡	癬瘡	凍瘡			脊椎骨瘍及他ノ骨瘍	腐骨疽	腕肘關節脫臼	鎖骨及肋骨々折
1	7	2	1	1	2	1	20	2	2	1	1	2
	3						8	1			1	
1	10	2	1		2	1	24	2		1	1	
	1			1			2					
	1						2		2		1	

疥癬患者は此數に限らず多數の「アイヌ」は之を有せり今爰に出せる數は單に此疾を以て來り乞療せる者なり

| 諸科 | | |

系統疾病		耳科諸病			血行器病		呼吸器病				
臓臙	白痴	中耳炎（漿液性、化膿性）	外聽道炎		僧帽瓣膜閉鎖不全		慢性肥大性鼻粘膜炎	前竇加答兒	急性及慢性咽喉頭炎	氣管支炎	氣管支性喘息
	1	4	1		3	3		1	4	5	
4	1	5					2		9	1	2
		3	1				2	1	10	6	2
2	3	4							1		
2	5	2			3	3			2		

器病			消化器病						
疫咳	肺尖加答兒	肺結核	肋膜炎（乾性濕性）	急性胃炎	慢性胃炎	胃癌	急性及慢性腸加答兒	急性口内炎	便秘	急性腹膜炎	肝硬縮（腹水）
	3	5	5	1	25	1	2			1	1
1	2	5	22	3	34		1	1	1		
1	3		29	3	33		3	1	1	1	
	2		4		20						
		5	7	1	6	1					
		5	5								1

二回喀血を兼ぬ

慨ぬ喀血を兼ぬ

| | | |

(十五) 雜記

終結に臨み「アイヌ」が迷信の興味ある者及び醫事上よ關する八九の小品を列擧し以て好事者の一粲を博し併せて前條の補遺となさんとす

(一) 惡心太だしく流涎之に亞ぐを「エニシ、ペウシ」Enishi-peush と稱す、之を治するに「アイヌ」は先づ自己の小指を屈して之を絲にて縛し、茶碗に水を盛り上に二個の木箸を十字に交叉し箸間よりして四回に之を飲み盡くす、斯の如くにして流涎惡心は治癒すと思へり、又云ふ此流涎は腹中の寄生蟲溺するよりして起るとの話に據る有珠「アイヌ」某

(二) 「シイハッパップ」Shiiapapu なる疾病は第二及第十に出でたり非常なる腹痛痛、又腹鳴、時に急性腹膜炎を指斥する者の如し)をいふ者にして大苦悶大疼痛と起し概ね死を致す者なりと信ぜり、沙流の某「アイヌ」語つて曰く、「シイハッパップ」は神罰に由て來り大罪者に非ざれば侵すとなし腹鳴雷の如きは蟲ありて腹中に擺動(モイモイゲ)するに由りて起ると、

(三) 邦俗にいふ「出來物」乃ち腫瘍を「フップ」Hup と云ふ「アイヌ」以爲らく多數の「フップ」を一身體に生ずれば其家に豐作ありと蓋し「フップ」は癤瘡是

エニシペウシ

何等の奇想ぞ

シイハッパップ

フップ

なり、

鼻腔中に小なる腫瘍生ずるとき(「アイヌ」語 "Etu oshke pon Niyetu oma")は其親族中に懷姙する者ありと云ひ傳ふ「アイヌ」語「ニェドー」Niyetu は痤瘡の如き者を指すならん

ニエドー

(四) 「サビタ」「ノリノキ」=「アイヌ」名「ラスパニ」第十一出産の部を參看せよの肉皮を取り湯を注き攪拌して護模樣膠泥樣の者となし之を以て頭部を洗へば凡て浮渣(フケ)を除き去るべしと信ぜり我邦俗にて婦女子が鹿角菜(フノリ)を以て頭髮を洗ふに等し

琵布

(五) 「アイヌ」に温蒸琵布(パップ)劑あり之を偶然に知り學びしならん亦奇なりといふべし、例之ば腹痛の時、腹部に貼するに麥粉の蒸餅を作り之を「ムクシット」Mukshit と稱す而して其琵布罨法を「ムクシット、コトツカ」Mukshit kotuk'ka といふ蓋し「ムクシット」(琵布)を貼附するの義なり、方法凡て吾人が施す所に異ならず、某「アイヌ」は余が之を施すを見て曰く「ニシパ」も亦「アイヌ」を學ぶかと頗る誇る色あり

淋疾

(六)「アイヌ」は淋疾を識れり放蕩淫(ホチヤウナヤリ)の結果之を獲ると信じ友儕間之を摺する者の如し而して之に對する藥石は甘草根煎(甘草は「アイヌ」語に「ヨーコテ、キナ」Yōkotekina といふ)なり、

船暈

(七)「アイヌ」は船暈を知れり、之を「チップ、シュア」"Chip-shua" といふ、余は嘗て有珠「アイヌ」に之を治すべき藥石あるやを問へり、彼曰く神明(カムイ)に祈るの他なしと(前條藥用植物中に船暈に「レプニハット」朝鮮五味子の藥劑を用ゆる事出づ)

虱

(八) 虱に向て何等の藥品を須ゆるやを質せるに曰く、山椒子の煎液を以て洗ふを可とすと、山椒は「アイヌ」語に「キライゲニ」Kiraigeni といふ「キ」虱「ライゲ」殺す「ニ」樹、即ち殺虱樹の義なり而して山椒の樹幹よりして櫛を作る櫛は「アイヌ」語に「キライ」といふ、虱死の義なり、名稱何ぞ其太だ奇なる

灸治

(九)「アイヌ」も亦時に灸治を爲す、元之を邦人に學びたるなり之を用ゆるの例も亦た隨て同一にして譬へば腰疝痛、足肢の筋痛又關節痛に於ける時の如し「アイヌ」は灸治を「ヤイト、アッシ」Yaito-ash といふ「ヤイト」は我語なり而して灸痕を「ヤイト、コト」Yaitokoto といふ「コト」は痕跡の義なり

割勢

(十)「アイヌ」は睾丸摘出即ち割勢法を識れり、蓋し此種族また一の牧畜種族なるを以てなり今日に於ても一鄉里中之に熟せる者猶は必ず一、二人ありといふ、

余は嘗て「アイヌ」に睾丸摘出術を行ひ「アイヌ」語何如を問ひしに云く「ノクウセ、アノ」Nok-use-ano 又「ノク、ア、ウツク」Nok-a-uk と「ノク」は睾丸「ウツク」取るの意にして「ウセ、アノ」義未だ詳ならず

熊膽

(十一)「アイヌ」は熊膽を用ゆる、概ね腹痛及び食傷に於てする者の如し其他太だ珍重せず時に邦人と交易し彼の紅友を獲るの媒とするを以て快となす蝦夷風土記云。大抵用熊膽、月福(エブリコイヤマ)利過、一計麻(ニ)、と蓋し熊膽を尊ぶ未だ必しも斯の言の如くならず、

「アイヌ」種族の一部ハ食人種なりき

(十二) 古代に於て「スキイテン」八種は食人種 Anthropophagen なりき、現今にては亞非利加、亞米利加及太平洋、南洋諸島に徃々此食人種を見るのみ而して臺灣の土蕃、(兒南(楊子江南岸)の土民の如きも亦然りとなす我「アイヌ」の一部も亦嘗て食人種なりし者の如し殊に十勝土人は其昔時に於て之を爲せり(畏友高畑宜一子の評者に據る)獨り飢饉の時に於て人を食ひしのみに非すと云ふ、

然れとも室蘭、有珠、沙流の「アイヌ」は往時より未だ嘗て此風なかりきと云へり某氏の言に據れば沙流の深山中及び上川山中の「アイヌ」は多少食人種なりし者の如し曰く彼等の「ユカラ」(戯曲)中是等の事を明言すと

(十三)「アイヌ」口碑に云く深山には嘗て山人(ヤマヒト) Kimun-ainu(キムンアイヌ) なる者ありて時に人を害し人肉を食ひたり或は又「ウエウン、アイヌ」とも稱し人皆之を恐れたり盖し是往昔の事に屬し今日は未だ嘗て是等の事なしと、之を以て視るに「アイヌ」種族中に食人種ありたるとを推知すべきなり

(十四)「アイヌ」は負傷せし者を嫌惡すると甚し若し家族中、負傷者あるときは他家の新夫婦は病を訪ふて其室に入るとを得ず、縱令亦負傷者の婦と雖も其傍に在て紡績又衣裳を縫裁するとを得ず

(十五)「アイヌ」語に截癰を「イッケウ、カムイ、コロ」と稱す、其詳は之を前條に陳せり而して其原因は惡魔の崇る所となせるなり然れとも惡魔の崇に因憑せざる截癰を區別し之を「レイチ、タシユム」Reine-tushum と稱す、兩下肢の知覺及運動麻痺して腰下全く力なき證を謂ふ假令へば脚氣に於ける下體麻痺の如き者是なり

レイチ、タシユム

(十六)　私考

(一)　獨立の精神なく文化なきの人種は滅亡するある耳、嘗て印度、日耳曼種族の一人種に「ケルテン」人種(又「ケルチイ」或は「ケルタ」と記す)なる者あり、耶蘇紀元前三百年の頃より歐州の大半を占領し與盧(ガール)、比耳基(ベルギー)、不利顛(ブリテン)、加列德尼(カレドニア)、比伯尼(ヒベルニア)の五邦に分割し勢頗る勇猛にして慓悍の種族なりき、彼は二三世紀の間に於て北以太利、南獨逸、イルリア、セルビア等を侵畧し遂に希臘の大半を奪ひ、小亞細亞の西部に及ひたり、元來此種族は勇猛なるにも拘はらす、其一般の風俗は相糾合して制度を立るの威權なく、永遠に持續する獨立國を形成するの氣象なく、亦た其固有の文化を發揮するの能力なく終に漸を以て日耳曼人斯拉瓦尼人(今の魯人)の壓倒する所となり又次て羅馬人の服從する所となり遂に羅馬風に融化し其固有の特質は全然磨滅し其所謂「ケルテン」人種なる者は全部の性質として滅亡するに至れり今日其遺孽は僅に歐土の北西角隅に棲息(ブレタンニユ、ウヰールス)愛爾蘭、高地蘇格蘭するのみにして其言語も亦た唯好事

者の玩弄する所たるに止まるに至れり

他の印度日耳曼種族例令は羅馬尼人種(佛蘭西、以太利、西班牙等)日耳曼人種、斯羅瓦尼人種(魯西亞)は萬般の點に於て隆盛強大の極點を極むるにも繫はらず此「ケルテン」人種が何が故に今日の澌滅を來したるか是れ問はすして其人種全體の氣質に於て、持續せる獨立を形成する能はす、徒に侵畧を主として、內を治めす、又文化を發揮するの力なかりしに職として是れ由るなり、

顧みて一たび我蒙古人種若くは東北亞細亞の群小種族を見れば果して何如、此の「ケルテン」人種と運命興廢の相髣髴せる者あるを見るなり露領西比利亞の地に於て朱古察(チエクチエン)人固哩雅克(コルエーケン)人等の堪察加土民を始とし韃靼人雅各德(ヤクーテン)人、喀爾瑪克(カルミユックン)人、布哩雅特(ブリイエーテン)人、通古斯(トングーゼン)人、鄂倫春(オロチエン)人、瓦爾喀(ゴルヂイ)人、滿渾(マングン)人、拉穆(ラムー)土(テン)人等の蒙古人種及通古斯人種の兩種族に在ては儼として一獨立政府を形成せる者に非す、寧ろ社會と外交に殆と一勢力だも無き者にして他の強國の管轄下に於て僅に其棲息を全ふする者と謂ふべく、早晚或は滅亡に歸するか或は永久、一の奴隸的人種と爲て屈服し到底獨立の人種となる能ずして融化し去るかの二に過きず、其將來豈に亦憐むべき者に非ずや」嘗て聞く此等の種族は其往昔に在て堅昆、高車、烏揭、匈奴、鮮卑、蠕々、突厥、蒙古、女直等と稱し各自樹立し勇猛にして強鷙なる種族なりしを然れとも彼等は嶮秣の烈火に投ぜる如く炳々乎として一時の赫灼と咄嗟の強大を致したるに過きず故に終に斯羅瓦人の蹂躙に任せ歷史上、政治上已に滅亡に歸したる種族と爲り了したるなり、是皆人種が消長興廢の天理に屬すと雖とも豈亦之を將來するの理由なしとせんや

「ケルテン」の運命と通古斯人、朱克察人の消長と形跡相肖たる者は我「アイヌ」種族なり

斯人種は嘗てより豪勇にして強悍獰猛武を好み鬪爭を事としたる一人種にして之を古に考ふるに今日の本州に於て景行天皇の朝、駿河、遠江、美濃、加賀、以東以北は彼の占領せし所なりし者の如し然るに今日に在ては氣息奄々僅に相屬する一微弱、一無氣力なる種族と成り獨立せる國家を

經營すると能はす寧ろ屈服に甘して之に慣從し了し又素より外交の衝に中るの智力と才能を欠如し惜哉彼の今古に於て文化なる要素は未た嘗て發揮するの芽蔀さへ是れあらず、如今僅に有珠若くは沙流若くは十勝原野又山間の一隈隅に呼吸して樵漁の貧生涯を喜ふに過きず、戰ひ爭ひ以て權限を維持し且つ之を重んするの力なく、鯨面侏髪徒らに風采の好惡に誇り、啾啁啞々、談論鼻猥にして小康を是れ喜び、益々窮蹙し愈々退縮し一萬六七千の頭數は今より三四百年の星霜中に將に滅亡せんとするの狀況を現せり

夫れ人種にして自ら獨立するの精神なく自ら其固有の文化を形成して之を發揚するの氣力なくんば唯々亡ぶるあるのみ而して今此の亡ひなんとするの種族に向ひ之が保庇を今日に企圖せざるべからす若し漸滅して盡きんか、是れ國を治むる者の過ちなり

(二)「アイヌ」種族の減少と之が保護の道

種族の減少は年來之を論する者多し然れども縦令ひ說の正鵠を得たる者少なきにもせよ左の事實は誠に故なきに非るべし

一に曰く優勝劣敗

凡て野蠻なる人種には彼の所謂る文明開化なる者は一の毒物ありて人體に動作する者の如く、同しく影響するものなり而して此毒物は實に我邦人なりき、數十年來邦人の進入、開墾拓殖、山林の占領、鹿獵の制禁漁場の壟斷等は生存競爭上、日に益々彼を究迫し來れり、彼は爲に往年の自由と快樂とを喪ひ殖產の道に勉るの勇なく、年々益々其魯鈍を極め、貧瘦の境遇に陷れり、縦令ひ彼の體格は强壯にして彼の資產充實能く生存競爭の難衝に當りて儼然たるもの其中に存せざる者なきに非ざるも其大體は已に文明開化の毒物に眩瞑せられ、今や其優勝劣敗の理をして眼前に現出せしめたり

二に曰く衞生上の缺點

斯の野蠻なる種族に於て素より衞生の如何を望むべからずと雖ども此關係に於ける缺點は其人種の減少に莫大の影響を有するは論を俟

たす殊に傳染病の如きは此種族を直接に滅亡せり、盖し野蠻人種は傳染病に對し甚だ感染し易きの性を有せり、故に之を舊記に徵するに此種族は文祿元年以降數十回疫病、痘瘡、麻疹等の流行を受け毎回必す多數の死亡を致せしなり、人はいふ優勝劣敗は滅亡の最大原因なりと余は方さに傳染病の流行と衞生上の缺點を以て之が最大原因なりと道はんとす

痘瘡の流行、疫病(窒扶斯、肺炎、流行性感冒)の蔓延は已に人の稱道せし所なりと雖ども是より猶蒼黔中に潜伏して迅速に蔓延し猛惡なる荼毒を流し以て子孫に到る迄泯絶を逞しうする者は梅毒を措て他なし、斯疾患は隱密に蔓延し强壯なる種族をして將來全く尫弱にして病羸禁ゆる能はざるの人とならしむ

衣服と肌膚毛髮の不潔なる、食物の粗野にして調理を缺き、其品質の擇はざる且つ又飲食の不規則なる、住居の卑濕沮洳にして内は榾柮薫染換氣の宜しからざる、皆な一時刻一刹那も人生欠くべからざるの衞生を誤れり、一たひ之を思ふて誰れか寒心せざる者なからん、

「アイヌ」は酒に沈湎するの性癖ありて荏苒年所を經るに從ひ生業を誤るものなきに非す然れとも世人が想像する如く未だ嘗て非常に「アイヌ」の健康を害し其體質を虛弱ならしめ以て其種族の存亡に及ぼせし事實を信する能はざるなり

以上の事實は彼種族をして減少せしめたるならん苟も之にして事實たらは保護撫育の道は之に由りて出つへきなり

西比利亞土人減少は、一に魯人種が移殖し來るに因ると雖も魯人が土人を虐待して奴隷となし其營業を奪ひ無辜を殺戮せしと多きに因れり殊に堪察加人が數十年此境遇に陷り年々人口を減少せしが如きは著明なる事實なりき是等の殺戮、壓制、虐待は未た嘗て我邦人の夢にたも「アイヌ」に加ふると能はざる者なり

嗚呼「アイヌ」は已に政治上の亡滅を致したると茲に久し今や將に種族上の亡滅を遂げんとす之が保護の策果して何如

余は前條の事實により

一「アイヌ」をして勉めて優勝劣敗の場裏に立ち入らしめす施政の點を特別にし撫育誘導其生業を恢復し自營自活の道を立たしむる事

二　衞生上の缺點を打破し衞生の必須を敎へ、衣食住の點に付き多少の習慣を改むると

の二より他なきを信するなり

第一の點に對しては先つ今日迄彼に與へたる不利の弊害を除却するを勉むるを必要とすべし拓地殖民の施政は必す「アイヌ」保護撫育を伴ひ其生業の道を恢復せしむるの法を立つべし三十年間土人の免稅、一萬五千坪隨意の特典等は當路其人の大に考量すべき所なるべし曾て聞く魯政府は土人の滅絕を憂へて四個の問題を發したるを、曰く

（一）　土人の消滅豫防策と其生存の道を立る方法何如

（二）　土人生業改良資產發達の方法何如

（三）　土人の管理方法何如

（四）　土人智識發達策と之をして人類の幸福を享けしむる方法何如

是等の方法は「アイヌ」保護論者が大に參酌商量すべき者にして施政者が一日も忽諸に附すへからさる者ならん

第二の點に對しては少しく詳細に論及せんと欲するなり抑々彼が衞生上の缺點なる者は已に再三陳述せし如く衣食住に於ける衞生の不完全種々なる迷信と傳染病に對する觀念等にして之を打破するは目下の急と謂はさるを得さるなり

「アイヌ」に先づ敎ゆべきは沐浴の點なり彼が身體の多毛なるや能く穢垢を留め皮膚の疾病を起すと太た易し皮膚は縱令ひ柔弱の如きなるも我に在ては外界に對する堅厚なる甲介なり、この甲介にして損傷を蒙らんか不潔常に之を纏はんか疾病の之に乘する甚た便宜なるを見る諸般の皮膚病、梅毒、結核が此種族に多き實に已むを得さる者と謂ふべし

余は近年この種族中に多數の肺結核を目擊し其原因の實に玆天性なるとも亦頗る多數なるを知れり、其他痘瘡の蔓延は此皮膚の不潔に由て然る

べきは論を俟たず皮膚の衛生豈に蔑如に付すべけんや肌膚の沐浴に伴ふべきは素より衣裳の洗濯なるべし襯衣は晝夜換ゆるとなく垢汚浸染して永く脫せす皮膚の狗臭に兼ぬるに衣裳襦の汗臭垢臭を以てし其不潔眞に繼野の性質を表示せり今にして此の敎ゆべき人種に敎ゆべからずんば或は時を失はん宜く沐浴の習慣を與へ皮膚の貴重なるを諭告し洗濯の必要衣服の交換を說き之が衛生の一端を敎ゆべし

彼に腸胃の疾病多し其原く所概ね食事時間の一定せざる事食物攝取の宜しきを得ざる事（粗食不調理）等に在る者の如し吾人は彼が食膳の美を欲せず唯々彼に注意せんとするは此二點なり但し種族の異なるや亦た風俗を異にす我食膳の献立を移して彼の献立となさんとするに非す況や氣候の異なる嗜好を殊にするに於てをや是れ食物の點に於て敎ゆべき者の大に顧慮すべき所なり

住居の經營は「アイヌ」に於て大に其失あるを見るなり蓋し昔日は多少轉移遊牧の民俗なりしも近時は生業概して農耕となり其地に土着するの傾向となり農耕上常に水邊卑濕の地又水利の地を經營する習慣となれる者の如し家屋は概ね牀低く空氣の疎通不良なるか爲め不潔汚穢甚しとなす之に加ふるに「アイヌ」第一の鍾守圍爐裡なるものは常に烟燻を以て室内を熏染し隨て眼疾咽喉諸病の原因となるの例尠しとなさす若し「アイヌ」に告けて「汝の「アペカムイ」は疾病の原因となるべし」と言はば「アイヌ」の驚愕は尋常ならざらん蓋し「アペカムイ」（火神）は醫療を司どるの神なり

住居の衛生を欠くよりして生ずるは僂麻質斯、慢性胃加答兒、厠氣、疥癬等なりとす此種族が此等の疾病に罹れるもの多き實に驚くべきものあり家屋の制度を一變し排水の工夫を敎へ以て健康を保全するの策に出でずんば人種滅亡上大關係あるを信ずるなり

「アイヌ」に種々なる迷信ありて疾病の原因を我身の不攝生に歸すると稀なり惡鬼、神罰、姙婦の祟、動物の祟、蟲の祟寄生虫等を以て其原因と信し徒

に卜占の徒に依憑して祈禱是れ事とし或は草根木皮に依りて之を治せんとし情況誠に哀むべき者少しとせず殊に痘瘡、腸窒扶斯に對する迷信の如きは彼の種族減少に關し莫大の影響ありしは歷々視るべきなり

其他一言すべきは彼の壯丁が漁獵耕作を打棄して之を柔弱なる婦女子に一任し、自らは去つて工夫測量人夫等に雇はれ日に些少の賃銀を博するを以て無上の快樂となすの一事なり此賃銀は彼に於て博奕、酒色の資とならざるもの少なし、隨て不攝生相襲ぎ身を破らざる者稀なるを見る是れ亦衞生上注意すべき點なりとす

今日必要とするは「アイヌ」部落に村醫の制を設け村醫には比較的高等なる月俸を給與し、職責として醫療に兼ぬるに衞生の監督を爲さしめ、殊に流行病に際しては避病院の如き者を設置し、また平素は「アイヌ」に身體の養生法一班を敎示するを必要なりとす、燧人氏の腥臊を化せし如く此種族を敎化して以て之を保護し永く至大の皇恩に浴せしむるは當路其人も亦た嘗て考慮せし所ならん

垂死の老人世間に無用なりとし其罹病に際し之を救はざるは不仁甚だし、偸盜の水に溺るゝを見てまた之を救はざるは不仁なり、「アイヌ」が滅亡せんとするを知り之を傍觀し其保護の必要を見て之を作さゝるは同しく不仁なり、彼や政治上滅亡せし事久し嗚呼今や其種族は滅亡せんとす普天の下率土の濱王臣ならさるはなし「アイヌ」保護論の出づる亦已を得ざるなり

種族唯於島嶼蕃。鄉閭同血世通婚。
生靈二萬年々減。當路無人策保存。

（三）古の「アイヌ」と今の「アイヌ」とは殆と別人種なる如き感を來すは何に因するや

景行天皇の二十七年武內宿禰東國より還て奏すらく東夷の中日高見の國あり其國人男女推結文身し人となり勇悍、是れ總て蝦夷といふ亦土地沃饒にして曠し之を擊て取るべしと蓋し今日「アイヌ」の祖先が勇悍なりしは論を俟たす一史家の言に越の八咫の蛇、長髓彥の如き、又往古屢々民の蠹毒たりし土蜘蛛の如き皆「アイヌ」種族なりと云ふ、而して此種族や景

行の朝よりして反服常なく陸梁跋扈、數々王師を惱ましめ、或は時々外征の際其徴募に應し、雄畧の朝新羅を征す蝦夷五百之に從ふの類たる等は史乘に徴する所なり、乃ち仁徳の朝蝦夷反して田道之を討て敗死し、舒明の朝上毛野形名之を征し、齊明の朝阿部臣比羅夫が數回の征討となり、光仁の朝、大伴の駿河麿陸奥蝦夷を討ち、紀古佐美、坂上田村麿等前後七八年兵或は敗れ或は勝ち賊兵出没常なかりしが、仁明、清和の朝に到り、出羽、渡島の蝦夷始めて我征服に就けり爾來蝦夷との交渉暫く相絶止したるが足利の世に及び武田信廣松前に據りてより以來蝦夷往々之に服從せず時に小反亂屢起りたれとも毎常我兵力に擊破せられ享祿、天文以後の叛亂は松前藩兵の戡定する所となり、寛文八年「シャクシャイン」の亂後亦小叛亂だも見ざるに至れり、之を概するに往古蝦夷は其勢甚強く屢内地を蹂躙し良民を殺戮し時に或は歸順して位階を受け金祿を博したる事ありしも叛亂絶にすして征夷の軍屢々起り數十百年の間は王師を惱ましめたると少なからず、而して蝦夷尤も猖獗を極めたるは光仁、桓武の朝五十余年の兵役田村麿戡定の時なりとす或は云ふ是時大纔韓日本に侵入し土人を煽誘し兵亂を本けたりと、未た信を措くへからざる者あり

今當今の「アイヌ」人種を見るに其風物人情總べて其萎縮其墮落を致したる極點といふへく之を往古蝦夷に比して殆んと別人種に非さるなきかの感あり其天性本來温順にして且質朴更に浮華輕薄の俗なく其氣質柔弱にして怯懦偏襲、更に進取の勢力なし而して人倫に於て或は上代の諄風を存するあるも今や全く相團結して糾合し以て外事に當るの勇なく昔日の毫強は益々消耗して僅に漁佃熊獵の一事に存して他に見るへきものなし、又其生計に至りても其怠慢遊惰なると甚たしく新作爲の精神に乏しく家を築くに唯々已れの居んと欲する所に從ひ食ふに時なく飽けは則ち終日食はす飢れは則ち深夜と雖とも亦食ふ而して生食を常とし或は瀹て之を食ひ、鹽鹹を用ひす一言之を蔽へは其俗野卑にして蠻なり而して當今内地人と雜處親近するに到り陋習大に改まりたるも却て浮薄狡黠の風に浸染し其風愈頽敗蕃靡に歸せり

彼に文字なく歴日なく年紀なく文献徴するに實なく假令之を口碑に傳ふるあるも往古蝦夷の豪勇にして我と兵を交へし事あるを知らす如何なる英雄が彼の種族中に勃興し如何なる事業を企圖したるやを知らす僅かに「ポニヤウンペ」の武勇談を瑣々たる謡曲に存するあるのみなり、夫れ口碑は永く存して傳ふる者に非す假令如何なる事實に富みたりとするも之を記載するなくんは永く鴻蒙に属せんは論を待たず、故に益々星霜を經るに從ひ彼等の祖先の武勇と強剛とを想ふに由なく所謂獨立なる國家的觀念なる者は釐毛も發揮し得さりしなり、之を要するに往古よりして其文化學問なるものは缺如し縦令些末の禮義を重んするの淳浴を交へたりしも教育は一定の度に止まりて更に進歩せす以て茫茫今日の懦弱を將來したる者といふべし、優勝劣敗は天の常理なり今や彼は我と競爭場裡に立ち日に月に益窮蹙して終に滅亡せんとす

偉網生魚足療飢。　酡顔笑把掲鬚毘。
彼無文字蠻難兒。　獨怪摩崖一片碑。

「アイヌ」種族は其外貌の雄偉にして獰猛なるに似ず又軀幹大にして骨相なるに大強似す何が故に此資性柔弱の内に籠れるを致したるか、思ふに全く文化風教の彼に發揮して勃興せさりしに歸せずんはあらす嗚呼甚哉文化風教の有無は人種の隆起と倫落に關する實に著明なる斯の如き」而して彼の人種を見るに益々減少するは其事實なり嘗て光仁、桓武の朝に於て彼の武力は少なくも五万を下らす其人口之に二三倍したるや素より疑を容るへからす已に斯の如くなりしも今日に於ては僅に一万五六千の徴なる活力に減し來れり其理由として歴代の爭亂、飢饉、疫病其他の天災等固よりとなり雖ども人種の生存競爭亦之に關すると大なるなくんばあらず之を記錄に徴するに山韮滿州と頻年交易し往々負債を生して辨償し難く爾來質となつて韃靼に赴き年々其數を加へ彼地に終生奴隷となり了したる者あり

彼の人種は一の限畫せる純乎たる人種なりしも其歴史上よりすれは千有餘年前より肅愼靺鞨と相交通し滿州山丹と相貿易し茫茫星霜の經る相久しき彼は人種學上變化したる形跡なきにしもあらず其骨格を檢す

るに純然たる「アイヌ」種の他に蒙古種の骨格を混するものあり、蓋し數百年來の混淆にして一朝一夕の經營にあらす唯々其混淆の比するに微少なる所以のものは彼人種が一般の性として一居所を保ちて水草を逐ふの遊牧者に非ざるを以てのみならす亦た地理上限局せる一島嶼を形成するあるを以てなり、現今に及び彼は益々邦人と混淆し彼の族中我が貧者の子を養ふ者多く彼の純乎たる種族は將に大に減少するに至らんとす

而して頭顱學上の點よりして見るに樺太「アイヌ」が蝦夷「アイヌ」よりも其頭顱の格其特標を寧ろ保存し有るは古來其滿州と交通の頻繁なるにも關せす一の奇なる現象といふべし、人あり曰く樺太「アイヌ」は古來よりして頗る團結の氣象に富み他と交通を嫌ふの精神ありて蝦夷「アイヌ」の如く未た慓佻ならす、此故に「チョッコ」「ゴルヂイ」種族との貿易は厚岸、根室、沙流等の種族よりも甚た微少なるものなりき其頭顱骨格の蒙古種ならさるは此理に因すと夫れ或は然るあらんか

以上余は「アイヌ」土人に就き其將來の運命と其人種に關し平素聊か懷く所あるを反覆論述したり、以て「アイヌ」醫事談全篇の收結となすに足らんか、

髯父敲胸謳短篇。婦翻裾袖舞翩翻。
喔咿嚘舌天眞耳。詞帶古音便自然。
嘗聞土窟住侏儒。傳道塑泥爲百壺。
盤古以前荒誕事。牽强猶說土蜘蛛。

		誤	正
九　葉	六行目	傳着	傅着
十一葉	十三行目	秡	祓
廿五葉	三行目	多に	多々
卅五葉	十三行目	Sambucusracemosa	Sambucus racemosa
卅八葉	九行目	Langaaro	Langaard
五十二葉	十三行目	ogovata	obovata
五十四葉	十四行目	Glehni	Glehni
六十一葉	十三目行	Vietori alis	vietoriɑlis
六十八葉	八行目	Saga	Sapa
同	十三行目	Saqa-kankitai	Sapa-kankitai
六十九葉	十三行目	Kisarotor	Kisaratop
七十葉	二行目	Corpns	Corpus.
七十一葉	二行目	genwinkel	genwinkeln.
七十一葉	四行目	Nasenrnookens	Nasenrueckens
七十一葉	十二行目	Paro, Para, chars, chara	Paro, Para, Charo, Chara,
七十三葉	十行目	Pherynx	Pharynx
七十五葉	八行目	“Lenden,”	“Lenden.”
八十一葉	十三行目二段目	womitman Itagi	Itangi.
八十五葉	十行目	Iknruru	Ikururu.
九十葉	九行目	Etu-kemun-shiyeye	Etu-kemnu-shiyeye
九十六葉	八行目第三段目	哀弱を來し	衰弱を來し
百三十七葉	九行目	否やの一なり事某氏云く	否やの一事なり云々
二百廿四葉	十三行目	偉網	僅網

明治二十九年十二月十八日印刷
明治二十九年十二月廿六日發行

（非賣品）

著者兼
發行人　醫學士　關場不二彦
石狩國札幌區大通
西四丁目六番地

印刷所　北門活版所
石狩國札幌區大通
西四丁目壹番地